
トランプ四重奏（カルテット）

恢坐志津那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カルデット
トランプ四重奏

【Nコード】

N7916G

【作者名】

恢坐志津那

【あらすじ】

日本のパラレルワールド“ジャンハン”。そこは、紫色の太陽が昇り、赤か青の月が闇夜を照らすハートブレイカー達の世界。心を壊すことをなりわいとする職業、ハートブレイカー。本来、世の中に絶望した者達になる職だが、自ら望んでなった者達がいた。彼らのチーム名は、トランプ四重奏。トランプは、彼らの世界の言葉で、“異端者”を差している。ハートブレイカー界の頂点に立つ最強最悪の彼ら四人に与えられた使命、それはトランプ回収だった…。この四人最強につき………要注意！！

- 始動 - (前書き)

死神のお仕事を読んでない方でも、気軽に楽しめる小説です(・ω・)
／

- 始動 -

「それで…親方は何って？」

三十階建てビルの屋上。

黄色い髪に小さなクロの帽子を被った青年が訊いた。

年は二十代前半頃だろうか。

服装は、英語で言葉が書かれたＴシャツに黒いベストを羽織り、青っぽいジーンズ姿。

茶色い瞳が、青い月を鮮やかに映していた。

口元には、わずかに笑みが浮かんでいる。

「『おまえ達には、ほとほと愛想がつきた』って言葉から始まって、延々と一時間お説教。その後は、特別指令が出されたんだよ、黄^{キルイ}涙！。」

燃え盛る炎のように紅いサラサラ髪を持つ少年が答えた。

こちらは小柄な体格で、歳は十代後半ほどに見える。

山吹色の大きな瞳は、黄涙というらしい青年を真っ直ぐに見つめ返している。

右目のすぐ下にホクロがあった。

白いポロシャツに茶色いベスト、ラフなズボンというスタイルが、少年のあどけなさともスマッチしている。

「特別指令？」

「そつだよ。えーつとね…」

「俺様達“トランプ四重奏”^{カルテット}ってチーム名とかけた、ふざけたゲーム。日本に行って、トランプを集めろつてよ。」

頭の後ろで腕組みをして座り込んでいる青年が答える。

無造作にはねたオレンジ色の髪と、桃色の瞳が特徴的だった。

革ジャンに黒のカーゴパンツという服装から、歳が十代後半ではないかと思われる。

耳には、親指大ほどの長さの銀色の輪ピアスが付けられていた。

「もう！僕が説明しようと思ったのに…横入りはダメだよ、白薙^{シロナギ}！」

「おまえの説明は、“あー”とか“えーつと”とかが多くて時間がかんだろつが、紅羽^{クレハ}。」

「うー…まあ、いいけどー。今度からは気を付けてよね…。」

白薙に言い負かされ、紅羽は体育座りで口ごもった。

「なるほどね…少しは退屈しのぎになりそうかな。」

「…いいのか？我々三人だけで、勝手に承諾してきたが。」

月が一番よく当たる位置に立っている青年が訊く。

顔の左半分を覆い隠すほど長い漆黒の髪と鋭い青の瞳が、青年がクールな性格であることを物語っている。

緑色のパーカーに紺色のチノパンツ…彼もまた十代前半ほどだろうか。

ズボンのポケットから耳にかけて、何かイヤホンのようなコードが伸びていた。

「構わないよ、アオカゲ蒼影。断ったら、破門とでも言われたんだろ？」

「うん、そのとおり！破門されちゃったら、僕達行くとこ無くなっちゃうからねー。それにね、クリアできたら、一年間の自由行動と三年間の統率者権がもらえるんだって！」

これはやるっきゃないよねーと、紅羽がガッツポーズをしてみせる。

「俺様は自由だの、統率者権だの、どうでもいいんだけどよ…独断行動しても破門って脅されちゃったからな。嫌々ながら、やってやるぜ！」

そう言って、白薙はスッと立ち上がる。

「すっかり本音が出ちゃってるね、白薙。」

「へっ！こんな高え所に居りゃ、誰も聞こえやしねえよ！」

「ふふっ…そうかもね。じゃ、そろそろ行こうか…日本へ。」

黄涙は誘いかけるように言うと、右手に携えた片手剣でシュツと空間を斬る。

斬られた空間には、一人一人が通れるほどの裂け目が生じた。

「面白くなるといいねー。」

裂け目を作った黄涙よりも先に、紅羽が空間に入る。

「腕が鳴るぜ！」

次に、白雉。

「……………先に行くぞ、黄涙。」

「どうぞー。」

そのまた次に蒼影。

「さてさて…どうなることやら…ふふっ。」

最後に黄涙が裂け目に入る。

四人の姿を呑み込んだことを確認したかのように、空間は自然と裂け目を修復し…やがて元の空間へと戻ったのだった。

2095年、日本。

「ねえ、^{サザンカ}山茶花…。今朝のニュース見た？」

今時珍しい、木造建築の学校。

頭の上で髪をおだんごにまとめた少女が、隣の席の少女に話しかけた。

髪の色は紫、瞳の色は黒。

歳の頃は、十代後半ほどか。

一辺のシワもないほどきれいに着こなした制服の胸ポケットには、生徒手帳がしまわれていた。

机の横にかけたバッグには、猫のキャラクターのキーホルダーがつけられている。

「…どのニュースのこと言ってるの、椿^{ツバキ}？」

山茶花と呼ばれた少女は、冷めた瞳で見返す。

右目は黒、左目は緑…オッドアイだった。

焦げ茶色の髪は、後ろでポニーテールにまとめている。

先の少女と同じ服装で、年も同じに見えた。

左手の袖口から、白色の天然石ブレスが見え隠れしている。

「どのニュースって…駅のホームでまた廃人見つかるってニュースだよ！」

「ああ…あれね。」

山茶花は、今朝のニュースの映像をぼんやりと思い出した。

午前七時、駅のホームに座り込む四十代後半ほどのサラリーマンの男性。

目は落ち窪み、インタビューに返した言葉は『ア…クマ…が来た…』という一言だけ。

体全体がだらんと弛緩し、着ていた服は悲惨なほどにあちこち敗れていた。

「やっぱり…本当なのかな、あの都市伝説…。」

「ハートブレイカー…ねえ。彼らに心を壊されたら廃人になってしまふ…嘘くさいけど。噂じゃ、美少年四人組だとか。」

「なんだか…怖いよね！一ヶ月ぐらい前には、うちの学校の子が被害に遭ったらしいし…いやー、本当もう怖すぎ！」

「…なんか、楽しんでない？」

一人でキヤイキヤイはしゃぐ椿に対しての、山茶花の質問。

「やったなー、山茶花。いくら、あたしがオカルト好きでもそんな不謹慎な…」

バンッ！

突然響いた衝撃音が椿の言葉を遮る。

そして、

「うわっ!？」

「きゃあ!？」

ガシャーンと凄まじい音を立てて、黒板に一番近い窓ガラスが割れた。

「な、何…？」

「何なの!？」

山茶花や椿、それからクラスの全員の視線が割れた窓に集まる。

そこには…

「見つけたぞ、ソッカZOKKA。」

ボロボロの灰色の布を身に纏った、血色の悪い男性が居た。

白い髪はボサボサにはね、黒い瞳は限界まで拡張されている。

右手には棍棒。

これで、窓ガラスを割ったのだろう。

彼は、まるで地面があるかのように宙を歩くと、教室内まで足を踏み入れた。

「う、浮いてる…？人間じゃねえよ…化け物だー！！」

「きゃああ！！先生ー！！」

「逃げろー！！」

クラスメート達は悲鳴を上げ、慌てて教室から出て行く。

しかし、山茶花と椿は逃げなかった。

逃げようにも、椿が腰を抜かして座り込んでしまったため、山茶花も逃げられなかったのだ。

「あ、あなた…何なの…？」

「ZOKKAさえ来れば、後の奴は要らん。…来い。」

「えっ…！？」

椿の問いかけを無視し、男性は山茶花の腕をとりフツと飛び降りる。

あまりの行動の速さに、山茶花は抵抗する余裕も無く、なすがままになった。

「山茶花ー！」

椿の叫びを上方に聞きながら、山茶花の体は地面へ近づいていく。

「離して…！」

「お、おい！暴れるな………あっ！」

「えっ…ええええっ！？」

悪いことに、彼女は暴れてしまったため、男性の手が離れてしまった。

教室は三階。

既に二階の高さまで落ちていたため、スピードは更に加速する。

（叩き付けられる…！？）

下は固いアスファルト。

山茶花はもうダメだと観念して、両目を閉じた。

…地面まで、あと二メートル弱。

と、その時。

「させるかつ!!」

そんな大声がして、山茶花は地面にぶつかったのとは違う柔らかい衝撃を背中に受けた。

「んっ…!？」

「生きてつかよ、ZOKKA?」

驚いて目を開けた彼女の瞳に、不敵にニヤリと笑う青年の顔が映る。

無造作にはねたオレンジ色の髪が、風の抵抗で逆立っていた。

山茶花は自分がその青年に抱きとめられているらしいということをし、すぐに理解した。

「よっ…と!」

足がつく距離までゆっくりと降りていくと、青年は山茶花を地面に下ろす。

「あっ…ありがとう…」

「おっと！礼は…こいつを片付けてからな！しゃがめ！！」

青年は早口に言つと、山茶花の頭上に向かって、茶色い小槌を横向きにひゅっ…と振る。

「わっ！？」

山茶花は反射的にしゃがみ込む。

「ぐはっ！？」

真上から、先ほど山茶花を攫おうとした男性の声が聞こえた。

「いっちょ、あがりーっと!」

青年の声と、ドサツと男性の体が地面に倒れる音が重なった。

「君って…一体、何者…」

「ギリギリ間に合ったようだね、白薙。」

オレンジ髪 of 青年の背後から、ドクロの小さな帽子を被った黄色髪 of 青年の姿が見えた。

「へっ、このくらい朝飯前だぜ! そっちは、片付いたのかよ、黄涙?」

黄涙と呼ばれた青年は二人に歩み寄りながら、にっこり笑って後方を指差す。

灰色の煙に包まれてよくは見えないが、人が三人ほど折り重なって倒れているのが見えた。

「カードは？」

「一枚だけ。ハートだったから、紅羽が預かってるよ。それより…彼女がそうなのかな？」

黄涙に訊かれ、白薙というらしい青年は、たぶん…そうだろうと答える。

「ふうん…なかなかかわいいお嬢さんだね。」

「な…何か…？」

黄涙にジロジロ眺められ、山茶花は警戒するように身を引いた。

「ひとまずは…良かったかな。これで、ゴツイ男とかだったら守る気も起きないからね。」

「あの…何の話？私は、ZOKKAって名前じゃないし、君達二人のこと知らないんだけど…。」

「…あつ、そつか。こっちの人間には、その名前じゃ伝わらないんだね…。改めて…初めまして、JOKKERジョーカーのお嬢さん。」

黄涙は敬意を表すように、帽子を外してペコリと礼をした。

「えっ…あ、初めまして。」

「…って、それでも伝わらねえだろうよ、黄涙。とりあえず、蒼影と紅羽が来てから、自己紹介して…それからだろ?」

白薙が、困ったような呆れたような顔で、頬をかきながら意見する。

「山茶花—!!」

「涼原—!!」
すずはり

「……………んっ?」

自分の名を呼ぶ声に振り返ると、椿とクラス担任の教師が走っているのが見えた。

二人はかなりの猛スピードで駆けており、あっという間に山茶花のところまでたどり着いた。

「…っ…はあ…はあ…だ、大丈夫、山茶花…？」

「涼原…はあ…ケガは無いな…？」

「…そっちこそ、大丈夫？」

荒い息をつき、膝に両手をつく二人に対し、山茶花は反対に訊き返すほど余裕があるようだった。

「クラス委員の…はあ…箕輪みのわから聞いて…っ…会議から抜け出して…走って来たんだぞ…はあ…。何でも…っ…不気味な男に…攫さらわれかけたそっじゃないか！」

「はあ…まあ、そうなんですけど。今、隣に居る人に助けてもらって…って、あれ？」

ふと見回すと、隣に居たはずの白薙も前方に居たはずの黄涙の姿が無い。

灰色の煙もいつの間にか風に流されており、倒れていた三人の姿も無かった。

「誰に…助けてもらったの、山茶花？」

「オレンジ色の髪の人に助けてもらったんだけど…居なくなっただけ。つい数秒前まで居たのに…おかしいな。」

首を傾げる山茶花に、無事ならいいんだと教師が安心したように微笑んだ。

「涼原の無事も確認したところで、香川^{かがわ}も教室に戻るぞ。ほら、二人とも早く歩く。」

「わわっ！急かされると、転びますってば、宝山^{ほしやま}先生！」

駆け足で学校内へ戻っていく二人の後ろを歩きながら、山茶花は後ろを何度も何度も振り返った。

けれど、黄涙と白薙の姿は一度も見えなかったのだった…。

「まったく…何を考えてんだよ、親方は!？」

赤い月が辺りを照らす、夜の路地裏。

白薙は、覆面を被り忍びの格好をした男に対し、問いただすように言った。

眉はつり上がり、今にも噛みつかんばかりの勢いだ。

「何のことですか、白薙。」

男は動じた風も無く、いたって冷静に問い返す。

「特別指令じゃ無かったのー、闇正ー？」

「俺達以外にも、カードを狙っているハートブレイカーが居るのはなぜか…白薙はそう言いたいんだよ。」

白薙の言葉を要約して、紅羽と黄涙が言った。

「そのことですか…。簡単なことです。あくまでも“特別指令”であって、“其方達だけに出された指令”ではないというだけの話です。」

「なっ…ふざけた言い回ししやがって……………このっ!-!」

「やめろ…白薙!」

小鎚を振り上げた白薙の手を、蒼影がガシツと掴む。

「止めんなよ、蒼影!!」

「…闇正に罪は無い。手を出したところで不利になるのは、我々の方だ。」

「……………わーったよ。」

蒼影に諭され、白薙は渋々ながら手を下ろす。

その間に闇正というらしい男性は、そそくさとどこかへ去って行った。

「うんうん、よく我慢したね、白薙。」

「…さりげなく頭撫でんじゃねえよ、黄涙!俺様は納得してねえ…」

「えらい、えらい!僕も白薙になでなでしてあげる!。」

「しなくていいっつのー!!」

よしよしと頭を撫で回す黄涙と紅羽の二人に、小槌を振り回し追っ払おうとする白薙。

「我々だけに与えられた指令ではない…か。それ故に、奴らはZOKK KAのあの娘を手中にしようとしたのだな。」

「俺達に出された指令と同じ指令を受けたんだろっね。“ZOKK A”を守りつつ、トラップを集めろ”って。」

黄涙は二メートルほど跳躍し、トッ…と白薙の小鎚の先端に乗った。

「うわっ、乗っかるなよ、黄涙!!…ゲームってわけかよ。自由と統率権をかけた壮大な…。」

「わあ、黄涙…すっごーい!僕も乗っかるー!!…僕も黄涙と同じで、あの子なら守ってあげてもいいかなー。」

「黄涙の真似すつとろくな大人になんねーぞ、紅羽。…っで、だから乗つかんなよー!」

大騒ぎする白薙と、楽しそうに小鎚の上でバランスをとる二人を、蒼影は遠い目で眺めているのだった…。

- To be continued -

- 狩り -

夕日があらゆる建物を赤く染める通学路。

「それにしても…この前は大変だったよね、山茶花。」

オレンジ色に染まった空を仰ぎながら、椿が何気なく言った。

紫色の髪が風にふわりとなびく。

「うん…まあね。」

山茶花にとっては、あまり思い出したくない出来事のように、その表情は浮かない。

右が黒、左が緑というオッドアイの瞳もわずかに歪んでいた。

「その後、警察は来るわ、窓ガラスの代わりとしてサランラップを貼るわ、長い朝会が三日間続くわ…災難としか言えないよね。」

「……………一番の被害者は私だけ。」

「犯人は消えちゃうし、山茶花を助けてくれたっていう青年もこの誰だかわかんないし…本当、不思議な事件だったなあ。」

その言葉に反応したかのように、山茶花はピタッと立ち止まった。

（言えない…。その青年とまた会って、前よりも災難なことに巻き込まれたなんて。）

「ん？どしたの、山茶花？何か顔色悪いけど…。」

「へっ…？だ、大丈夫。」

「そう？何でもないなら、早く帰ろうよ。」

「う…うん。」

三メートルほど前方を歩く椿の元まで駆けながら、山茶花は昨日のことを思い出していたのだった…。

前日の夜、九時頃。

「やあ、また会ったね、ZOKKA^{ソッカ}のお嬢さん。」

山茶花は、黄色髪の青年の姿を窓の外に見つけ、声も出ないほど驚

愕してしまった。

額からは冷や汗が流れている。

それというのも、山茶花の部屋は二階でベランダは無い。

つまり、彼は窓の外に“立っている”のではなく“浮いている”と
いうことだ。

「あっ…えっ…なっ…んで…」

「…ああ、こんなところから挨拶するなんて失礼だったね。」

青年はにっこり笑って言うと、窓を開けてひょいと部屋の中へ降り立つ。

反動で位置がズレてしまった小さなドクロの帽子を手で直し、山茶花の近くまで歩み寄ってきた。

山茶花は身を引くこともなく、呆然と立ちすくしている。

「こんな遅くにごめんね。この前は自己紹介しそびれちゃったから…改めて…」

「黄涙ー！置いてかないでよー！！」

黄涙というらしい青年の声を遮って泣き叫んだのは、彼と同じく窓から入ってきた紅い髪の少年。

「みんな方向音痴だし…真っ暗だし…もう会えないかと思ったよ…。」

「大げさだなあ、紅羽は。」

大きな山吹色の瞳を潤ませ青年の背中にしがみつく紅髪の少年。

右目の下には泣きぼくろ。

黄色髪の青年は、困ったように眉を下げつつも苦笑していた。

「そうだ、紅羽。蒼影と白薙は？どこかで道を間違えて迷ってるのか？」

「ん…。」

黄色髪少年は、ぐずぐずと鼻をすすりながら、窓の外を指差す。

その瞬間、

「迷子みてえな言い方すんなっつーの、黄涙!!」

「…我々はここだ。」

開け放たれた窓から、先の二人と同じように二人の青年が入ってきた。

大声で怒鳴った方が、オレンジ色の髪と桃色の瞳を持つ青年。

耳には親指大の輪ピアス。

冷静に返したのが、顔の右半分を覆い隠す漆黒の髪と蒼い瞳を持つ青年だった。

耳からズボンにかけてイヤホンのようなコードが伸びている。

山茶花は、もはや驚きを通り越して、呆れているようだった。

冷めた瞳で四人の姿じつと見つめている。

「こんな時間に大きい声を出さないの、白薙。近所迷惑だろ。それに…ZOKKAのお嬢さんも困ってるよ。」

「黄涙の言っとーりだよ！女の子を困らせる男の子は、紳士しっかーく！」

「あの…結局、何なの？」

山茶花の質問に、四人は一斉に彼女に視線を移した。

「黄涙…だっけ。自己紹介しに来たんじゃ…？」

「ああ、そうだったね。危うく、用件を忘れるところだったよ。」

黄涙と呼ばれた青年は、ありがとと礼を言っで自己紹介を始めた。

「俺は黄涙^{キルイ}。トランプでは、ダイヤを担当しているよ。所持武器は、片手剣…クルタナ。ハートブレイカー歴は、十年さ。」

「…はい？今、さりげなくハートブレイカーって…」

「質問は全員の紹介が終わってからね、お嬢さん。」

疑問をぶつけようとしたところを一刀両断され、あ…うんと山茶花は素直に口を閉じる。

「僕は、紅羽^{クレハ}！ハートの担当だよ。持つてる武器はねー、えっと…ボーラって縄とブリューナクっていう光の槍ー。」

紅髪の少年…紅羽は、よろしくねーと人懐っこい笑顔を見せた。

「俺様は白薙だ。^{シロナギ} トランプでは、スペードを預かってる。武器は、打ち出の小槌！」

そう言っつて、小槌を空間から取り出してみせるオレンジ髪青年…白薙。

「蒼影。^{アオカゲ} クローバー担当。弓矢…雷上動を使用している。」

漆黒の髪の青年…蒼影が最後に自己紹介した。

「それで…ZOKKAのお嬢さん。」

「あの…その言い方は止めてくれない？私には、涼原 山茶花って名前があるんだけど。」

山茶花の控えめな意見に、

「では…山茶花嬢。」

黄涙は言い直してから、話を続ける。

「なぜに、嬢…？」

「呼び捨ては失礼と思ってね。まあ、自己紹介はこのぐらいにして…本題に入るよ。俺達は、君達が住む世界…日本のパラレルワールド“ジャンハン”から来たハートブレイカーなんだ。」

「ハートブレイカー…心を壊して廃人を生み出す化け物だって聞いたけど。」

化け物はひどいよーと紅羽が嘆いた。

「僕達はー、世の中に絶望した人達を救ってあげてるだけなのにー！」

「廃人は救われた人間には、見えないんだけど…。」

「ま、俺様達ぐれえのレベルになると、ちまちました仕事には飽き

ちまうんだけだな。」

白薙は頭の後ろで腕を組み、にやりと不気味な笑みを浮かべた。

「廃人は…ただの負け組だよ。むしろ、俺達が救うのは“ハートブレイカーの素質を持つ人間”かな。」

「…ますます、わかんなくなってきたんだけど。」

「ふふっ…近い内に実際に見せてあげるよ。だけどまあ、俺達の今回の仕事は、いつものハートブレイカーのそれとは違うんだけどね。わざわざ、あの幻想的な世界…ジャンハンから出て、こっちに来たのは…トランプを集めるためさ。」

「トランプ集めのため…？」

蒼影が、無言で頷く。

前髪が少しだけ浮き、隠れていたもう片方の瞳がちらつと見えた。

「ZOKKA…こちらではJOKKERであるおまえを守りながら、五十二枚のトランプを集める。それが、我々の目的だ。」

「山茶花だって言ってるのに…。話はわかったけど…そのZOKKAとかいう役は他の人じゃダメなの？」

「ダメだよー。今更、他の人を守るのはめんどくさいしー、三花^{サンカ}ちゃんを守るって決めたんだもん、僕達！」

光の槍…ブリューナクを右手に掲げ、意気込む紅羽。

「かつこいいこと言ってるけど、名前…間違ってるから。」

「ZOKKAの茶花^{チャカ}を守ってトランプを全部集める…最強のハートブレイカー四人組、トランプ四重奏にかかりや楽勝だぜ！」

「…もう、何でもいいよ。」

山茶花は突っ込み疲れたのか、窓から入り込み月の光に視線を移し、投げやりな態度で言った。

「…とまあ、今日はこのぐらいにして…帰るね。」

「えー、もう帰るのー？僕はまだ山花ちゃんと話したいよー！」

「紅羽…紳士の心得第十条を言ってみてごらん。」

駄々をこねる紅羽に、黄涙が問いかける。

「えつと…うーんつと…」夜は女性にとって最もプライベートな時間。長居は無用”……………あつ。」

「ふふつ…よく覚えていたね。じゃ、帰るよ。」

「…はい。」

素直に返事をして、紅羽は窓べりにちょこんと座った。

「へっ！別に俺は紳士になんたくはねえから、帰らな…っっておわっ！？」

「…帰るよ、白薙？それとも…」

「わ、わーった、わーった！！帰るから、その先は言っない！」

首根っこを黄涙に捕まえられ、白薙も渋々窓際に寄った。

「帰るの？」

「……………日本の空気はあまり好かん。」

山茶花の問いかけに短く答え、蒼影もまた窓際に移動した。

そして、

「それじゃ…またね、山茶花嬢。」

黄涙は頭のドクロ帽子を右手で押さえ、

「まったねー、山花ちゃん！」

紅羽は大きく左手を振り、

「俺様達が次来る時まで攫われんじゃねえぞ！」

白薙は小鎚を背負い直し、

「……………また。」

蒼影は会釈して、それから四人は一斉に窓からスッと飛び降りた。

「えっ…！？」

山茶花は慌てて、窓から地面を見下ろす。

部屋は二階だが、かなりの高さがある。

安易に飛び降りたりすれば、ケガをしかねないと思ったからだ。

しかし、庭の黄緑色の芝生の上には四人の姿はなかった。

すぐ近くの犬小屋で眠っていた飼い犬も、吠えることなくスヤスヤ眠っているようだった。

（本当に自己紹介だけなんだ…変な人達。）

山茶花は、あー眠いと呟くと、目をこすりながらベッドに寝転がったのだった…。

話は戻って…翌日の夕方。

「じゃあね、山茶花ー！」

「うん…また明日。」

夕日を背に受けながら、椿は元気よく言って駆けていった。

山茶花は、椿が帰る方とは違う道を歩き始める。

何歩か歩く内に、道端に落ちてあった缶を蹴ってしまった。

「……………あつ、しまった。」

蹴られた缶は半円を描いて、斜め前右側にあった茂みに落ちる。

すると、

「痛っ!?!」

茂みの中から、高い声が聞こえてきた。

「紅羽…？」

山茶花は茂みに近づき、中腰体制で訊いた。

「わっ！？見つかった…。」

ごぞごそと茂みから出てきたのは、紅羽だった。

紅い髪に引っかけた葉っぱを、一生懸命払っている。

「こんなところで何してんの？それに…他の三人は？」

「山花ちゃんが狙われないように、見張ってたんだよー。黄涙と白薙と蒼影は、狩りに行ってるの！。僕は置いてけぼり…。」

「狩り？」

「ハートブレイカーが、ジャンパンに迷い込んだ人間の心を壊すことを、“狩り”って呼んでるんだよー。普段の僕達はー、狩りをするハートブレイカーを見物してるだけなんだけど、たまに参加するんだー。」

紅羽は、“狩り”についてを至極楽しそうに語った。

「僕も参加したかったのになあ…。」

「…私は、放つとかれても大丈夫だから、行って来たら?。」

「行きたいけど…山花ちゃんを守ることの方が大事だから…我慢するー。」

「そう…。私の家、もうすぐそこだから、着いたら帰っていいよ。」

そう言って、再び歩き出そうとした山茶花の左腕を紅羽がぎゅっと掴んだ。

山吹色の瞳を潤ませ、すぐるような目つきで山茶花を見上げている。

「一人で居たくないよ……。僕、夜は暗くて怖い……。山花ちゃん家……居てもいい？」

「……………別に構わないけど。他の三人が迎えに来たら帰ってよ？」

「やったあ！みんなが来るまで、いっぱいお話ししてようねー！よし、急いで帰ろー！！」

「あ……迷子になるよ。」

先に駆けていく紅羽の背中を、山茶花は早足で追いかけた。

「はあ……い、一体何なんだよ、ここは！？」

二十代前半ほどに見える男性は、全速力で路地を駆けていた。

短い金色の髪は額や頬にべっとりと張り付き、茶色い瞳にも汗の滴がポタポタとかがつている。

あまりに走り過ぎたためか、チョーカーについていた錨マークは外れかかっていた。

「おうおう…頑張ってんじゃねえか！」

「五分も逃げ切れる人間は珍しいね。」

「…見た目によらず、根性がある者のようだ。」

その男性を上空からスコープで観察している男が三人居た。

白薙、黄涙、蒼影である。

彼らの居る位置からは、走る男性を狙うハートブレイカー達の姿もよく見えていた。

「一…二…三…十人は居んな。おっ…茶夢チャムも参加してんのか！…大捕りもんだな。」

「ふふっ…俺達もそろそろ始めようか。月に一度の参加日だからね。早く狩りたくて、うずうずしてるのさ。」

「行くか。」

蒼影は、雷上動という弓矢を胸の前に構えた。

狙うのは、走り疲れて歩みが遅くなってきた男性の右足。

「茶夢には負けられねえもんな！行くぜ！！」

「さあ…ショータイムの始まりだ。」

言葉と同時に、白薙と黄涙が動く。

二人は、各々の武器を利き手に携え、男性に向かって一直線に降下していく。

「ト、トランプ四重奏だ！」

「やべっ…みんな、今回の獲物は諦めて散れっ！！巻き込まれるぞ！！」

他のハートブレイカー達から悲鳴が上がり、わあっと四方に散っていく。

「へっ…よくわかってんじゃねえか、他の奴ら！！たあっ！！」

嬉しそうに口元を綻ばせて、小槌を縦方向に振る白薙。

「のあっ…！！？」

小槌は、金髪男性の背中をどかと激しく打った。

男性はわけもわからない内に、前のめりに地面に倒れた。

「な…なっ…なんだ…？」

「今晚は、俺達の獲物君。せっかくなら…楽しませてね？」

「ひいいいっ…！」

蔑むような瞳で、自分を見下ろす黄涙に男性は倒れたままの態勢で後ずさる。

普段の彼なら無様で到底出来ない動作だが、今は得体の知れないハートブレイカーから逃げることしか頭に無かった。

「怖くないよ…一瞬だからね？…はっ…！」

「や、やめて…わあああっ…！」

男性の眉間に、黄涙のクルタナが振り下ろされる。

男性は両手で頭を庇うように覆った…。

だが、

「…なんてね。残念ながら、俺が手を下すまでもないんだよね、これがさ。」

「……………」

男性は恐る恐る顔を上げる。

黄涙の右手にはクルタナがあつたが、どこにも痛みは無い。

「た、助かつ…ぐはっ!？」

ほつと息をつこうとした男性は、言葉を継げなくなった。

…背中に木製の矢が突き刺さっている。

その深さは一センチほどで出血も無いが、男性はそのまま気を失いガクツと地面に付した。

「さすがは蒼影。見事に心だけを射てるね。」

「いいところりされっのは、納得いかねえけど…腕が確かなのは認めてやるよ。」

手を打ちながら賞賛する黄涙と、ふんつと鼻を鳴らして言う白薙。

蒼影はそれらには答えず、無言で金髪男性の側に降り立った。

「…紅羽が居ぬと、手順が違ってやりにくい。」

「それは俺も思ったよ、蒼影。いつもの狩りは、蒼影の雷上動で射止めて怯ませて、紅羽がボ―ラで足止め。俺のクルタナに獲物の意識を集中させている間に、白薙が小槌でブレイクする…ってものだからね。…なぜ、紅羽だけ見張りにつかせたのかな、白薙？」

黄涙の質問に、白薙はふいっと顔を逸らして答える。

「たまにはいいだろうが、紅羽のピーピー泣く声が聞こえねえ狩りつてのもよ。…あいつは、もうガキじゃねえんだから、一人で何か

できるようになんねえと困るだろうしな。」

「ん？最後の方が聞こえなかったよ、白薙。」

「聞こえねえように小声で言ったんだってえの！一回は言わねえよ！！」

白薙は大声で返すと、金髪男性の背中から矢を引き抜いた。

不思議なことに、そんなことをされても、男性は微動だにしなかった。

「…戻っぞ、ビルに。」

「ふふっ…素直じゃないね、白薙は。」

「放つとけてえの！！」

ビルに向かって浮遊しながらハハッと笑う黄涙に、小槌を振り回し追いかける白薙。

「…紅羽もホームシックにかかってくる頃だろう。急ぎ…迎えに行くべきだな。」

一足遅れた蒼影は、雷上動を背中にかけて直し二人の後を浮遊して追っていた…。

その頃、紅羽は…

「うーんと……これ！……やったあ、あーがり！！」

「うつ……また負けた……」

山茶花の部屋でババ抜きをしていた。

「ポーカー……七並べ……大富豪……真剣衰弱……ババ抜き……僕の五連勝だねー！次は何しよっかなあ……」

（早く連れて帰ってくれないかな……あの三人。もう寝たいんだけど……。）

ランプをかき集めて丁寧に揃える紅羽の傍らで、山茶花はハアアと深いため息をつく。

左半月がそんな二人を明るく照らしていたのだ……。

-
T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
...
-

- 天敵 -

「たくっ…しゅっけーんだよ!!」

白薙は悪態をつきながら、後方を振り返った。

赤い満月をバックに、追ってくる十人の男性の姿が見える。

皆、手には鉄砲や長刀など物騒な武器を携えていた。

十人共、顔は黒い頭巾で覆われ、全身は灰色のコートに包まれているため、性別すらわからない。

彼らとの距離は、わずか二十メートルほどだった。

「…振り返るな、白薙。今は逃げ切ることが最優先事項だ。」

そう忠言したのは、彼の一つ前を浮遊している蒼影。

背中には、弓矢…雷上動がしっかりとくりつけられている。

「でもよ…蒼影！最強のハートブレイカーの俺様達が逃げるなんて、かつこ悪いだろうが！！」

「だったらー、白薙だけ戦うー？」

蒼影の前に行く紅羽が、振り向かずに尋ねた。

「うつ…よ、よっし！逃げ切ってやつぞ、野郎共ー！！」

「まあ、このまま逃げててもいずれ追いつかれるだろうけどね。」

「揚げ足とんなよ…黄涙。」

最後尾を浮遊している黄涙は、クスクス笑いながらごめんねと返した。

「うーん…じゃあ、どうすればいいのー、黄涙ー？」

「そうだね……………こうしょうか。」

そう言うと、彼はくると反転し、追跡する者達に向き直る。

追跡者達は彼の態度に警戒したのか、ほんの少し追跡速度を緩めた。

驚いたように目を見開き振り返る紅羽。

「えっ…黄涙!？」

「ふふっ…今の内に行きなよ、日本へ。俺のことは…お構いなく。」

「かつこつけのアホーが…本当に行っちゃまうからな!!」

白薙は更にスピードを上げ、紅羽と蒼影を抜き、最前線に躍り出る。

そして、小槌を縦に振り空間の裂け目を作った。

「先に行けっ、紅羽!蒼影!」

「だけど…」

「行けっつんでんだろうが!!」

白薙に怒鳴りつけられ、紅羽はビクッと体を震わせ一目散に裂け目へ入っていった。

「…借りができるな、白薙、黄涙。」

蒼影もすぐに裂け目へ入る。

「いつか返してもらっぜ、二人共！…俺もあいつに返さねえとな。」

白薙は裂け目に左足をかけ、ちらつと黄涙の方を見る。

黄涙は右手に掲げたクルタナを、二度横に振ってみせた。

既に、追跡者達は彼の周りを輪をつくるように囲んでいた。

「へっ…いい様だぜ、黄涙…。」

白薙は消え入りそうな声で呟くと、もう片方の足も裂け目に踏み入れ奥深くに入っていく。

裂け目は三人を呑み込むと修復され、何も無かったかのように辺りの空間と同化した。

「粹な真似をするんだな、おまえさんは。」

黄涙の真前に居た追跡者が、押し殺したような低い声で言った。

「男に誉められてもあまり嬉しくないけど…」

「永遠に減らず口叩けないようにしてやろつか、優男？」
やさおにい

右真横に居た追跡者の長刀がヒュッ…と振られ、黄涙の横髪を数本切る。

切られた黄色い髪は、パラパラと地面に落ちていった。

他の追跡者の銃口や武器の矛先も、黄涙の頭に向けられている。

「それはさすがに困るかな。ふふっ…降参するよ。」

黄涙はクルタナを腰の刀筒にしまい、両手を高く上げた。

言葉とは裏腹に、表情はにっこり笑顔だ。

「今回は三日だ…黄涙。三日後…おまえさんを処刑する。」

真後ろに居る追跡者は冷たく言い放つと、黄涙の体に縄を巻き付け始めたのだった…。

「ねえ、君達…本当に守る気ある…?」

昼間の公園。

他のハートブレイカーと攻防戦を繰り広げる三人に、山茶花がため息混じりに訊いた。

体はボーラでベンチに括りつけられ、おでこには“ZOKKAです”と書かれた紙が張り付けられている。

「あるに…決まってるだろうが！だから、こうやって…戦ってるだよ！」

三叉槍を振り回す群青色の髪のアートブレイカーに対し、打ち出の小槌で応戦しながら、白薙が答える。

金属と木の擦れ合う鈍い音が辺りに響いていた。

「これって…守られてるんじゃないくて、おとりにされてるんじゃない？」

「そんなことないよー！僕達には、茶花ちゃんをだしにしてトランプを集めようなんてひどいことはできないもん。」

「…言葉と行動、矛盾してるんだけど。」

「きつと気のせいだよー！」

紅羽はブリューナクで群青髪のアートブレイカーの背後を突く。

「挟み打ちとは…卑怯だぞ！」

群青髪のアートブレイカーは悪態をつきながら、素早く身を伏せた。

「うわあ!？」

「うおっ!？」

危つく相打ちになりかけ、紅羽も白薙もバツと後ろに飛び退く。

「隙あり！」

群青髪のアートブレイカーはチャンスとばかりに移動し、山茶花の首元に三叉槍の先端を突きつける。

「わっ!？」

「山花ちゃん！」

「茶花！」

白薙と紅羽はすぐに態勢を立て直し、ハートブレイカーに向き直る。

しかし、安易に動けない状況と理解し、二人に近づくことはできなかった。

「近づく、ZOKKAの命は無いぞ！！」

「…近付かなければ、いいんだな？」

「な、何をする気だ…？」

群青髪のアートブレイカーは、蒼影の方を見てややたじろぐ。

蒼影は、雷上動を引き絞り、狙いをアートブレイカーの左胸部に合わせていた。

「蒼影…。」

「や、止める…！ZOKKAがどうなっても…ぐっつ！？」

彼が言葉を言い終わらない内に、雷上動から射られた矢は左肩に深々と刺さっていた。

「あつ…ありがとう。」

ハートブレイカーが肩を押さえて数歩後ずさる間に、山茶花は彼からサッと離れた。

「くそっ…こうなりや、おまえら全員道連れに…っ…！？」

「…気色悪いこと言ってんじゃないやねえよ！誰が男と心中なんかすっかつつの…！」

「蒼影ー、準備オツケーだよー！」

ハートブレイカーの腕を、白薙と紅羽がガシッと掴む。

「えっ…おい…これはいくら何でもずるくねえか!？」

「…女子^{おなご}を人質にする者よりはマシだ。」

蒼影は弦をギリギリまで引き絞り…躊躇なく弓を射た。

「ち、ちよっとタンマ…がはっ!？」

矢は群青髪のハートブレイカーの胸の中央に浅く突き刺さった。

ハートブレイカーの体は、ドサッ…と地面に崩れ落ちる。

やはり、出血は無かった。

代わりに…

「やっと、スペードが一枚出たぜ!」

ハートブレイカーの胸から一枚のトランプカードが浮き出てきた。

白薙が嬉しそうに言った通り、マークはスペードで、数字は六だった。

「良かったねー、白薙。」

「へへっ…この調子で俺様が一番に自分のマークを揃えてやつよ！」

紅羽に言葉を返しながら、白薙はカードに触れる。

すると、カードは吸い寄せられるように白薙の手に瞬時に移動した。

「…調子のいい奴だな、おまえは。」

蒼影は雷上動を背中に背負い直しながら、ぼつりと呟いた。

「これで、トランプカードは七枚目ー。順調だねー。」

「ねえ…盛り上がってるところに悪いんだけど…今日の君達、何か変じゃない？」

山茶花の唐突な質問に、紅羽が反応するようにピクツと肩を震わせた。

「ママー、あのお兄ちゃん達、浮いてたよー！ママも見たでしょ！」

「しっ！いいから、目を合わさないで早く行くわよ！」

一組の親子が、公園の横路をそそくさと歩き去って行く。

「へ、変かなー、山花ちゃん？ぼ、僕達、いつもどーりなんだけど…。」

「明らかに変。カード集めのやり方が妙に強引だし…黄涙が居ない。」

「き、黄涙は…その…えっと…」

「別にいいだろーが、黄涙が居なくてもよ！たまには、三人でやりてえ時もあんだよ。」

左手親指を唇に当てて口ごもる紅羽に代わり、白薙が言った。

蒼影は、ただ無言で空をじっと見上げている。

「そついうもの？」

「俺様は、あいつが居ねえ方がやりやすいしな！すかしてるわ、ナ
ンパ調だわ…好きなタイプでは無えんだよ。」

「…ケンカしたの？」

「そ、そついうわけじゃねえけど…茶花には関係ねえ…おわっ！」

白薙は目を丸くして少し後ずさった。

山茶花が、彼の五十センチ前まで詰め寄ってきたからである。

黒と緑のオッドアイの瞳が太陽に照らされ、キラリと鋭く光ったように見えた。

「な…何だよ、茶花？」

「……………」

「なんで無言なんだよ！言いてえことがあんなら、さっさと言いやがれ…」

「嘘…ついてる。君達と黄涙は、ケンカなんかしてない。…違う？」

「な、何言い出すんだよ、おまえ…。」

山茶花は、ふうと小さくため息をつく、白薙から視線を外し、蒼影の方に向けた。

「蒼影…。本当は何があったの？」

「……………何も無い。」

「…僕、もう隠してられないよ！山花ちゃん、あのね…」

「話さなくていいっつの、紅羽！！」

白薙はムツとしたような表情で紅羽を怒鳴ったが、紅羽は怯まず言葉が続ける。

「黄涙は…捕まっちゃったの。僕達の天敵…ジャンハン警備局に…」

「ジャンハン警備局…？」

「うん。」

四人の髪が、微かに風に靡いた…。

薄暗くかび臭いランガ（ハートブレイカーの力を封印する牢）の中、黄涙はぼつと地面を見つめていた。

両手には手錠がかけられ、その鎖は天井近くに繋がっている。

同様に、両足には足枷がかかり、鎖には直径三十センチほどの鉄球が結びつけられていた。

「二日後に処刑される気分はどうだ…黄涙？」

懐中電灯の光が、黄涙の顔を明々と照らし出す。

声の主は男性で、黒頭巾と灰色のコートを着ている。

黄涙は、ゆっくりと顔を上げた。

その口元には、弱々しいながらも笑みがあつた。

「こんな姿じゃねえ…最高の気分とはいえないよ。」

「“最悪”とは、言わないんだな。」

「まあね。喧騒から離れた静かな場所つても悪くないからなあ。久々の余暇の時間だと思って、残り二日間を気ままに過ごすつもりさ。…あつ、帽子を取らないでくれたことは、礼を言っておくよ。」

彼がぺこつと頭を下げたため、帽子はずれて地面に落ち、ファサ…と音を立てた。

「黄涙…おまえさんは、何年経っても変わらないな。」

「そう言うあなたこそ…変わらないね、叔父上。」

「まだその呼び方で呼ぶのか…私を。」

男は呆れたように眉を下げ、苦笑した。

そうして、左手で頭巾をとる。

耳までしかない緑色の短い髪と茶色い瞳が露わになった。

「十回目の監禁だ。義親子とはいえ、さすがに庇いきれん。」

「庇ってほしいなんて言ったことあるかな、俺？」

「ははっ、そういえば一度も言われたことは無いな。私のお節介だつたな、すまん。」

叔父上と呼ばれた男は、腕組みをして豪快に笑ってみせた。

「まあ、どうしても、俺の助けになりたいっていうなら……足枷と鉄球を外してほしいかな。」

「……調子にのりなさんな、黄涙。」

「ふふっ……やっぱりダメか。」

口元に浮かべた笑みは絶やさないまま、黄涙は眉を下げた。

その時。

パンポンと警戒なリズムが鳴り響き、

『警備局長。至急、会議室へ！』

そんな放送がかかった。

「呼ばれてるよ、叔父上。」

「…やれやれ、昨日から騒がしいな。じゃあな、黄涙。」

「……………さよなら、叔父上。」

去って行く男の背中に向かって、黄涙は誰にも聞こえないような小声で言ったのだった…。

「大体の事情はわかった。それで…君達はどうするつもり？」

窓から差し込む夕日が、山茶花の顔を赤く照らす。

ポニーテールに結わえられた茶色い髪も、夕日色に染め上げられていた。

彼女達四人は夕暮れと共に、公園から山茶花の家に移動していった。
った。

「どうするつもりって…俺様達は、普段通りトランプ集めをするだけだぜ。」

「黄涙を…助けには行かないの？」

「…行かねえよ。あいつは、めちゃくちゃプライド高え奴なんだ。一回目に助けに行ったら、すっげえ怒りやがってよ…。“他にやる

べきことがあるだろ”とか言いやがったしな!!」

白薙はその時の苛立ちを思い出したのか、床を拳でダンツと激しく叩いた。

「他人の家の床に当たらないで。それは照れ隠しで言っただけで、本当は嬉しかったんじゃないかな。今も君達を待ってるかもよ？」

「んー…どうなのかなー。黄涙…いつも自分一人でランガを脱出してくるし…僕達はあるまり助けに行かないんだよねー。僕は心配なんだけど…白薙と蒼影に止められるしー。」

紅羽は体育座りをして、胸の前で両手人差し指を突き合わせていた。

山吹色の瞳はあちこち動き回り、落ち着かない様子である。

「白薙はわかるけど…蒼影も？」

山茶花の視線に気づき、蒼影は顔を彼女の方に向けた。。

「…事情は、白薙の説明した通りだ。我々には…他にすべきことがある。」

「君達は…もつと友情に厚いのかと思っていたけど…。私の思い違いだっただのかな。」

哀れむように目を伏せる山茶花に対し、そんなものは元から無えんだよと白薙が返答した。

「元から…無い？」

「俺様達は、“友達”じゃなくて“チーム”。だから、友情なんてものは持ち合わせてねえんだよ。」

「友情じゃないなら…何で繋がってるの？」

「それはだな…」

「…“強さ”だ。」

白薙が答える前に、蒼影が言った。

「横入りすんなよ、蒼影！」

「…誰が言っても言葉の意味は変わらぬ。」

「そついつ問題じゃ無え…」

「“強さ”で繋がってるって…どついつこと？」

わめく白薙を無視し、山茶花は蒼影に訊いた。

蒼影が口を開こうとした時、ずいっと紅羽が押しのけて前に出てきた。

「僕達ねー、強さに惹かれ合ってチームを組んだんだよー。」

「違えだろ、紅羽！たまたま同じ場所に同じ時間に居たから、周りが俺達をチームみてえに言い出したんだろうが！」

「あれっ？そうだったけ？でも、黄涙がそう言ってた…」

「黄涙の話はすんなつーのー！…あいつが居ねえところで、あいつの話は聞きたくねえんだよ…」

白薙は大声で怒鳴りつけると、罰が悪そうにうつむき、三人に背を向けた。

「うつ…ごめん。」

「そんなに怒らなくてもいいじゃない、白薙。…なんだかんだ言っ
て一番心配してるんだね。」

山茶花は後の方の言葉は聞こえないような小声で言った。

「…帰るか、紅羽…白薙。明日に備えて早めに休んでおくべきだ。」

「…うん、帰ろー。」

「……………」

紅羽は元氣なく返事し、白薙は無言で立ち上がる。

「またな…ZOKKA。」

山茶花に別れの挨拶をすると、蒼影は窓の外に向けて一本の矢を放つ。

矢は藍色の光を帯び、空間に一メートルほどの穴を開けた。

（どっちもどっちなね…。）

空間の穴に消えていく紅羽達の背中を見送りながら、山茶花はそう思っていた…。

『叔父上ー！叔父上、待ってー！』

『……………。』

『叔父上ってばー！』

『叔父上…？誰のことを言ってるの？』

『えっ…母上…？』

『まだ私を母と思っているの？…目障りな子ね。消えてなくなってしまうなさい。』

『あっ…、母…上……………。母上ー！ー！』

「……………っ！！夢…か。」

黄涙はガバツと飛び起きた。

…といつても、両手は手錠で繋がれ、足には足枷が付けられているため、それほど体は動かなかったが。

額から流れた冷や汗が灰色の床に落下し、ポタツ…と音を立てた。

彼がチャームポイントと自負するドクロの小さな帽子は、前日と同じ場所に落ちている。

「いよいよ…明日、か。鉄球さえ無ければ、足で手錠を壊せるのにねえ。」

足を思い切り引き寄せてみようとしたが、鉄球はビクともしない。

鎖がギシツと軋んだだけだった…。

「…平和だなあ、今日は。」

春の風が、窓からそよそよと入り込んでくる教室。

山茶花は、目を細めうつとりしているような表情で呟いた。

「唐突に…どうしたの、山茶花？」

「うん、ちょっと…いろいろと。」

「えっ…どつちよ？」

戸惑ったような呆れているような複雑な顔で、椿が突っ込む。

「いやー、最近慌ただしかったから、こついのんびりした日があることを幸せに感じちゃったようなんだよね。」

「…はい？よくわかんないけど…良かったね！」

「うん…。ああ…幸せすぎて眠く…な…る…う…」

「眠くなるって…さ、山茶花！昼休みはもう終わ…」

椿の声が聞こえなくなっていく。

山茶花は机にうつ伏し、心地よい眠りについていった。

後には、英語教師の二時間のお説教が待っているとも知らずに…。

その頃、ジャンハンでは既に夕日は沈み、夜という暗闇が全てを包んでいた。

「今日は…サボっちゃったねー、トランプ集め…。」

ビルの屋上。

地面にぺたりと座り込んだ紅羽が言った。

今宵は新月。

暗闇が苦手な彼は、絶えずペンライトを自分の手元や周りに当てていた。

「あー、くそっ！！黄涙が居ねえと、どうも調子が出ねえつつつか、やる気が出ねえつつつか…イライラするぜ！！」

「…うるさいぞ、白薙。それに…だ、紅羽にあれだけ言うておきながら、黄涙の名前を出すなど…理不尽にもほどがある。」

「…るせえな、蒼影！あん時は、あん時。今は今！」

「…駄々っ子か、お前は。」

蒼影は冷めた瞳で白薙を見つめた。

「ちっ…行くぞ、紅羽、蒼影！」

「行くって…どこにー？」

立ち上がり歩き出す白薙の背中に、紅羽が問いかける。

「ジャンハン警備局に乗り込むに決まってるうが！ランガの中に無様に捕まってやがる黄涙を笑いに行つてやんだよ！！わかつたら…準備して付いてきやがれ！」

「白薙…。うん、わかったー！僕も行くよー！」

「勘違いすんなよ！助けに行くんじゃないねえ…笑つてやんだからな！」

「えへへ…わかってるよー！」

「…行く前からにこにこ笑うなよな。」

嬉しそうな笑顔を見せる紅羽に、白薙はまあいつかと呟き、三人はビルの屋上を後にした…。

チャリ…チャリ…と、鎖が地面に擦れる音が響いている。

暗い暗いランガの中、黄涙の足元から発せられている音だ。

「はあ…はあ…これだけ動いても…無理、か…。万事休すかな…。」

荒い呼吸をつきながら、黄涙は何気なく言葉を吐いた。

両腕には黒い手錠跡が付き、少量の鮮血が滲み出していた。

（恐らく…夜明けまでは、あまり時間は残されていない。このままだと…かっこつかないな。）

自分の無様さに耐えきれず、フツ…と自嘲気味に黄涙が笑った時。

ガンと何かが壊れたような音が、天井から聞こえてきた。

「…おい、今の音は何だ？何があった！？」

黄涙のランガ付近に居た警備員が、無線機に話しかけているのが見えた。

『警備局の上部が…何者かに破壊された模様！至急、救援を…うわあ！？』

「おいっ、どうした!？」

『………… テステステス。おっ、壊れてねえみたいだな。』

先ほどとは違う声が、無線機から聞こえてきた。

低いとも高いともつかない微妙な高さの青年の声だ。

「なっ… 貴様は一体…？」

『貴様じゃねえ!俺様は、白…うっ!？』

「白…？」

『…ジャンハン警備局に宣戦布告に来た、ハートブレイカーテロリストだ。これ以上、被害を拡大しなくては仲間につながし、入り口に来い。…以上だ。』

無線機の通信が、プツッ…と音を立てて途切れた。

（白薙に蒼影…だね。まったく…何やってんだか、あの二人は。こんなことされたら…俺も大人しくしてるわけにはいかないじゃないか。）

警備員が慌ててランガ付近から走り去る姿を確認し、黄涙はふと真顔になる。

「さて…何とかして鉄球を壊さないと…」

「黄涙、じつとしてー！えーいつー！…」

「んっ…？」

黄涙を天井を見上げると同時に、足枷に繋がっていた鉄球にゴツツと何かが当たった。

よく見ると、それは台形の形をした小さな石で、鉄球をぱっくりと二つに打ち砕いてしまっている。

「紅羽…。」

暗くて顔や服装は見えないが、五十センチほどの穴が開いた天井には、小柄な少年が居るようだった。

「黄涙…僕が加勢するのはこれだけだよ。黄涙の力…信じてるかー！僕は戻って、白薙達ともう一暴れしてくるよー！」

紅羽らしき少年は早口に言うと、さっさと天井をつたって元来た方向へ去って行った。

「これで十分だよ…紅羽。」

黄涙は満足げに呟くと、

「はっ！！」

自分の手首を拘束する手錠の鎖へ向けて、勢いよく両足を振り上げる。

鎖を繋ぐ小さな輪っかが、ペキッ…パキッと音を立てて粉碎された。

衝撃で両足を封じていた足枷も、カランと乾いた音を立てて切れた。

「ふう…この帽子を被ってないと、どうも落ち着かないなあ。」

黄涙は、数歩前進し、ドクロの帽子をひょいと拾い上げ、頭に乗せる。

（これで…よし、と。あとは、クルタナがあれば…んっ？）

辺りを見回すと、ランガから出て右斜め前にある傘立てに、クルタナが立てられていた。

（叔父上…だろうね。期待通り、俺は脱獄するよ。）

心の中で呟きながらクルタナを取り、胸の前に構える黄涙。

それから彼は、

「出遅れた分、派手にやっておこうかな。」

誰に言うともなく言って、ランガの入り口ドアに向けてクルタナを大きく振りかぶった…。

ジャンハン警備局上空。

「おうおう…やってんな、黄涙の奴も！半壊どころか、全壊しちゃうんじゃないの、ジャンハン警備局は。」

百メートルほどの高さから、白薙は壊れていく警備局を物見遊山気分で見下ろしていた。

入り口から次々と出てくる警備員の姿が、彼には働き蟻のように見える。

「さっすが、黄涙ー！パワー最強のハートブレイカーだもんね！」

ブリューナクを指でくるくると回しながら、紅羽が間延びした口調で言う。

「…慎め、白薙、紅羽。あの者達の気持ちにもなってみろ。」

二人を低い声でたしなめたのは、蒼影だ。

黒い瞳は怪訝そうに細められている。

「たくっ…生真面目すぎるぜ、蒼影！そんなんじゃ、モテねえよ？」

「持てない？何をだ？」

「…………いや、そつちの意味じゃなくて…っ！あれ、黄涙じゃねえか？」

そつ自問自答するように言うと、白薙は入り口からゆっくりと歩いて出てきた人物を指差す。

黒く小さな帽子を被った黄色い髪 of 男性を。

「黄涙ー！こつち、こつちー！！」

紅羽が大きく手を振りながら呼びかけると、黄涙はそれに気づいたように上空を見上げた。

そして、

「わっ！？」

「ふふっ…さっきはありがとう、紅羽。」

一瞬にして、三人の前に移動してきた。

「蒼影と白薙にも礼を言って…」

「つもる話は後だ。…とにかく、ここを離れなければ。」

「うん、蒼影の言う通り！」

蒼影の冷静な意見に、他の三人も同意するように頷くと、四人は拠点にしているビルへと急ぐのだった…。

「これはまた…凄まじいことになってるな。」

半壊した警備局を見つめ、警備局長は参ったというように頭を掻いた。

二時間前…彼が用事で出て行く前にはまだ立派に建っていた警備局は、今はもう瓦礫と人間の山だ。

「あ…局長！」

入り口ドアの裏に隠れていた新人警備員が、局長の姿を見つけひよっこり顔を見せる。

局長は彼に歩み寄り、予想はつくが…何があつたと訊いた。

「ハ、ハートブレイカーテロリストとか名乗る三人組に…襲撃されました！捕捉しようと奮戦したんですが…彼らの強さの前に、第一部隊…第二部隊も壊乱してしまいました。挙げ句に…脱獄者まで出て中から壊されていった始末で…。」

「……………あつははは！ハートブレイカーテロリストとは、センスの欠片も無いネーミングだ。」

「き、局長…？追わなくていいんですか…？」

涙を流すほど爆笑する局長の姿に、警備員は困惑しているようだった。

「いい…そいつらの正体はわかってる。」

「で、ですが…！」

「警備局の修繕が先だ。他の精鋭部隊に連絡をとり、作業にかかれ。」

「はっ…！」

命を受けた警備員は、携帯電話を取り出しどこかに電話を始めた。

そんな彼の傍らで、

（手のかかる息子を持ったもんだ…。）

局長は思っていた。

夜が明けていく。

暗闇に覆われていたビルにも、紫色の太陽光が少しずつ差し込む。

「改めて礼を言っておくよ…ありがとう、三人とも。」

黄涙は帽子を右手で押さえ、ぺこっと頭を下げた。

「へっ…らしくねえことすんじゃねえよ。俺様は、お前を笑いに行っただけだっつうの！」

彼に対し、腕組みをしてふんつとそっぽを向く白薙。

「もうー！そんなひどいこと言ったらダメだよー、白薙ー！」

「いいんだよ…紅羽。笑えたかい、白薙？」

両腕を腰に当て、むっ…と口を膨らませる紅羽をなだめつつ、黄涙が尋ねる。

白薙は、チラッと黄涙を一瞥する。

両手首には、痛々しいほどの手枷による傷があり、流れ出た血は黒ずんで固まっていた。

両足首にも、同じような跡がある。

「そんな姿になったおまえを笑えるほど、俺様は非道じゃねえよ…」

「んっ？もう一回言ってくれないか、白薙。…聞こえなかったんだけど。」

「…うるせえ！これでも巻いとけ！！」

白薙は噛みつきそんな勢いで言い放つと、乱暴に何か布のようなものを投げつけた。

「ふふっ…どうも。」

黄涙が受け取って見てみると、それは未使用の包帯だった。

「僕が巻いてあげるよー、黄涙！」

「そうだね…自分じゃ巻けないし、お願いするよ、紅羽。」

紅羽は任せてと返すと、包帯を黄涙から受け取り彼の手首にぐるぐると巻き始める。

「…痛むのか？」

「さあ…？マヒしてしまったのか、あまり痛みは感じないかな。」

「…そうか。」

黄涙との会話をそんな言葉で終わると、蒼影は明けていく空を見上げる。

紫がかった空を、雁の群れが飛んでいく風景が彼の瞳に鮮やかに映っていた…。

-
T
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d
...
-

- 遊戯 -

「…ここに居ても、いずれは見つかる。奴を引き付けている間に、ZOKKA…お前は逃げろ。」

物置小屋のような建物の裏。

蒼影は、低く小さな声で傍らに立つ山茶花に言った。

額からは冷や汗が流れ、長い黒い前髪はぺとりと顔に張り付いていた。

「いいの、蒼影？」

対する山茶花は、普段と変わらない冷めた表情で見上げて聞き返す。
右が黒、左が緑というオッドアイの瞳に、蒼影の姿が鮮やかに映っていた。

「…問答している暇は無い。では…達者でな。」

蒼影が走り出そうと右足を踏み出した時、

「見つけたぜ、蒼影、茶花！」

「あつ……………」

右横から、低いとも高いともつかない微妙な高さの声が聞こえてきた。

「白薙…。」

「二人まとめて、捕まえてやんよ！…！」

白薙と呼ばれた青年は早口に言うと、元来た方向へ全速力で駆けていく。

耳に付けられた巨大な輪ピアスが、オレンジ色の髪の下からチラチラ揺れていた。

「くっ…ぬかったか！」

蒼影も、大急ぎで彼の後を追う。

前髪が風の抵抗で上方向になびき、隠れていた右側の瞳が見えた。

「二人とも…速すぎるよ。」

山茶花はやる気があまりないようで、マイペースな速さで二人を追った。

蒼影と白薙の姿は、もう五メートルほど前方にあった。

「速さで俺様になうわけねえよ、蒼影！」

白薙は呼吸を乱すこともなく、あっという間に目的地の公園に着いた。

後は、スチール製の空き缶を倒さないように足で踏みつけるだけ。

「うつし！ジ・エンド…」

「缶蹴ーった！！」

カーンツと鈍い音が辺りに響き、蹴られた空き缶は弧を描いて砂場に落ちる。

白薙は、やや呆気にとられて、ぽかんと口を開けていた。

「なっ…く、紅羽！？お前…！」

「えへへ…僕と黄涙も居ることを忘れちゃダメだよ、白薙！」

小柄な少年…紅羽は、片目ウィンクしてぐつと親指を前に出して言った。

反動で、紅い髪が下に流れ落ちるようにサラッと揺れた。

「ふふっ…白薙の負けだよ。これで八回目のオニになるけど…そろそろ代わるつか？」

ゾウ型滑り台の後ろから出てきた青年が、微笑しながら訊く。

「同情なんか要らねえつつうの！！次は、絶対四人共捕まえてやんからな！！」

「そう？それじゃ、次のオニもよろしく。今度は俺と山茶花嬢で組むよ。」

「くっそ…最悪でも、お前だけは捕まえて泣かせてやんからな、黄涙！！」

「俺を泣かせる？ふふっ…楽しみにしとくよ、白薙。」

黄色い髪と小さなクロ帽子がチャームポイントの青年…黄涙は、
にっこりと笑って返す。

「…急ぐまでも無かったか。」

白薙を追っていた蒼影も、公園に到着した。

「ママー、あのお兄ちゃん達、楽しそうだねー。千里も一緒に遊んで来ていい?」

「ダメよ、あんな野蛮な遊びしちゃ!ちいちゃんは、こっちでブランコゆらゆらで遊ぶのよ。」

「おかーさん!あのお兄ちゃん達、何してるのかなー?」

公園で遊んでいた数人の子供達とその母親達が好奇の瞳で、彼らを見つめていた。

「はあ…やっと追いついた。」

のろのろ走って来ていた山茶花が、ようやく公園にたどり着き、ふ
うと息をつく。

「あつ、山花ちゃん、お疲れー。」

「…うん、疲れた。まあ、それはいいけど…何かあったの、これ？」

山茶花の指差す“これ”とは、悔しそうに歯を噛み締めて睨む白薙
と満面の笑みで返す黄涙のことである。

「よくわからんが…いつものことだ。気にするな。」

「うんうん、すぐ仲直りするから大丈夫だよー。」

「あ…やっぱり、ケンカしてる状態なんだ…。」

蒼影と紅羽の返答に、納得したように呟く山茶花。

「るせえな、その外野三人！！もう一回やんぞ、缶蹴り！」

絶対泣かす…とかイライラするぜ…あの野郎とかぼやきながら缶を
茂みの中に拾いに行く白薙。

そんな彼の後ろ姿を眺めながら、

「…そもそも、なぜに缶蹴り？トランプ集めは飽きたの？」

今更の質問を、他のトランプ四重奏のメンバー三人にぶつける山茶
花。

「飽きてなんかいないさ、山茶花嬢。それに…飽きたなんて理由で
やめられるもんじゃないよ、トランプ集めは。」

「息抜き中ってこと？」

「うーん、そういつことになるのかなー。」

さっさと始めるぞと白薙がわめく声が聞こえてきた。

「ふふっ… 続きは次のゲームの後にね？ そんな大声出すと、子供達や奥様方の迷惑だろ、白薙。」

前半は山茶花に、後半は白薙への返事をする、黄涙は缶蹴り役を果たすため、白薙の元へ走っていく。

「えっ… ちょっと休憩したいんだけど。」

山茶花は、よいつと近くのベンチに腰掛けながら言った。

しかし、

「わっ！？」

「あっ… 山花ちゃん！？」

「ZOKKA…！？」

それは安易すぎる行動だった。

「動くな！Z O K K Aを傷つけられたくなくばな！！」

突然、背後に現れた男に羽交い締めにされてしまったのである。

男は、四十代後半ほどで灰色の髪で顔は日焼けして真っ黒。

服装は、黒ずんだカッターシャツと、ボロボロのジャージ。

地面からは数センチほど浮遊し、右手に持った小刀を山茶花の首元に突きつけている。

…人間ではなく、ハートブレイカーのようだった。

「よ、洋子！危ないから逃げるのよ！」

「怖いよ、ママー！！」

「わあああん！！」

公園で遊んでいた親子は皆、蜘蛛の子の如く散り走っていった。

「じゃあ、缶蹴るよ…って、山茶花嬢？」

「おわっ！？捕まっちゃったのかよ、茶花！？」

「…気付くの遅すぎ。」

振り返って驚いたような声を出す黄涙と白薙に対しての山茶花の突っ込み。

「…要求は何だ？」

「はっはは！貴様達にもわかってるはずだ。持っているトランプカード…全て渡してもらおうか！！」

目を細めて問う蒼影に対し、男は豪快に笑いながら答える。

「なるほどー。僕達と同じでカード集めてるんだね。」

「そうだ！わかったら、早くカードを渡せ！」

「だったら、カード持つてるよね、おじさんもー。」

紅羽は、あどけない顔に似合わない不敵な笑みを浮かべて言った。

次の瞬間。

「ぐはあっ！？」

男の口から出たのは、低いダメージ声だった。

いつの間にやら男の後ろに移動していた黄涙が、クルタナがで男の背中をバシッと激しく打ったのだ。

「あっ…。」

男の拘束が緩くなり、山茶花の体は自由を取り戻した。

「山茶花嬢…ケガは無い？」

「う、うん…大丈夫。」

危険だからと山茶花を下がらせると、黄涙は男に向き直る。

男は少しの間地面にうつ伏していたが、やがて背中をさすりながら立ち上がった。

「くそっ…やりやがったな、ガキが…っ!？」

「えっへへ…っかまえたー!」

そこに紅羽がボールを投げ、男の体をぐるぐる巻きにする。

「は、離せ!」

「離さないよー。ボーラは獲物を生け捕りにする武器。生け捕りにした獲物は…ねー？」

「な、なんだ、その間は…ひいつ！？」

会話を中断させたのは、木製の矢。

ヒュンと唸りながら、男の左頬をかすった。

かすった部分から、たらりと一筋の鮮血が流れる。

「ま、待ってくれ…！俺が悪かった…い、命だけは…！」

「……………命を取る気は毛頭無い。我々が欲しいのは…」

「お前が持つてるランプだぜ…！はあっ…！」

白薙は言葉を引き継ぐように言って、打ち出の小槌をブンツと横薙ぎに振った。

「ぐほおっ!？」

小槌は男の胸部をドカツと直撃。

激しく打ち付けられた男は、直立姿勢のままぱたりと後ろ向きに倒れた。

「へっ!ガキだからって甘くみつと痛い目に会っただぜ!」

「ふふっ…俺はもう成人しているんだけどね。」

黄涙は左手でドクロの帽子の位置を直しながら、男に歩み寄った。

男の胸元からは、三枚のトランプカードが浮き上がっている。

「クローバーが二枚とダイヤが一枚…か。」

手にしたカードを見ながら、黄涙が呟く。

「…クローバーは、預かっておく。」

蒼影が小走りで彼の元へ来て、二枚のカードを黄涙から受け取る。

「ちえっ…スペードは持ってねえのかよ…。最後決めたのは、俺様だっつのに…。」

「僕も頑張ったのになー。期待外れだよー。」

白薙は頭の後ろで腕組みをし、紅羽は至極残念そうに眉を下げた。

「期待外れって…。まさか、君達…このために缶蹴りしてたの？同じトランプ探ししてる人をおびき寄せるために…。」

「ふふっ、どうだろうね？」

トランプをポケットにしまいながら、おどけるように聞き返す黄涙。

「はあ…呆れた。結局、私はまた囿にされてたわけなのか…。」

山茶花は平然としている四人の顔を見比べた後、参ったというように額に手を当てる。

「まったく…椿の誘いをキャンセルさせられてやったことがこんな茶番だったなんて…。椿に…」

「あれっ？山茶花…？」

「合わせる顔が無い…って、椿！？」

山茶花は声の方向に顔を向け、目を見開いた。

向かって右側、のぼり棒が設置されている方向の道路には、片脇に雑誌を携えた椿の姿があった。

椿も山茶花と同様に、漆黒の瞳を大きく見開いている。

「山茶花…こんなところで何してるの？それに…その人達は…？」

椿が指差した“その人達”とは、トランプ四重奏の四人のこと。

そのことを理解した四人は、誰だと言いたげに眉を潜めて椿を見返している。

山茶花は瞳は見開いたまま、何と返すべきかと少し考えた。

「何って…その…えっと…」

「…親友の誘いをドタキャンしてまで公園で遊びたかったの？」

椿の目が悲しげに伏せられる。

「茶花の知り合いかよ？」

「親友って言うってたねー。悲しんでるみたいだよー。山花ちゃん、泣かせちゃダメだよー。」

「…二人とも、少し黙っててくれないかな。」

ピクピク引きつっている山茶花の口元を見て、これはやばいと紅羽と白薙は口を閉じる。

「ごめん、椿…。これには深いわけがあつて…」

「……………」

黙り込む椿。

「怒ってるよね…。無理も無い…。か。私のこと、思いきり怒っているよ…。」

山茶花は、椿は当然怒って最低とか言われると思った。

しかし、次に椿の口から出た言葉は、予想外のものだった。

「なあんだ、そっか…そうだったんだ！」

「えっ…？何が…？」

「もう…山茶花も人が悪いんだから。こういうことなら、あたしも誘ってくればいいのに！」

「こういうこと…？」

面食らって口をぽかんと開けている山茶花をよそに、椿はとびっきりの笑みを浮かべて続ける。

「そのオレンジ髪の人…なんか知ってる気がするって思ってたなら、山茶花を助けてくれたと言ってた人でしょ？」

「オレンジ髪って…俺様のことかよ？」

一歩前に出て自分を指差しながら、白薙が訊く。

「そうそう、あなたのこと！それから考えるに…、山茶花は助けてくれたお礼とか何とか言っただてしてたんでしょ、その人と！」

「それは違……」

「他の三人の人……ドクロ帽子の人と紅髪の人とイヤホンの人は、オレンジ髪の人の友達！二人のデートをつけてたけどバレちゃって、五人デートに切り替えた！……そうでしょ？ていうか、絶対そう！！」

「いや、だから……」

「照れなくてもいいよ、山茶花！言ってくれば、あたしもアドバイスしたりするのに……水臭いなあ。」

山茶花に弁解する暇を与えず、話し続ける椿。

「盛り上がっているところ悪いんだけど……お嬢さん。山茶花嬢の話も聞いてあげた方がいいんじゃないかな？」

見かねた黄涙が、山茶花の隣に来て口を出す。

「んっ？山茶花、何か言ってた？」

「うん…さっきからずっと。長くなるから、うちで話すよ。ここは目立つし。」

彼女の言う通り、周りにはいつの間にもやら遠山の人ばかりができ、ザワついていた。

恐らく、トランプ四重奏の戦闘を見ていた誰かがケンカだと勘違いして、呼び回ったのだろう。

「なんだ…普通の人間じゃないか。浮いてなどいないぞ?」

「いやいや、さっきは浮いていて、武器も持っていたんですよ!」

「きゃあ! かつこいい四人組じゃないの! 写真撮っちゃおっと!」

約二十人ほど集まった野次馬は、ケータイで写真を撮ったり、サイン色紙を突き出したりしていた。

「…人酔いしそうだ。」

「お、押し潰されちゃうよー！に、逃げよー！！」

紅羽の誘い声を合図に、トランプ四重奏の四人と山茶花、それから椿はその場から全速力で逃げ出した。

「あつ、待って！握手だけでもー！！」

「うっわ、ブレちゃったよ。もう一枚撮らせてくれ！！」

「ちょっと、誰なの！？今、私の足を踏んだのは！」

大混乱の渦の中から逃れた数名の野次馬が、彼らの後を追ってくるのだった…。

「ふう…えらい目に遭っちまったぜ…」

黄緑色の絨毯にへたり込み、白薙が嘆き口調で言う。

「元々は君達のせいだよ。」

「ごめんねー、山花ちゃん…」

「…別に謝らなくてもいいんだけど。過ぎたことは仕方ないし。反省してくれば、それでいいよ。」

申し訳なさそうな表情で頭を下げる紅羽に対し、山茶花はほんの少し表情を和らげて返した。

野次馬に追われていた彼女達六人は、山茶花の家に逃げ込んでいた。母親は看護士で帰りが遅く、父親は単身赴任なため、咎めたり不審がる人は居なかった。

「これからは、軽率な行動は控えるから許してくれないかな、山茶

花嬢？」

「…悪かった。」

わかればいいと、山茶花は蒼影と黄涙にも和らかな表情で返す。

「はああ…。山茶花、モテモテなんだね…。」

「だから、違うつて。」

「えっ、違つの？じゃあ、これは何の集まり？」

「…今からそれを話すんだけど。」

勘違いしたままの椿には、山茶花は少々呆れ顔だった。

「ふふっ…差し支えなければ俺から説明しようか、山茶花嬢？」

「そうだね…ややこしい説明は面倒だから任す。」

では…と、黄涙は椿に向き直る。

「まずは軽く自己紹介しておくね。俺は黄涙。トランプ四重奏のメンバーの一人さ。」

「黄涙ね！あたしは、香川　椿。…トランプ四重奏って、バンドのチーム名か何かなの？」

胸の前に両腕を構え、興味津々の表情で訊く椿。

「違うさ。最強のハートブレイカー四人組のチーム名だよ。」

「あつ、黄涙！そのことは言わない方が…って言っちゃったか…。」

「あれっ…どうしたの、椿嬢。」

ハートブレイカーと聞いて、きょとんとした表情で固まった椿に、黄涙が不思議そうに問いかける。

「ハートブレイカーって…都市伝説の…？」

「いや、あの…椿…それは…」

「す…素敵ー！！」

椿は目をきらきら輝かせ、立ち上がって叫んだ。

その声がとてつもない大声だったので、うるせえと白薙は両手で両耳を塞いでいた。

「本物のハートブレイカーがあたしと山茶花の前に…！やばい…やばすぎるんじゃない、これって…！」

「やばい…？何が危険なんだ…？」

蒼影は、言葉の意味が分からないようで、両腕を組んで首をひねる。

「蒼影…そんなに悩むほどの意味は無いから。」

「蒼影？イヤホンの人の名前？戦国時代の人みたい！そっちのオレンジ髪の方は！？」

「オレンジ髪なんて呼ぶなっつうの！俺様には、白薙って名前があらんだよ！！」

まだ耳は押さえたまま、白薙が抗議する。

「僕はねー、紅羽だよー。」

「白薙に紅羽ね！きれいな名前…やっぱり、異世界の人は違うなあ！」

「えへへ…そうかなー？」

椿に誉められて、紅羽はほんのり頬を赤らめて頬をかいいた。

「それで？それで！？あなた達四人は何のために、山茶花と居るの

？人間の世界を征服しに来たの！？」

「世界を征服、か…。それも悪くないけど…。俺達は、日本のパレルワールド“ジャンハン”からトランプを回収するために来たのさ。ZOKKA…JOKKERである山茶花嬢を守りながら…ね。」

「へえ…いいなあ、山茶花！こんな素敵な男の子達に守られて！羨ましすぎるよ！！」

「…そう思うなら、代わってほしいんだけど。」

山茶花は全く嬉しくなさそうに、冷たく言葉を返した。

「……………んっ？」

「な、なに、黄涙？急にまじまじ見つめて…。あんま見つめられると照れるかも。」

不意に黄涙に見つめられ、椿は多少たじろいだ。

数秒間、椿を見つめていた黄涙だったが、我に返ったのかハッと目を見開く。

「あ…ごめんごめん。何でもないんだよ…。それより…椿嬢。君も俺達と一緒にトランプ探しをしないかい？無料^{タダ}とは言わない…もちろん、お礼はするよ。」

「なっ…何、言いやがってんだ、黄涙！？ZOKKAを守るだけでも面倒なのに、これ以上荷物を増やす気かよ！！」

「面倒な荷物で悪かったね…。だったら、放つといってくれればいいのに…。」

皮肉げに山茶花が呟く。

黄涙は白薙に視線を向け、首を横に振った。

「そうじゃないよ、白薙。守られる者を増やすんじゃない、守る者を増やすとしていいるのさ。」

「どーいう意味なの、黄涙ー？」

「…どういう意味だ？」

紅羽と蒼影がほぼ同時に尋ねる。

「他のハートブレイカーが襲撃してきた時、必ずしも俺達が山茶花嬢の側に居れるわけじゃないだろ？俺達が入れない場所だってある…。だから、そういう時に側に居れる確率の高い人間に、山茶花嬢を守ってもらえたら…」

「僕達もトランプ探しの方に集中できるってわけだねー！」

「察しがいいね、紅羽。」

それほどでもないよーと、紅羽は間延びした口調で返す。

「いいね、それ！あたしが山茶花のナイト…うん、悪くないかも！」

「椿…そんなこと言つと本当に…」

「あたし、やるよ！やり方は全然わかんないけど、あなた達のトレーニング探し手伝う！なんか、面白そうだし！」

「ふふっ…決まりだね。」

山茶花がダメだってばと訴えるのも聞かず、黄涙と椿は話を進めていく。

どうなっても知らねえからなと白薙はご立腹で、楽しそうだねーと紅羽はご満悦だった。

蒼影は…

「世俗の言葉はわからん…。」

と、眉間にシワを寄せて悩んでいた。

「他のハートブレイカーと戦うってことは…武器が要るよね！何か…武器になりそうなものは…」

「これなんてどうかな？」

そう言うと、クルタナをヒュツと縦に振り、空間を斬り裂く黄涙。斬られた空間には無限の闇が広がっており、彼はそこから何やら一つの銃器を取り出した。

「銃…？うわっ、けっこう重たっ！！冷たっ！！」

一人で楽しそうに騒ぎながら、黄涙から銃器を受け取る椿。

「ふふっ…その銃は魔弾という名前さ。銃としての性能は抜群。ちよつと癖があるのが問題なんだけんど…」

「癖って…暴発するとかじゃないよね？椿に危険な物は持たせない方が…」

山茶花の言葉を遮るように、バンツと銃声が轟く。

「っ、椿！？大丈夫！？」

驚いて椿に駆け寄る山茶花。

当の椿は銃口を窓に向けたまま、目を見開いて床に座り込んでいた。

発泡された銃弾は、窓をべっこりとへこませ、サッシ部分に落下していた。

「うおっ！？ビックリさせんじゃねえよ！」

「耳がキーンとしちゃってるよ……。」

冷や汗をかいて怒鳴る白薙と、耳を塞いで嘆く紅羽。

「……やはり、女性が持つには危険すぎるのではないか？」

「そのようだね……二十パーセントは高すぎるか。」

蒼影と黄涙は、それほど驚いてないようで、至って冷静に考察していた。

「二十パーセントって…危険すぎるって…何のこと！？椿がケガでもしたらどうする…」

「きゃあ！今の見た、山茶花？異世界の武器…最高すぎるよー！」

「えっ…椿…？」

興奮して魔弾をぶんぶん振り回す椿に、山茶花は呆気にとられた。

「椿嬢、喜んでいるところを悪いけど…違う武器をあげるからそれは返し…」

「あたし、この魔弾がいい！！呪われた武器…それを恐れないで親友を守るために使う女子高生…なんか、様になってない？」

「…魔弾が呪われた武器ってことを知ってて使ったのかい？」

魔弾に伸ばしていた手を引っ込めて訊く黄涙。

椿は、魔弾を突き立ててもっちらんと答えた。

「てやんでい…オカルトマニアの香川　椿の情報網を甘くみてもらっちゃ困りますよ、お客さん？魔弾…どんな人間でも銃の名手にするけれど、使用者にとって最悪のタイミングで呪いを実行する銃器…なんでしょ？べらぼうめい！」

「…なんで、江戸っ子口調？しかも、使うとこ間違ってるし。」

「なんとなく。それで…二十パーセントっていうのは、その呪いが実行される確率…ってところかな。」

山茶花の突っ込みを軽〜く流しながら、椿は解説を終えた。

「…驚いた。詳しいんだね、椿嬢。」

「てやんでい！香川椿の情報網を…」

「…それはもついいから。」

山茶花に止められ、こほんと一つ咳払いをして居住まいを正す椿。

「黄涙…本当にあたしはこの武器でいいよ。てか、この武器がいいの！！他の武器を持つくらいなら、鞆で戦うから！」

「椿嬢がそこまで言うなら…致し方ないね。まあ、殺傷力の無い銃弾だし、イメージ的に君なら使いこなせそうだね。」

「おつ、物わかりがいいね！ありがとね、黄涙！」

（ああ…二人とも無茶苦茶だから変なところで気が合っちゃってるよ…。）

盛り上がる二人を遠い目で見つめながら、山茶花はそう思っていた。

「そこ！二人で盛り上がってんじゃねえよ！俺様はまだ納得して…」

「それでもまだ納得してくれないの、白薙？」

「こ、こっちに銃口向けんじゃねえよ！な、納得してやつから、ど

つか違うところ向ける！」

ありがとうと白薙に返すと、そっちの二人はどうなのと、銃口を蒼影と紅羽に向け替える椿。

「ぼ、僕ー？い、いいと思うよー。」

「うっ…おまえの勝手でいいのではないか…？」

たじろぎながら答える二人にもありがとうと言って、椿は銃を小脇に抱え込む。

「これで、みんな納得したね！あっ…ふと思ったんだけど…山茶花も何か武器持った方がいんじゃない？狙われてる本人だし。」

「へっ…？そうかな…考えたこともなかったけど。」

「絶対持ってた方が安全だって！！ねえ、黄涙？山茶花には何か無いの？」

別にいいよと答える山茶花とは裏腹に、椿はかなりの乗り気だった。

その迫力に負け、そうだなあと黄涙は空間から何か平べったいものを取り出した。

「武器…ではないけど、これなんてどうかな？」

「……………盾？」

山茶花が受け取って観察してみると、それは鋭い牙を携えた口の絵が描かれた盾だった。

「オハンだねー。」

「オハン…？盾の名前？それとも…この口のモデルの人の名前？」

「盾の名前だよー。使う人が危ない目に遭った時に、耳をつんざくような大声で吠えるんだー。ペットみたいでかわいいんだよー！」

「…かわいいのかな。」

疑問視する山茶花に、かわいいんだよーと紅羽は念押ししていた。

「へっ！俺様達が守ってやってんのに…武器とか防具なんか要らねえだろうが！」

「盾に焼きもち焼いているのかな、白薙？」

「なっ…んなわけねえだろ！小馬鹿にすんなつつの、黄涙！」

「ふふっ…凶星なんだね。」

「違っつて言っつてんだろうが…！」

顔を真っ赤にして追いかけ回す白薙と、にやにやしなから逃げる黄涙を見ながら、

「何でもいいけど…人の家で暴れないでよね…。」

切実に願う山茶花だった…。

- To be continued... -

・美色・

「月は…赤い。月は…青い。ジャンハンは美しき色の世界…。けれど…この世界で最も美しい色は、赤でも青でもなく…紫色。そう思うだろ、光幻^{コウゲン}？」

改装中のため無人となっているジャンハン警備局の屋根の上。

少年は、赤い月をじっと見つめながら訊いた。

年の頃は、十代前半ほどか。

月に照らし出された瞳の色は紫で、髪はクリーム色のふわふわパーマがかかっていた。

上半身に羽織った白ポンチョの紐が、風にゆらゆら揺れていた。

「はい、紫月様^{シツキ}。あなた様のお名前と同じ…紫色こそがジャンハンを灯す美しき色です。」

彼の隣に座っている女性が事務的な口調で答える。

長い藍色の髪に紺の瞳。

整った顔立ちの美人だが、その顔に表情は無かった。

まるで執事のように、黒いスーツをピシッと着こなしている。

「光幻…ジャンハンとよく似た世界に“日本”がある。醜く汚い色にまみれた世界…。自分は今からその世界に行こうと思う。」

「……………あなた様の思っままに。」

「しばらく留守は、おまえに預けておく。」

「お気を付けて、私の大事な主…紫月様。」

光幻の言葉を背に受けながら、紫月と呼ばれた少年は立ち上がり右手の剣を空間にヒュツと一振り。

斬られた空間に、子供なら余裕で入れるほどの大きさの裂け目ができた。

「待っていないよ、トランプ四重奏…壊してあげるから。」

口元にニヤリと不敵な笑みを浮かべ、紫月は空間の奥へ入っていったのだった。

最近できたばかりの本屋“水森書店”の雑誌コーナーの前。

山茶花は、ある一冊のファッション雑誌をかぶりつくように真剣に読んでいた。

（まずは、肩幅ほどに足を開き…）

「絶対にリバウンドしないダイエット法・入門編”…か。嘘くせえな。」

「あつ…。」

不意に彼女の手から、雑誌が奪われた。

誰かと思って振り返ると、そこに居たのは、オレンジ髪と桃色の瞳を持つ少年…

「白薙…！？なんで、こんなところに…？」

「俺様が本屋に居たら悪いのかよ？」

白薙だった。

山茶花から奪った雑誌を、けだるそうな表情でパラパラめくっている。

「いや、悪くはないけど…ってそうじゃなくて。…他の三人は？ハートブレイカーが普通にこんなところに居て大丈夫なの？」

「蒼影はCDコーナーで音楽を試聴中。紅羽は二階のゲームコーナーで遊んでる。黄涙は、外で女子高生と雑談してっぜ。…ハートブレイカーつつつても、浮いたり武器振り回したりしなけりゃ、人間と同じ。バレはしねえよ。」

「…何しに来たの？」

雑誌を閉じ元の棚に戻し、白薙は山茶花の方を向いた。

「茶花…おまえの後を尾けてきたただけだったの。」

「うん、それはなんとなくわかるけど…中まで入って来なくてもいいんじゃないかなって思うけど。」

「まあ…俺様もそう思ったんだけどよ…黄涙が…」

「俺を呼んだかな、白薙？」

「おわっ！？驚かすんじゃねえよ！」

唐突に目前に現れた黄涙に、声を荒げ身を引く白薙。

「なんだね…騒がしい。」

「これだから、最近の若者は…」

「本屋では静かにするのはマナーだろうが…」

本を立ち読みしていた周りの人間が、訝しげに二人に視線を向けている。

「あ…すみません…って、なんで私が謝ってんだろう…？」

疑問を口に出しながらも、山茶花は周りの人間に向けて頭を下げた。

それを見た周りの人は、

「やれやれ…迷惑な人間はいつの時代にもいるな。」

「そろそろ帰らないとね…占いコーナー読んでから帰りましょっと。」

「

ぶつぶつ呟きながら、立ち読み姿勢に戻っていた。

「うつ…くそつ、だから昔から好きじゃねえんだよ…本屋とか図書館とか。早く出っぞ、こんなところはよ！」

「出るって…まだ本選んでないんだけど…」

「山茶花嬢、大事な話があるんだ…ここは白薙の言う通り、外に出ようか。」

「えっ…ちょっと…わかったから押さないで…」

山茶花は、二人に背中を押され半ば無理矢理な形で書店の外まで出された。

ウィーンと自動ドアの開閉音が鳴り、ドアが閉じた。

「それで…大事な話って？」

「聞きたくないかい、山茶花嬢？俺達がなぜ、安全に見える店の中まで入って君のことを見守っているのかを。」

「それは確かに気になるけど…」

「ふふっ…歩きながら話そうか。ここに居ると、落ち着いて話ができそうもないんでね。」

黄涙は微笑をたたえて言いながら、チラと後ろを振り返った。

彼のメートルほど後ろでは、セーラー服を着た女子高生三人組が
キヤーキヤー騒ぎながら、黄涙をケータイで写していた。

「ジャンハンには女性のハートブレイカーも居るんだけどね…人間
の女性ほどは騒いでくれないんだよ。」

「へっ…いい気なもんだよな、色男はよお！俺様は、茶花を守るつ
ていう役目をしっかり果たしていたつてのによ！」

「ひがんでいるのかい、白薙？今度、ナンパのやり方をレクチャー
しようか？」

「…っざけんな！！誰がおまえなんかに…！」

「あー！また、ケンカしてるー。」

書店から出てきた少年が、間延びした口調で言った。

紅いサラサラの髪に山吹色の瞳と泣きボクロ。

「紅羽…この二人をどうにかしてくれない？目立つし…うるさいんだけど。」

「うーん…放つとけば仲直りすると思うけど…うわあ！？」

紅羽は思わずぺたんと尻餅をついてしまった。

女子高生達の騒ぎ声の矛先が紅羽に移り、彼を囲むように集まってきたからである。

「何、この子ー？まぢ小っちゃーい！髪サラサラだし、かわいいんですけどー！！」

「ヤバい！連れて帰りたいわー！！」

「君、何て名前？どこから来たの？」

「あうっ…た、助けて、蒼影ー！！」

紅羽の叫び声に反応するかのようになり、自動ドアから青年が一人駆け出てきた。

顔の右半分を覆い隠す漆黒の前髪に青い瞳。

耳からズボンにかけてイヤホンコード。

「何事だ、紅羽!？」

「きゃあ!そっちの人もなかなかイケてるし!マヂで何の集まりなわけ、これって!？」

「イ、イケてる...?マヂ...?生け花のことか？」

女子高生の一人に歩み寄られ、蒼影というらしい青年は幾分かたじろいでいた。

「蒼影...ピュアすぎるのも問題だと思うよ。」

「ピュア?日本語では新鮮という意味...。つまり...何だ？」

「.....。」

呆れ果てて遠い目をする山茶花の肩を、いつの間にやら隣に移動してきた黄涙がぽんつと叩く。

「蒼影には俺からよく教えとくよ。とりあえず、今は……」

「こ、ここから脱出するのが先ー!」

「走つぞ!遅れんなよ!」

先導するように、真っ先に白薙が走り出す。

続いて、紅羽と蒼影もダツと全速力で駆ける。

「行こうか、山茶花嬢。」

「えっ…あ、うん。」

山茶花の手を引いた黄涙も、三人の後を追う。

「待ってー！カラオケでも行こうよー！」

「送信…と。次はオレンジ髪の人、写させてー！！！」

「えー、走るの？」

いろいろばやいたり叫んだりしながら、女子高生三人も彼らの後を小走りで追うのだった…。

「ここまで来れば…はあ…もう大丈夫だよね…？」

肩で大息をつきながら、紅羽が誰にともなく尋ねる。

「とりあえず撒いたみてえだしな…少し休もうぜ！俺様、喉が乾きまくっちゃってよ…。」

「…休めば？誰も止めないと思うし、水ならそこにあるから。」

公園の中心にある水飲み場を指差して、山茶花は特に何の感情も込めずに白薙に言った。

言われなくてもわかってるつつつうの言葉を返しながら、白薙は水飲み場に近づき蛇口をひねる。

飴のような形をした水道の先端から、水が上向きに吹き出した。

「何度も訊くようだけど…大事な話って？」

ブランコを支える水色の柱にもたれかかって白薙を見ていた黄涙に、山茶花が思い出したように訊いた。

「実は…厄介な人物がこつちに来たって話を聞いてね…。念のため、君の守護を強化することにしたんだよ。」

「厄介な人物…？」

「…天才と呼ばれるハートブレイカーのことだ。」

黄涙に代わって、蒼影が答える。

満足のいくまで水を飲み終え、ぷはあと息を吐く白薙の姿が彼の後ろに見えた。

「彼の名前は紫の月と書いて紫月と…」

「“様”だ。」

「えっ…？」

乱入してきた声に、トランプ四重奏の四人と山茶花は一斉に声の主を目で探す。

「あっ！あの滑り台の上ー！」

「へっ！やっぱり来やがったか！」

白薙が口の左側だけを吊り上げて、不適に笑った。

「低俗な会話に興味は無い。トランプ四重奏：あんた達を壊してあげるよ。」

滑り台の上から、地面にひょいと降り、少年は言った。

クリーム色の髪が、上向きにふわりとなびき、紫色の瞳には四人と山茶花の姿が移っていた。

上半身に羽織った白いポンチョの下から、左肩に彫られた大鎌のタトゥーが見え隠れしている。

大人びた口調の割には背が低く、まだ十代前半ほどに見える。

「……………あの子より厄介な四人組が、私の目の前に居るんだけど。」

巻き込まれたことに気付いた山茶花が、皮肉気に呟いた。

「何をごちゃごちゃ話している？」

「へっ！てめえみたいなガキには関係ねえよ！」

ガキという言葉聞いて、紫月の瞼がピクツと動いた。

「…ガキだと？」

「天才つつ肩書きにうぬぼれて、他のハートブレイカーにちょっかい出してると噂を聞いたぜ？これがガキじゃねえなら、何…！」

「黙れ。」

紫月は白薙に鋭い眼光を向けると、空間から一つの剣を取り出した。

刃幅は狭く先端は鋭く尖っていて、一見すると槍のようにも見える。

「気が変わった。壊す前に…最強と呼ばれる実力がどの程度なのか…見てあげるよ。このマン・ゴーシュで…ね。」

取り出した特殊短剣…マン・ゴーシュを左手に構えると、紫月は地面をタンツと強く蹴り一直線に白薙の方へ。

「うおっ！？」

自分の体に真っ直ぐ振り下ろされた短剣を、白薙は打ち出の小槌で受け止める。

ガツと擦れたような音が辺り一体に響いた。

「白薙ー！」

「白薙…！」

「…っ…来んじゃねえ、紅羽、茶花！！俺様一人で…こいつを泣か

せてやんからな！」

駆け寄ろうとした二人を厳しい言葉で制止しながら、白薙は思い切り紫月のマン・ゴーシュを振り払う。

「……………くっ。」

二メートルほど遠ざけられた紫月は、空中で体制を整え直した。

「すっかり油断しちゃったぜ…。けどよ、次は俺様の番だぜ！！」

威勢のよいかけ声を出すと、白薙は目で追いつくのがやっとなほどの猛スピードで紫月の前へ移動する。

「……………っ！？」

「たあっ！！！」

面食らい怯む紫月の眉間に、白薙の小槌が振り下ろされ…

「…なーんてね。」

「なっ…うああっ!？」

…なかった。

紫月は左に身を交わし、体制が前のめりになった白薙の脇腹に素早くもう一つの剣…タルワールで斬りつけたのだ。

創傷部からはパツと鮮血が飛び散り、タルワールの刃と白いポンチヨを赤く染めた。

白薙の体は人形のように脆くドサツと地面に崩れ落ちる。

右手に携えていた小槌も、数メートル離れた場所に転がっていった。

「白薙…!」

「ぐっ…やりやがった…な…ガキ…っあ!」

「まだガキというか…学習しない愚か者が。」

脇腹を押さえて呻き声を上げる白薙の創傷部を蹴り上げる紫月。

「止める…！」

「んっ…！？」

蒼影の雷上動から放たれた矢が、真っ直ぐに紫月の左肩に刺さった。

だが、紫月は痛みを感じる様子は無く、蒼影の方に顔を向ける。

「白薙から離れる。さもなくば…」

「いいよ、離れてあげる。」

「むっ…！？」

一瞬、見ていた全ての者には、紫月の姿が消えたように見えた。

しかし、実際は光速で高く飛翔しただけだった。

「上……だと!？」

「気付いたところでもう遅い。」

紫月は雷上動を構え直す蒼影を見下ろし、彼の右肩にマン・ゴーシユを突き立てた。

ドスッという貫音と

「うぐっ!？」

蒼影の短く低い驚声。

白薙の時と同じように、傷部分からはパツと鮮血が舞い上がる。

そしてそれは、血に汚れていなかったマン・ゴーシユにたつぷりと

血を吸わせた。

「蒼影…!!」

「迂闊…だった…。」

蒼影は仰向けにドッと地面に倒れた。

顔からは血の気が引いており、意識をも失ってしまったのか、微動だにしなくなった。

「次は…誰？」

紫月は血で濡れたままのマン・ゴーシュの剣先を、残りの三人に向けた。

「蒼影までやられるなんてね…さすが、最年少十歳の天才ハートブレイカーだね、紫月。」

「…“紫月様”だ。次は誰だと訊いている。」

黄涙は、つれないねとわざとらしく眉を下げてみせた。

「どうするの…黄涙、紅羽…？」

「次は…僕が出るよ…！」

小声で問いかけた山茶花に、彼女を守るかのように前に出る紅羽。

普段のあどけない顔とは違い、至って真剣な表情である。

「子供…？バカにしているのか？」

「僕はこう見えても十六歳だからー！君の方が子供でしょー！」

「まあ、いい……………遊んであげるよ。」

紫月は上の歯全てが見えるほど口を開けて笑ってみせた。

その笑顔は、彼の歳には不釣り合いなほど不気味で残酷な笑みだ。

「むう…僕は子供じゃないって言ってるのにー！」

紅羽は口をつーんと尖らせて言うと、右手にブリューナクを携え左方向に浮遊した。

「…遅い。それでフェイントをかけたつもりか？」

紫月はぽつりと呟くと、紅羽の浮遊した方向とは反対方向へ浮遊し、一気に距離を詰める。

そうして、

「終わりだ！」

ヒュツと風を斬りながら、タルワールを紅羽の左脇腹目掛けて、横屈ぎに振る。

「わっ！？」

「紅羽…！」

山茶花は思わず息を呑んだ。

しかし…次の瞬間。

聞こえたのは紅羽の悲鳴ではなく、ガチッと何かが擦れたような鈍い音だった。

「……………なっ！？」

「えっへへ…捕まえたよー、紫月！」

紫月は、目を見開いて多少たじろいでいた。

紅羽を仕留めたはずのタルワールが、細い縄…ボ―ラで捉えられていたのだ。

縄の先端には、重さ二キロの石がくくりつけられていて、ガチッと

いう音はそれに当たった音である。

「くっ…ならば、マン・ゴーシュで…」

「それも…捕まえたーっ！」

「……………！？」

紅羽は二本の内のもう片方の縄を、紫月の左手にあるマン・ゴーシュに向けてひゅっと投げる。

縄はマン・ゴーシュの鞘部分に引っかかり、くるくると固く巻きついた。

「ちっ…こんな物…！」

紫月は両方の武器をブンブンと上下に激しく振ったが、ボーラの先端の石がおもりの役目を果たしており、容易には外れない。

「観念しなよー、紫月！ごめんなさいしたら許すから…わあっ！？」

ブリューナクの先を紫月に突きつけようとした紅羽の体が、重力に逆らって上向きに浮き上がる。

しかし彼は、自分から浮き上がったのではない。

紫月がボーラに巻かれた二つの武器を、上向きに振り上げたためであつた。

「調子に…乗るな。」

「うつ…!!」

そのまま紅羽の体は公園の端にひっそり立っていた木に、ドッと打ちつけられる。

「強さの絆？最強…？甘すぎるんだよ、あんた達は…！」

木がミシミシと軋む。

押し付けられる力が徐々に強くなり、紅羽は耐えきれずうああと

呻いた。

「紅羽…！助けないと…」

見かねて駆け出そうとした山茶花の左腕を、黄涙がパシッと掴む。
そうして、振り向いた彼女に黄涙は二度首を振ってみせた。

「行っても無駄だよ、山茶花嬢。」

「無駄かどうかは…私が決める。離してよ、黄涙…！」

「うつつ…。」

二人が問答している間に、紅羽の体はズツと木に反って下がり動かなくなってしまった。

「あつ…！」

「…この程度なのか、トランプ四重奏の力は。」

紫月は両方の剣に絡まっていたボ―ラをほどき、山茶花と黄涙に向き直る。

血で汚れていたはずの二つの剣は、いつの間にか元の輝く銀色に戻っていた。

「黄涙…」

「そう睨まないで、山茶花嬢。理由は後で話すから。」

山茶花に極上の笑顔を見せると、黄涙はクルタナを胸の前に構えた。

「やっと異結界が解けたよ、紫月。俺だけ除け者にするのはあんまりじゃないかい？」

「…………クルタナ使いの黄涙。要注意ハートブレイカーリストに載っていた…。」

「ふふっ…そんなリストがあるんだね。まあ、何と呼ばれていよう

と俺には関係ないけど。」

「…二人だけで話を進めないでくれる？」

全く話の意味を理解できない山茶花が、怪訝そうに眉を潜めて会話に乱入してきた。

「ああ…ごめんね、山茶花嬢。異結界というのは、異空間を作り出す結界のことさ。」

「……………わかりやすく、手短かによろしく。」

「簡潔に言つと…Aという空間とBという空間が混じり合つてCという空間ができているとする。その中に異結界を作ると、AとBの空間が完全に分離してしまうんだ。だから、同じCの空間に居るように見えても、実際は位相のズレた二つの空間が存在していて、互いに干渉できなくなるって仕組みさ。わかったかい？」

「なんとなくわかったような…わからないような…？」

腕組みをして首を傾げる山茶花。

黄涙は、ちなみにZOKKAである君も異結界をくぐることはできなかったのさと補足した。

「…話は終わったか？」

「待たせてごめんね…紫月。始めようか。山茶花嬢は危ないから下がっててね。」

辺りの空気が、ピリピリと突き刺すような空気に変わる。

紫月が動く。

地面をタンツと蹴って素早く黄涙の背後に回り込むと、左手のマン・ゴーシュで首元を狙う。

「ふふっ…いい動きだね。」

黄涙は微笑しながら誉めると、くるっと身を翻し、右手のクルタナで攻撃を受け止めた。

剣と剣が擦れ合い、ガチツと鈍い金属音を立てる。

「くっ…。」

「どうしたのかな、紫月？暑いのかい？」

鰐迫り合いになった途端に、紫月の額から一筋の汗が流れる。

「暑くなど…ない！」

「そうかい？じゃあ、その汗は…」

「うるさい…！」

「おっと！」

紫月が右手のタルワールで、黄涙のクルタナの鰐を打つ。

黄涙は、空中で宙返りをするように回り、距離を置いた。

紫月の刃の先端が当たったようで、右手の親指に二ミリほどの斬り傷ができていてそこからタラリと鮮血が流れる。

「やってくれたね…紫月。今度は俺の番だよ。」

「壊す…！」

二人は同時に動く。

紫月はタルワールを手に急降下し、黄涙はクルタナを左手に持ち替え上空へ舞い上がる。

登り棒より弱冠低めの高さで、両者の剣はぶつかり合った。

激しく擦れ合った二つの剣の中心から、バチバチッと火花が散る。

「ぼつと見てるだけでいいのかな…？でも、手伝おうとしたところで、却って邪魔になるだろうし…。」

「うつ…のやろうつ…しゃがって…。」

「あつ…大丈夫、白薙？」

何か咳きながら上半身を起こそうとする白薙に気付き、山茶花が小走りで駆け寄った。

傷口からの出血はもう止まっているようだったが、服にはべったりと鮮血がついていた。

「大丈夫に…っ…見えるのかよ…？」

「見えないけど…一応、定番の質問だから。」

「茶花…おまえなあ…っ…冷静すぎっぞ…。」

「だって、止血できそうなものは持ってないんだから、仕方ないでしょ。助太刀しようにも、下がってろって言われたし…。」

白薔と山茶花が漫才のような会話をしている間にも、黄涙と紫月は熾烈な戦いを繰り広げていた。

「ふふっ…疲れてきているようだね、紫月。剣さばきが悪くなってきたよ?」

「黙れ!自分は…あんた達のような甘い奴らには負けない…!」

「んっ…!?!」

紫月は、タルワールに渾身の力を込めて黄涙のクルタナを弾き飛ばす。

黄涙の手から離れたクルタナは、カランと乾いた音を立てて数メートル離れた地面に落ちた。

「へえ…見かけによらず、けっこう怪力なんだね。」

「その余裕…へし折ってあげる!」

紫月は黄涙の胸部を斬るように、タルワールを横薙ぎに振った。

だが、黄涙は不敵な笑みを浮かべているだけで避けようとしな

「あつ…黄涙…！」

「ばつ…避けるよ…!!」

山茶花と白薙が叫ぶ。

紫月のタルワールが黄涙の体に触れそうになった刹那。

黄涙の姿がフツと消えた。

「消えた…？」

山茶花は、信じられないといったように目を見開く。

「なっ…どこに行った!？」

「ここだよ、紫月。」

狼狽する紫月に、面白そうにクスクス笑う黄涙の音がすぐ近くから聞こえてきた。

どこかと探すまでもなく、彼の姿を紫月は確認できた。

そう…横に振られた状態のままのタルワールの刃の上である。

「へっ…かつこつけやがって…。」

「…すごい跳躍力。」

白薙は弱々しく笑い、山茶花は普段と変わらない表情で感想を述べた。

「くっ…降りろ…!」

紫月は、タルワールを上下左右に動かすが黄涙を振り落とすことはできなかった。

「降りないなら…マン・ゴージュで串刺しにしてあげる…！」

「おっと…！それはさすがに困るかな。」

「……………っ！？」

紫月がマン・ゴージュを構えるより早く、黄涙は真上に飛翔する。

そして、

「ふふっ…乱暴なことしたくないんだけど…ごめんね、紫月。」

「うあっ！？」

タルワールごと紫月の腹部を蹴り上げる。

紫月の体は大きく仰け反り、茂みに強く打ち付けられた。

左手のマン・ゴーシュは地面にトスツと突き刺さり、右手のタルワールは根元からパツキリと折れている。

「くっ…まだ負けたわけでは…」

「終わりだよ、紫月。それにね、最初から君は負けていたんだよ。」

胸部を襲う痛みで顔を歪めつつも体を動かそうとする紫月の眉間に、クルタナの先端を向ける黄涙。

太陽に反射して、刃がキラツと鈍く光っていた。

「あれって…どういうこと、白薙？」

「へっ…あいつが言ったままの意味だぜ。」

山茶花の質問に答えると、白薙は脇腹を抑えて立ち上がり、もう片方の手でズボンのポケットからトランプを一枚取り出す。

彼が担当するマーク…スペードのQだった。

「トランプカード…。」

「そうだよー。僕達の目的は、最初からこれを手に入れることだけだったんだよー。」

「紅羽…。」

気を失っていたはずの紅羽が、大木の上でトランプカードをくるくる回しているのが見えた。

「…そのためなら、負けたフリをすることも作戦の内というわけだ。」

「蒼影…。」

蒼影は水飲み場にもたれかかっていた。

左手にはクローバーのトランプ。

「…自分と本気で戦う気は無かった、ということか。」

「トランプを集め終えるまでは…ね。別の形で会っていたら、こうはいかなかっただろうけど。」

黄涙はクルタナは動かさず、右手で黒ベストのポケットをぐそぐそと探りトランプカードを取り出す。

ダイヤの三が描かれたカードだった。

「自分を…クルタナで斬るつもりか…？」

「…見ればわかるだろ、紫月。クルタナには刃の先端は無い…つまり、これで君を斬ることはできないさ。」

黄涙は説明口調で言うと、クルタナを刀鞘に収め、紫月から離れた。

「トランプを持ってねえ奴とこれ以上戦う気にはならねえよ。さっさとジャンハンに帰りやがれつつの。」

「また元気になったら、遊んでもいいよ。でも、荒っぽい遊びじゃなくてー、缶蹴りとか鬼ゴツコがいいなー。」

「…我々も次に会う時までには、おまえがより退屈しない戦い方を身につけておく。」

白雉、紅羽、蒼影の順で声をかけると、三人は公園から歩き去って行く。

「紫月…それじゃ、またね。」

黄涙もヒラヒラと手を振りながら、三人の後を追って走り出す。

公園には、山茶花と紫月の二人が残された。

「…あんたも、自分のことをまじまじ見てないで行けよ。」

「うん…行くけどその前に…武器、壊してごめん。あと、弁償しろって言われてもできないことも謝っとく。」

「なんで、あんたが謝るんだ…？」

怪訝顔の紫月に、なんとなく言葉を返すと山茶花もトランプ四重奏の後を追って公園から出て行った。

一人になった紫月は、

「また餌を用意して…遊んであげる。覚悟してろよ…トランプ四重奏…！」

不穏な言葉を呟き、マン・ゴーシュで空間を切り裂いたのだった…。

「…ってえ！…もつとしみねえようにできねえのかよ！？」

「…無茶なことと言わないでくれる？それに、文句言つなら自分でやればいいでしょ。」

壁時計の長針が数字の三を指す頃。

白薙は山茶花の家で、ケガの処置を受けていた。

他のトランプ四重奏のメンバーは大したことないケガだったが、白薙だけは思ったより深い傷を負っていたからだ。

「自分でやれって…おまえが消毒するとか言い出したんだろうが！責任持って、最後までやりやがれつつの…！」

「…元気のいいケガ人だこと。」

「へっ…大体、こんくらいの傷で消毒なんて、大げさすぎんだよ！」

（このくらいって…かなり染みるほどの大ケガしてるくせに。）

心の中で思ったが、ケンカになると面倒くさいと口には出さない山茶花。

「…あと、包帯巻いたら終わり。これくらいは、自分でできるよね？」

「できるに決まってるだろうが。貸しやがれ…」

「たっだいまー、山花ちゃん、白薙ー！おやつ、買ってきたよー。」

「うおっ！？」

突如、窓から入ってきた紅羽に後ろからドンツと体当たりされ前のめりに倒れる白薙。

山茶花から奪った包帯が、黄緑色の絨毯に落ちてコロコロ転がっていった。

「あれー？白薙は？」

「… たった今、君が突き飛ばした物体が白薙だけだ。」

「えっ… 僕が突き飛ばした…？」

紅羽は額から冷や汗をかきながら、恐々と目の前に倒れている白薙に視線を移した。

白薙は両手を床につきむくりと起き上がると、猛獣のような鋭い目つきで紅羽を睨む。

「紅羽… やりやがったな、この野郎がっ！！」

「うっ… わああん！わざとじゃないんだってばー！！」

「待ちやがれ！！今日という今日は許さねえ！！」

泣きながら逃げ回る紅羽と打ち出の小槌を振り回しながら追いかける白薙。

ドタドタという足音が響く。

「平和になった途端、これだからね…。」

「…呆れた奴らだ。」

「外でやってよね…はあ。」

そんな二人を、白薙と蒼影と山茶花は、冷めた瞳で眺めているのだ
った…。

紫色の太陽が沈みかけていた。

「月はきれい…。けれど…今日は闇夜…。月は…出ない。」

ジャンハン警備局の屋根の上。

紫から黒に染まりつつある空を見上げ、紫月がぼつりと呟く。

「お帰りなさいませ…紫月様。」

「ただいま…光幻。勝てなかった…彼らには。」

光幻は、そうですかと返すと紫月の隣に座った。

「今回はたまたま運が無かったのでしょうか。次こそは…紫月様の勝利を。」

「…当然。」

紫月は短く返すと、タルワールを光幻の手に預けて沈みゆく太陽に

マン・ゴーシュを重ね合わせた…。

- To be continued -

・呼応・

ジャンハンにそびえ立つ高いビルの屋上。

黄色い髪に小さなクロ帽子を被った青年…黄涙は、フェンスに腰掛けてぼんやりと赤い月を眺めていた。

刃先の無い片手剣クルタナの刃が、月光に照らされ鈍く光る。

「…………ふう。今日でまだ四日目か。」

ぽつりと呟くと、彼はコンクリートの床に寝転がる他のトランプ四重奏のメンバー三人に視線を移す。

紅羽は穏やかな寝息を立て、白薙は時折激しいいびき、蒼影は呼吸

をしているのか疑問に思えるほど静かだった。

「三人共…よく寝られるね、今の状況で。山茶花嬢に何かあったらと思うと…俺はとてもしゃないけど寝てられないのに。」

呆れと羨望が入り混じった声で言うと、黄涙は再び赤い月に視線を戻す。

短いようで長く、長いようで短いジャンハンの夜が更けていく………。

同時刻、日本のある場所にある木造建築の学校。

「もう四日目か。平和な時間はあっという間に過ぎていく…ってことかな。」

昼休み、山茶花は机にだらっとうつぶし顎を山積みの教科書に載せて呟いた。

きっちりまとめられた茶色いポニーテール髪がかすかに揺れ、オッドアイの瞳はどこか遠くを見つめている。

「平和って…そんな疫病神みたいに言ったら、トランプ四重奏の人達が可哀想だよ。」

親友の香川椿が、フォローするように言った。

紫色の髪が外から入ってきた風にふわりとなびく。

「…実際、そうだよ。彼らがトランプ探しに来て、ZOKKAとかいう役割押し付けられてからのこの二ヶ月間…ろくなことなかった。」

「そうかな？あたしは、トランプ四重奏の四人と居ると、楽しい気

分になるけどなあ。」

「…ほぼ毎日、彼らと一緒に居たら、さすがに嫌気刺すと思うよ。」

「そういうもののかなあ。でもさ…それだったら逆に離れてると寂しくなるんじゃない?」

「全然。」

山茶花はきっぱりと答えた。

こう言われては、椿もフォローのしようがない。

彼女は少し考えてから、話題を変えてみた。

「そう言えばさ…っていうか、わざと触れないようにしてたんだけど。」

「何?」

「明日から三日間、テストだよね…。今回範囲広いしさ…今日は図

書館で二人で勉強しない？そっちの方が一人でやるより、はかどりそうだし！」

山茶花は、どうしよっかなと少し言葉を濁す。

「あれっ？もしかして、もう用事が入ってた？」

「用事ってほどのことはないけど……。」

「じゃ、断る理由ないじゃん！二時間ぐらい勉強して、その後カラオケで盛り上がるっ！」

「……そっちが本命か。」

バレちゃったかとおどけてみせると、椿は自分の机に戻っていく。

気が付けば、授業の開始を知らせる単調なチャイムの音が鳴り響いていた。

「……………あの娘がZOKKAか。」

山茶花と椿の掛け合いを、電柱から眺める男が一人居た。

黄色いモヒカン頭で、筋肉質な彼はフンツと鼻を鳴らすと浮遊しながらどこかへ去って行ったのだった…。

「いやー、久々にあんなに歌ったよ！やっぱ、カラオケ最高！」

夕日がオレンジ色に染める住宅街。

椿は満足げに言うと、カラオケで歌った歌の一曲を鼻歌で歌い始める。

ポップなCMソングで、周りで聞く人も思わず口ずさみたくような歌だ。

「うん…まあまあ楽しかったかな…。」

対する山茶花のテンションは低めだった。

口では“楽しかった”と言いつつも、顔はぐったりしているように見える。

「まあまあ？テスト前にカラオケ行けるなんて、そう滅多に無いのに…まあまあの評価？」

「それはそうだけど…二人で三時間歌うと、喉潰れるわ、声枯れるわで、疲れたなって。」

「いい若い者がなーに言ってるの！」

年寄りくさいセリフを吐く山茶花に、そんなことないっしょと椿は一刀両断。

和やかな空気が二人を包んでいたその時。

「捕まえたぜ… ZOKKAの娘さんよお！」

「うわっ！？」

不意に山茶花の背後から合幅のいい男が現れ、彼女の脇を掴み高く持ち上げた。

「山茶花…！？」

「おっと、動くんじゃねえぞ、お嬢さん。下手な真似しやがったら、女といえど容赦はしねえぜ？」

「うつ… 卑怯者め！！おまけに、めちゃくちゃムサいよ！」

噛みつかんばかりの勢いで罵る椿に、ムサいはやめろよと男は眉を下げて返した。

「モヒカン！筋肉質！胸毛！タンクトップ！ムサくないと言う方が無理っしょ！！」

「モヒカンは無関係ない気もするけど…。」

どんな状況でも突っ込みを忘れない山茶花。

たとえそれが、ムサイ男に持ち上げられ武器も持たないというピンチであっても。

「ムサイは止めると言ってんだ！…って、ZOKKAの娘…おまえは何やってる？」

男が椿と張り合っている間に、山茶花はカバンの中から何かバツジのような物を取り出していた。

そうして、その小さな物を親指でピンと上向きに弾いて、

「…オハン。」

静かにかつはつきりとそう言った。

次の瞬間、

「がああっ！？なんだ、この不快な音は！？」

「痛い！ものすごく耳が痛くなるよ！」

男と椿は思わず両手で両耳を塞いでいた。

絹を裂くような悲鳴に近い音が辺りに響き渡ったからである。

「確かに耳をつんざくような音だ…うん。」

山茶花はスルリと男の腕から抜け、椿の元へ駆け出した。

彼女の右手には、音の発信源…鋭い歯の生えた大きな口が描かれた盾“オハン”が持たれている。

「椿…はい、これ。耳栓。」

「あり…がと。ふっ…うるさかった。」

椿は山茶花に手渡された耳栓を素早く装着し、ホッとしたように息を吐く。

「女が…ぐっ…ふ、ふざけた真似しやがって…!!」

男は苦しそうに顔を歪めながらも、山茶花と椿にゆらりと近づいてくる。

彼の右手には、鎖鎌が携えられていた。

「うわっ…さすがムサ男!!伊達に筋肉ついてないねえ。」

「逃げるべきかな、この状況って…。」

「まだ奥の手があるじゃん、山茶花!ダメだったら、逃げるしかないけどね。」

奥の手と聞いて男は怪訝そうに顔をしかめる。

既にオハンの叫びは収まっており、夕日はほとんど沈みつつあった。通りを歩く人も無く、暗くなったことを感知した電灯が明かりを灯し始めている。

「今度は何を出す気だ…？」

鎖鎌の鎌部分をぶんぶん振り回し攻撃準備をしていた男は、警戒するようにその体制のまま身構える。

「さーて行くよ、オカルトマニアこと香川椿の奥の手…魔弾…！」

椿はニツと不敵に笑うと、カバンに付けていた銃形キーホルダーの一つを取り外す。

途端に、銃形キーホルダーは風船のように膨らみ、本物の銃が椿の右手に収まっていた。

「はっ…ははは…！何かと思えば…魔弾だど？魔弾を好んで使う変わり者など居るはすがないだろ。それが女なら尚更…！」

男の言葉を遮るように、椿の魔弾から破裂音が発せられる。

「ぬおっ!？」

モヒカン男は反射的に飛び退いた。

彼が直前まで居た場所の地面には、銃弾が深くめり込んでいたのだ。

「魔弾を好んで使う女…それが香川椿なのだ! よっし、もう一発ドーンと!」

椿は銃口を男に向け、引き金を引き銃弾を発射。

銃弾は一直線に男の左脚に直撃した。

「ぐはっ!？」

魔弾から発射された銃弾殺傷力はないが、衝撃力は抜群のようだ。

痛みのあまり、モヒカン男は左脚を両手で押さえ地面をのた打ち回っている。

「よっし、今の内に逃げよう、山茶花！」

「…結局、逃げるんだね。」

椿と山茶花はそれぞれの武器と防具をしまつと、全速力で駆け出す。

「ぐっ…ここまでやられて…逃がすものか!!」

モヒカン男は患部をさすりながら立ち上がると、地面から一メートルほど浮遊して二人を追いかけた。

ゾウさん滑り台のある公園。

「はあ…はあ…追いつかれちゃったし…。」

椿は肩で息をつきながら言った。

額から流れ落ちる大粒の汗が、数十分間全力疾走したことを物語っている。

「はあ…家と反対方向なんだけど…。今、何時なんだろう…。」

山茶花は椿と同様に息が上がっていたが、考えていることは切実なことだった。

登り棒近くにある時計を見ると、時刻は既に七時を回っていた。

「やっと…はあ…追いついたぜ…生意気な女どもがあー！」

モヒカン男は心底疲れたように顔を歪めて、ようやくそれだけ言葉を発した。

銃弾を受けた左足は赤く腫れ上がっている。

「本当、感心するほどタフだね、ムサ男は！まあ、しつこすぎてウザったいんだけど。」

「誉めてんのか、けなしてんのか…どっちだ!？」

「けなしてる方。」

椿はためらう風もなく、しれっとした顔で答えた。

「くそっ…女だと思って手加減してやってたが、もう容赦はしねえぞ!！」

悪びれる様子も無い椿に、モヒカン男は完全に逆上してしまったよ

うだ。

空間から鎖鎌を取り出すと、椿に向けて鎌の部分を投げつける。

「きゃっ!?!」

「椿…!」

鎌の先端は、椿が持っていた皮製の鞆を数回切りつけ、男の手元に戻る。

威勢の良かった椿も、これには驚いたようで、地面にへたり込んでしまった。

「ぐはっはは!これが俺の実力だ!怖がれ!もっと怖がれ!」

「いったた…腰打っちゃったし…。ムサイから最悪男に格上げだよ…。」

「まだ言うか!死にてえのか…女が!?!」

「…やめて。」

腰の打撲で動けない椿を守るように、オハンを右手に携えた山茶花が立ちはだかる。

「…椿を傷つけたら許さない。」

「ほう…やる気が、ZOKKAの娘？」

「ZOKKAと呼ばないで。私には…山茶花って名前がある。…オハーン！」

山茶花の呼びかけに応えるように、オハンから音波が発せられた。

耳を覆ってしまうような絶叫。

「もうその手は喰わねえぜ、娘っ子が！」

しかし、二度目のそれはモヒカン男には効かなかった。

「わっ!？」

「山茶花！」

鎖鎌の攻撃で、オハンごと二メートルほど後方に吹き飛ばされる山茶花。

地面で擦った両肘から鮮血がじわつと滲む。

「山茶花！大丈夫!？」

「大丈夫…だけどオハンが…。」

「運も尽きたな、ZOKKAと人間の女！」

勝ち誇った表情のモヒカン男は、鎖鎌を椿の額に突きつける。

「こ、来ないでよ、ムサ男！ムサいのが移るでしょうがー！」

椿は、座り込んだまま後ろに身を引いた。

「まずは…おまえからだ、魔弾女あーいたぶってやんぜ…たあつぷりとなー！」

「待ちなせえー!!」

「なっ…誰だ!？」

どこからともなく聞こえた声に、モヒカン男は辺りを見回す。

「女性に手を上げるような男は、あつしが成敗してやりやすぜ？」

「どこだ!?!姿を見せろ!！」

「姿なら見せてやすぜ、兄いさん?後ろ見てみなせえー!!」

「後ろ…だと？くほああ！？」

振り向こうとしたモヒカン男の右肩に、強烈な蹴りの一撃が入る。

モヒカン男は声の主の姿を見ることなく、左方向に二メートルほど吹き飛ばされた。

地面から黄土色の砂埃が舞う。

「大丈夫ですかい、姐さん方？」

声の主はモヒカン男には目もくれず、椿と山茶花を交互に見返した。

緑色の短い髪に茶色ハンティング帽、黄緑色の瞳。

さながら、カウボーイを思わすような服装をしている。

「あ…はい、ありがとうござい……」

「何…和やかムード醸してやがんだ！？」

椿の礼を遮り、モヒカン男はハンティング帽の真打ちに向き直る。

「おうおう…怖い顔でやすねい。そんなんじゃ、モテやせんぜ。」

「人が気にしてることをぬけぬけと……この野郎があー!!」

ハンティング帽の助っ人に、モヒカン男の鎖鎌が飛ぶ。

「おっと！まだ話は終わってやせんのに……。」

ハンティング帽の助っ人は、背中から剣のようなものを引っ張り出し防御する。

鎖鎌の刃とその刃部分が擦れ合い、ガキツという金属音を立てる。

「あれって…剣かな？槍かな？それとも、盾……？」

「盾っすよ、姐さん。知りやせんかい、アダーガって名前の盾を？」

椿に問いかけられた山茶花ではなく、交戦中のハンティング帽の助
つ人が答える。

「呑気に……くっちゃべってんじゃねえ!!」

「ほいっとー兄いさん……怒りっぽすぎ。カルシウム足りんとちゃ
います?」

アダーガと呼ばれる盾を地面に突き刺し、助っ人はくるつと宙返り
しながら地面に降りる。

「次で決めてやる…消えろや、ガキが!!」

「消えるんは…兄いさんの方ですぜ!!」

鎖鎌を持ったモヒカン男とアダーガを携えた助っ人は、同時に走り
出す。

「やつ！！」

「うりゃー！」

鎌とアダーガが擦れ違ふ。

そして…

「ぐほあ！？」

短く低い悲鳴。

声の主は、モヒカン男だ。

特殊盾…アダーガの尖った先端が、男の右胸部に刺さっている。

男が投げた鎖鎌の先端は、助っ人のハンティング帽をわずかに数センチ斬っただけであった。

「ば……かな……こんな……子供に……。」

「言いやしたでしょ？消えるんは兄いさんやって。」

モヒカン男の姿は、砂のような細かい粒子となり、風に流され消えて行く。

彼が居た場所の地面には、二枚のトランプカードが落ちていた。

ハンティング帽の助っ人が、少しかがんでトランプカードを拾う。

「これは……おまけとして渡しておきやしょうかねい。」

「っ、強い！かつこいい！！ありがとうございます！！」

言いながら、椿は助っ人に抱きついた。

「わっ！？姐えさん！？」

助っ人はバランスを崩しそうになり、左足に力を入れてなんとか踏ん張る。

「椿…困ってるみたいだよ。」

「えっ…？あつ、ごめんね！感動しちゃっててつい……。」

山茶花にたしなめられ、椿は助っ人から手を離れた。

「いや、女性に抱きつかれて嫌な気はしやせんがねえ。あ、名乗り遅れやしたね。あつしは、茶色い夢と書いて茶夢^{チャム}。ハートブレイカーで旅商人で用心棒やつとりやす。」

ハンティング帽の助っ人…茶夢は、苦笑しながら自己紹介する。

「本当にありがとう、茶夢さん！あたしは、香川 椿。こっちが親友の涼原 山茶花。」

「助けてくれてありがとう。」

椿はペコリと頭を下げ、山茶花はその隣で会釈した。

「礼は要りやせんよ、姐えさん方。ついで言うと、“さん”も要りやせん。あつしは、とある兄いさん方からの依頼を果たしたに過ぎやせん。オハンの音が聞こえたら姐えさん方を助けに行くように、と。」

「それってもしかして…トランプ四重奏の四人？」

山茶花の質問に、よくご存知でえと茶夢は感心したように言った。

「トランプ四重奏の兄いさん方は、常連客でしてねえ。あの四人からの依頼は断れやせんから。」

「……どんな様子だった？」

「んっ？トランプ四重奏の兄いさん方ですかい？そうですねい…姐えさん方の心配をしとりやしたよ。自分達が来ない間に、ハートブレイカーに襲われてケガしたりしないかって。特に……黄涙の兄いさんが。」

「そう……。」

やっぱり寂しいとか思ってたんじゃんと、椿が茶化する。

「別に寂しくないけど……なんか、物足りない感じはするかな。」

「もう、わがままだなあ、山茶花は。居たら居たで迷惑がるくせに、居なかったら物足りないなんて。今に罰が当たるよ！」

茶化し続ける椿に、違いありませんと茶夢も同意した。

「ま、それはいいとして……ねえ、茶夢？そのアダーガって盾、見せてもらってもいい？」

「構いやせんよ。はい、椿の姐えさん。」

そう言うと、茶夢はアダーガを椿に手渡す。

椿は、ありがとうと礼を言いながら、アダーガをじっくり観察してみた。

皮を張った盾の上下に槍の穂先が付き、前面には鋭い剣の刃先が突出している。

大きさは長さ七十センチ、幅三十センチほど。

見た目よりも、ズッシリとした重みがあるなと椿は思った。

「……………」

山茶花は無言でその様子を見つめている。

時折、何か考えているように瞳が右上に動いていた。

「……………変わった盾使ってるんだね。山茶花のオハンもけっこう変わってるけど。」

椿の手から茶夢の手にアダーガが返された。

「えっ？ああ、うん。そうだね……。」

「さっきからどうしたんですかい、姐さん。えらいぼーっとして
るように見えやすけど。」

「ん……。お腹空いたなって。」

「……って、もう七時半じゃん！辺り暗いし、帰らないと！」

公園の時計を見て、椿が早口に言った。

「姐さん方が帰りやすなら、あつしもそろそろ行きやしょうかね
い。トランプ四重奏の兄いさん方に報告に…ね。」

「じゃ、また。」

そっけなく挨拶し、山茶花と椿、茶夢がそれぞれの帰路につこうと
した時。

「山茶花嬢！椿嬢！」

「山花ちゃん！つき（つばきのこと）ちゃん！」

月のある方角からそんな声が聞こえた。

「んっ？」

「あれって……」

「トランプ四重奏の兄いさん方……？」

一斉に振り返った三人の瞳に移ったのは、浮遊して公園に向かって来ているトランプ四重奏の三人の姿だった。

「えっ……三人……？」

「一人足りやせんねえ？」

「えっと……」

首を傾げる山茶花と椿と茶夢の前に、三人は降り立つ。

「ごめん、山茶花嬢。君のテストが終わるまで来ないって約束…破
ってしまつて。」

一番先に降り立った黄涙が、両手を合わせて申し訳なさそうに言っ
た。

「それはいいけど…何かあったの？」

「あのね、山花ちゃん！！白薙、見なかった！？」

紅羽が眉を下げて、切羽詰まつたような声で訊く。

「来てないけど……。」

「白薙の兄いさんに何かあったんですかい？」

風でめくれるハンティング帽を右手で抑えた茶夢が、ズイと前に出て尋ねる。

「白薙が……失踪した。」

「し、失踪！？ど、どうしよ……警察に知らせなきゃ！-」

「……落ち着いて、椿。こっちの警察に知らせてもどうしようもできないと思うよ。」

ケータイ電話のボタンを押す椿に、山茶花が冷静に言った。

「……ああっ！間違えた！時報とかになっちゃったし！！」

「お約束の間違いでやすねえ、椿の姐えさん……。心当たりは無いんですかい、兄いさん方？」

前半は椿に対して、後半はトランプ四重奏に対しての茶夢の発言。

「ジャンハンで心当たりのある場所は全て探した。残りは、ZOK
KAの居るところかと思っただが…」

「山花ちゃんのことにも居ないなんて……。どこ行っちゃったんだ
ろー、白薙……。？」

蒼影は眉を潜め、紅羽は今にも泣きそうな顔で答える。

「嘆いていても仕方ないさ……。もう一度手分けして探してみよう。
」

「あたしと山茶花も探すよ！人数多い方が、見つかる確率高いし！」

「いや…気持ちだけでいいよ。これは、俺達の問題だから。それに
……もう暗いから。」

黄涙に一蹴され、そう……としよげ顔の椿。

「代わりといっちゃあ何ですが、あっしと一緒に探しやすぜ！」

「よろしく頼むよ、茶夢。」

「サービス料はしっかりと頂きやすがねい。」

茶夢は左右非対照な笑顔を見せると、東方へ浮遊していった。

「我々も行くか。」

「……本当に私達は探さなくていいの？」

その場を去ろうとするトランプ四重奏の三人の背中に、山茶花が問う。

紅羽がくるつと振り返った。

「三花ちゃん達は、家に白薙が来たらオハンを鳴らして僕達に知らせてくれるだけでいいからー。」

「そう……うん、わかった。」

黄涙と蒼影は、振り返らないまま頷き合い、三人は西方向へと去って行った。

「……帰ろつか、椿。」

「でも、白薙は……？」

「明日になってから探そう。日曜だし、それまでにはあの三人が見つけてくれるかも。」

椿はまだ何か言いたそうだったが、山茶花が帰っていくのを見て慌てて後を追いかけていく。

「我々も行くか。」

「……本当に私達は探さなくていいの？」

その場を去ろうとするトランプ四重奏の三人の背中に、山茶花が問う。

紅羽がくるつと振り返った。

「三花ちゃん達は、家に白薙が来たらオハンを鳴らして僕達に知らせてくれるだけでいいからー。」

「そう……うん、わかった。」

黄涙と蒼影は、振り返らないまま頷き合い、三人は西方向へと去って行った。

「……帰ろつか、椿。」

「でも、白薙は……？」

「明日になってから探そう。日曜だし、それまでにはあの三人が見つけてくれるかも。」

椿はまだ何か言いたそうだったが、山茶花が帰っていくのを見て慌てて後を追いかけていく。

その様子を明るく照す三日月が、灰色の雲に覆われ始めていた……。

「嫌な天気だぜ……。」

同じ頃。

白薙は暗雲立ち込める空を、苦々しげに口を歪めて見上げていた。

彼の後ろには、立派な二階建ての家。

しかし、二階の部屋には明かりは灯っておらず、一階には白薙の目当ての人物の影は見当たらなかった。

「どこ行ってんだよ、茶花の奴……？俺様をこんな寒空の下、待た

せる気かよ!!」

イライラを壁を叩くという仕草に出す白薙を、電柱の上から一人の女性が眺めていた。

暗いため、顔はよく見えないが銀色に光るバレッタが髪が長いことを示している。

「白ウルフちゃん…見つけた!」

女性は至極楽しそうな声で言うと、フッと姿を消す。

そうして、数秒後に現れたのは、白薙の目の前。

「うわっ!?!おまえは……」

「お久しぶり、白ウルフちゃん?」

「うっ!?!」

小槌を構えようとした白薙の鳩尾に、ドスツと女性の手刀が入る。

白薙の手から小槌がコロンと転がり落ち、彼自身もトサツ…と地面に崩れ落ちる。

女性は小槌を拾い上げ、白薙の体を担ぎ上げると、

「ごめんね、白ウルフちゃん。あなたには悪いけど……私のゲームに付き合ってもらおうわ。」

地面から十メートルほど跳躍し、明かりが消えていく街へと浮遊していったのだった……。

-
T
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d
...
.

絆賭・キズナガケ・

『やーい、やーい、白オオカミやーい!』

『うるさい……。』

『オオカミってさ、人間の肉も食べるんだよねー。みんな、食べられちゃうから、逃げよー。』

『うるせえって言うてんだよー!』

『わっ!?!……痛いよー!足ケガしたよー!』

『何してるの!?!ちゃんと、ふたちゃんにごめんなさいしなさい!』

『知るかよ…悪いのは、俺様をオオカミ呼ばわりしたそいつだ!!』

「…っ…。」

錆びた鉄の匂いに嗅覚を刺激され、少年は目を覚ました。

辺りはぼんやりとしか物が見えないほど暗く、床は冷水のように冷たい。

「…っ…え…っ…思いっきりやりやがって…あの女が…。」

彼が頭を振る動作に合わせて、無造作にハネたオレンジ色の髪と右耳の輪ピアスが揺れる。

桃色の瞳は、薄暗いその場所で唯一目立つものとなっている。

「ここは……倉庫の中かよ……？」

「あーら、気がついたのね、白ウルフちゃん。」

不意に、女性の高い声が近くの物陰から聞こえた。

少年はその方向に目だけ向ける。

「うつせえな……俺様の名前は、白ウルフじゃなくて……白薙だ……
！！」

「白薙でも白ウルフでも、ほとんど同じじゃない。それに、どんなに吠えても縄は解いてあげないわよ。」

女性の声が近づいてくる。

「俺様はそういう呼ばれ方が大嫌いなんだよ！！白薙と呼びやがれ！！」

白薙というらしい青年は、縄で柱にくくりつけられた体を精一杯前のめりにして吠える。

「まったくもう。白ウルフちゃんは怒りっぱいんだから。」

対する女性は、おかしそうにクスクス笑いながら白薙の顔にペンライトを当てる。

白薙は眩しさに目を細めつつも、女性の姿をしっかりと目で捉える。

腰まである桃色のウェーブ髪に、タレ気味の紅い瞳。

歳は二十代後半ぐらいか。

白いタンクトップにマキシスカート。
腰にはメッシュベルトをきかせている。

首にはハートのチョーカー。

「あんまり苛められると、お姉さん……泣いちゃうよ?。」

「お前が泣こうがどうしようが、俺様には関係ねえよ!!!さっさと縄を解きやがれ!!。」

「ダメよ。縄は解かないわ。白ウルフちゃんには、桃華^{トウカ}お姉さんのゲームに付き合ってもらうんだから。」

ゲームって何だよと眉を潜める白薙に、桃華と名乗る女性はにっこり笑顔で返すのだった……。

「手紙……?。」

今にも雨が降りそうなほど曇った日曜日。

茶色いポニーテール髪とオッドアイの瞳を持つ高校二年生…涼原山茶花は、一枚の封筒を手にしていた。

差出人の名前も宛名も書かれていない桃色の封筒。

誰からかなと首を傾げつつも、山茶花は封筒を開け中から白い便箋を取り出した。

「えっと……『ZOKKAちゃんへ。白ウルフちゃん……じゃなくて、白薙はお姉ちゃんが預かっていました！大丈夫、乱暴なことではないから！でも、どうしても心配って言うなら、トランプ四重奏の残りの三人を連れて、下記の住所まで来てね。あ、今日の日没までにだよ！桃華より』か……。」

便箋を元の大きさに折りたたみ、封筒に入れ直す。

「……………。行かなきゃダメかな？白薙、自分で脱出してきてくれな
いよね……………仕方ないか。」

そう自問自答すると、山茶花はくると反転し、今出て来たばかりの自宅へと戻っていった……。

「これはまた……何というか……」

「すごい手紙だね……。ハイテンションの時のあたしにも書けないや。」

山茶花の部屋の黄緑色の絨毯の上。

手紙を読んだ黄涙と椿の感想である。

「この文面だけ読むと、放っておいても無事そうに見えるが……」

「それは可哀想すぎるよー。助けに行こうよ、みんなー！」

蒼影はやや呆れ顔で言っ、紅羽はファイティングポーズで意気込む。

それから、その場集まった五人は、ゆっくりと立ち上がる。

「日没までと期間を決めているということは、何か裏があるのかも
しれない。急ごうか。」

一番に階段を降りて行く黄涙。

「話し合いで通じる相手なら楽なんだけどな……。」

ため息混じりに言っ、後続く山茶花。

「あ、僕を追いかないでよ、二人共ー!!」

慌てて駆け出す紅羽。

「よーっし！オカルトマニアの香川　椿の名にかけて、いっちょやりますかー！」

「……………」

「ほら、蒼影もつつ立ってないで行くよー！」

「…………致し方ないか。」

蒼影は椿に背中を押されるような形で、階段を降りて行く。

無人の山茶花の部屋には、爽やかな春の風が吹き抜け、カレンダーをゆらゆら揺らしていた……。

「絆を賭けたゲーム……だと？」

薄暗い倉庫の中。

桃華は怪訝顔の白薙に、そうなのよと呑気な言葉を返した。

「第一関門は、指定した時刻までにトランプ四重奏とZOKKAちゃんがここに来ること！ZOKKAちゃん宛てに手紙を送っておいだから、きつと来るわ。第二関門は来てからの楽しみよ！」

「……つぎけんな！！なんで、そんな茶番に俺様達が付き合わされなきゃいけねえんだよ！？」

白薙は、縄が無かったら桃華に噛みつくのではないかと思われるほどの勢いで言った。

彼を縛る縄がギツ……と軋む。

「そうねえ、しいて言うなら……退屈だからかな。」

「なっ……この……!!」

「だーから、怒らないの、白ウルフちゃん。大人しく助けを待ってなさいね!」

白薙はまだ何か喚いていたが、ヘッドフォンをつけ音楽を聞き始めた桃華には彼の声は聞こえなくなっていた。

「やっぱりこの位置からじゃ聞こえやせんねい……。」

そんな二人の様子を外の大木の上から双眼鏡で覗くハートブレイカーが一人。

茶色い髪にハンティング帽、黄緑色の瞳……茶夢だ。

（都合の良い偶然ってのはあるもんですねい。白薙の兄いさんが誘拐されたところを目撃したハートブレイカーが、たまたま近くに居たなんて。）

「さて、どうしやしょうかねい……。」「

誰に言うともなく呟いた時。

「あつ……。茶夢だー。」「

「茶夢……。後ろを見てごらん。」「

不意に背後から聞こえた二種類の声に、茶夢は振り返る。

声の主は、小さなドクロ帽子がトレードマークの黄涙と、泣きボクロがチャームポイントの紅羽だった。

二人とも大木には足をかけず、空中を浮遊したままの状態である。

「兄いさん方も聞き込みでここを知ったんですかい?」「

やや声を潜めて茶夢が訊く。

「俺達は山茶花嬢宛てに届いた手紙から、この場所を知っただけさ。」

和やかな笑みと共に小声で返す黄涙。

「そうなんですかい……。あつ、来たのは二人だけでやすかい？他の兄いさん方と、山茶花と椿の姐えさん方は……」

「倉庫の入口前で待機中だよ。茶夢の姿が見えたから、どうせなら一緒に行こうってことになったのー。」

「あつしのために……。お時間とらせてすいやせん。」

「いいよーと紅羽は間延びした口調で返し、黄涙は構わないよと返す。」

それから三人は、蒼影と椿と山茶花の待機場所へと急いだ……。

古びた鉄の扉がギーと音を立てて開かれる。

「来たわね……っ！」

桃華はヘッドフォンを耳から外し、イス代わりにしていたダンボールからひょいと降りる。

その顔には満足げな笑み。

「白薙と誘拐犯、見つけた！」

「白薙を返してもらっ。」

光が差し込む場所に満を持して現れたのは、紅羽と蒼影。

その後ろには、黄涙と茶夢、椿と山茶花の姿。

「誘拐犯は止めてよお。お姉ちゃんには、桃華って名前があるんだから。」

「せやったら、その桃華の姐えさん。なんで、白薙の兄いさんを誘拐したんか聞かせてもらいましょうか？その理由によつては……力ずくですぜ。」

左手にアダーガを構え、挑発するような口調で茶夢が言う。

「そんなことは後でいいだろうが、茶夢！！先に俺様の縄を解けつつのー！！」

「あつ……待つてて、白薙！オカルトマニアの香川椿が今……きゃっ！？」

白薙の元へ駆け寄ろうとした椿は、その場にぺたりとへたり込んだ。

彼女の足から数ミリしか離れていない場所の床に、飛標（一力所しか刃が無い手裏剣の類）が刺さっていたからである。

「つきちゃん！？」

「椿……！！」

「お話してる時に、無粋な真似しちゃダメよ、小娘ちゃん。」

飛標を投げた張本人である桃華は、クスツと小さく笑って続ける。

「白ウルフちゃんにも同じこと訊かれたわ、カウボーイ君。お姉ちゃん……とても退屈しているからよ。」

「退屈……か。」

蒼影が言葉を繰り返す。

「そうよ。さて、雑談はこのくらいにして、本題に入りましょうか。白雉を返すことかつあなた達がここから出たいというなら、お姉ちゃんとゲームをしましょう。」

「えっ……まさか!？」

思い当たることがあって、山茶花は入口へ走った。

鉄の扉は固く閉じており、引いても押ししてもビクともしない。

「開かない……。」

「無駄よ、ZOKKAちゃん。あなた達はもう、お姉ちゃんのテリトリーに入ってしまったてるの。お姉ちゃんとゲームをして勝つこと以外に脱出手段は無いのよ。」

「そういうことやったら……早よう始めやしようや、桃華の姐えさん。あつし達も暇じゃありませんからねい。」

ニヤツと笑いながら言う茶夢の態度に、少しムツと口を曲げながらも桃華はゲームの説明を始める。

「ゲームのルールは簡単よ。お姉ちゃんを倒したら勝ち。でも、それだけじゃ面白くないから……」

意味深な発言と共に、桃華はパンツと手を打ち鳴らす。

すると……

「わあっ!？」

「な、何なの、これ……?」

紅羽と椿は、思わず驚きの声を上げた。

「壁か……?」

「透けてるけど……固い。」

「なるほどね……。」

蒼影と山茶花は、出現した“それ”を叩き、黄涙は何もかも見透かしたように微笑して呟いた。

“それ”とは、透き通った緑色の壁のこと。

紅羽と黄涙、蒼影と茶夢、山茶花と椿、それから白薙……と各々を区切っている。

「何やらかすつもりだよ！？いい加減、悪ふざけはやめて俺様を離せつつのー！」

堪忍の緒が破けそうだとばかりにジタバタ体を動かしながら、白薙が声を張り上げる。

「バトルロワイヤル風にするわ。区切られたテリトリー内に居る二人で戦って、勝った方がまた違う人と戦う。そうして、最終的に残った一人がお姉ちゃんとのバトルの挑戦権を得るってわけよ。白ウルフちゃん是不参加ってことで、その六人でやってもらっわ。」

「……私と椿も強制参加？」

山茶花が面倒くさいといわんばかりに顔を歪めて訊く。

「もちろん……」

「待った。山茶花嬢は武器を持っていないし、椿嬢の武器もとても危険な代物。彼女達是不参加にしてもらえないかな。」

彼にしては珍しい笑みの無い表情で黄涙が意見する。

「黄涙……。」

「武器持っていないの？それじゃ仕方ないなあ。参加者は四名に変更……。」

桃華は再び手を打ち鳴らす。

山茶花と椿を覆っていた緑色の壁が、スツ…と消えた。

「わっ！消えたよ！どんな仕組みなんだろうね、山茶花！」

「…………。」

「…………、はしゃぐとこじゃないか。」

無言でトランプ四重奏と茶夢を見つめる山茶花の様子に、椿は罰が悪そうに頬をかいだ。

「ふふっ、ありがとうと礼を言わせてもらっよ、桃華嬢。」

「どういたしまして！さあて……ゲームスタート！！」

桃華は言うと同時に高く跳躍し、縦方向に五つ積まれたダンボール箱の頂上に腰掛けた。

それを合図にするかのように、緑の壁に包まれた四人が戦闘体制に入る。

観客になった山茶花と椿は、黄涙と紅羽の方に視線を移す。

向かって手前に紅羽、奥に黄涙が立っている。

二人の距離は二メートル弱ほど離れていた。

「僕……黄涙とは戦いたくないよ……。」

紅羽が泣き出しそうな震えた声で言った。

左手にボーラを構えてはいるものの、ややへっぴり腰である。

それに対し、黄涙はいつもの表情で二度首を横に振った。

「戦いたくないとか戦いたいとかそういう問題じゃないんだよ、紅羽。戦うこと以外に、白薙を助ける方法もここから出る方法も無い。」

「だけど……！」

「……来ないなら、俺から仕掛けるよ？」

黄涙が動く。

猛スピードで浮遊し紅羽の目前に迫り、クルタナを振り下ろす。

「わっ!？」

紅羽は、とつさに一メートルほど後ろに身を引いた。

振り下ろされたクルタナの刃が彼の前髪をわずかに斬り、紅い髪の毛が綿毛のようにふんわりと床に落ちる。

「ふふっ……外れちゃったか。」

黄涙は残念そうに眉を下げて言うと、再び高速浮遊し紅羽に接近する。

「やめてよ!!」

紅羽は叫ぶと、ボーラの石部分を投げクルタナに巻きつける。

ガチツと擦れた音が響く。

「黄涙……まさか、本気で紅羽を……!?!と、止めなきゃ!!」

「椿!!近付いたところで、私達は何もできないんだよ?」

走り出そうとした椿の腕を、山茶花ががっしりと掴む。

「そうだけど……仲間同士で戦うなんて!!」

「彼らには彼らなりの考えがある……」

山茶花の言葉をかき消すように、バシッと何かを激しく叩く音が聞こえた。

「えっ……?」

「何……?」

二人が音の発生源に視線をやると、そこには口元を歪め片膝をつく茶夢と雷上動を構えて見下ろす蒼影の姿があった。

「……っ やりますねい……蒼影の兄いさん……。」

「……降参するか、茶夢？」

「どうしやしょうかね……。あつし…負けず嫌いなんですけどね…」

茶夢は、アダーガの槍部分を床に突き立てゆっくりと立ち上がる。

「ダメ……蒼影!!」

「止めるな。」

蒼影は短く返すと、雷上動の弦を引き絞り……茶夢に向けて矢を放つ。

放たれた矢は、茶夢のアダーガにバシッと弾かれ、真っ二つに折れた状態で床に落ちた。

「なっ……」

「あつしの番ですぜ、蒼影の兄いさん？」

茶夢は不敵にニヤリ笑いを浮かべて言うと、蒼影との距離を一気に詰める。

「くっ……！？」

「たあっ！！」

振り上げられたアダーガ。

蒼影は雷上動の弓部分で受け身をとる。

ペキッ…と弓の一部が剥がれた。

「みんな、強いよねー。お姉ちゃん、ゾクゾクしちゃうな！」

戦う四人を見下ろし、桃華が左頬に手を当てて言った。

「たくっ……血の気が多い奴らばっかだぜ……。」

白薙は何もできない自分を悔しがるように、ギリッ…と歯噛みしている。

その力があまりに強かったため、下唇に少量の血が滲んでいた。

「蒼影……茶夢……黄涙……紅羽……。」

「うわあ!？」

椿の弦き声に混ざって、紅羽の叫び声が響く。

勝負は決したようで、ブリューナクを左手に携えた紅羽が床にうつ伏せに倒れていた。

黄涙は涼しい顔でクルタナを刀筒に収めている。

「うつつ……負け……ちゃった……。」

「いめんね……紅羽。」

床に寝そべる紅羽の耳に、黄涙は聞こえるか聞こえないかの声で囁くと、桃華に向き直る。

「桃華嬢……これで満足かい？」

「いいえ、まだよ。お姉ちゃんはもつと白熱した試合が見たいの。……あら、向こうも終わったみたいね。」

桃華は、茶夢と蒼影の方に視線を移す。

アダーガを遠くに弾かれた茶夢が、仰向けに寝転がっていた。

気絶はしていないが、息は荒くもう限界だということがわかる。

相手役の蒼影は、呼吸を乱すことなく雷上動の欠けた部分をテープで修復していた。

「勝った二人とも、まだまだ余裕みたいだから、第二ラウンド開始――！」

桃華が手を打ち鳴らす音に反応し、緑色の壁が蒼影と黄涙の周りを

囲む。

茶夢と紅羽を覆っていた緑色の壁は消えていた。

「蒼影……こうやって対峙するのは、何年ぶりだろうね？」

「……出会った時以来だな。」

「あの時は互角だった。だけど、今はどちらが強いかな？」

「戦ってみなければわからない。……良いチャンスだ。あの戦いの
勝敗……決するか。」

黄涙と蒼影は二、三言葉を交わすと、それぞれの武器を携え身構える。

「行くよ！」

言葉と同時に間合いを詰める黄涙。

それに対し、蒼影は後ろに一メートルほど跳躍しながら弓を引き絞

り矢を射る。

パシュと乾いたような音が響き、矢は一瞬で黄涙の眉間に迫る。

「ふふっ…そうこなくちゃね。」

黄涙はニヤツと笑うと、クルタナの刃で矢を叩き落としそのまま蒼影の至近距離に入る。

「やるな。」

蒼影は冷静に言うと、雷上動の弦の出っ張った部分で攻撃を受け止めた。

修繕したばかりの箇所が少し切れ、旗のように靡いている。

「どちらも一歩も引かない……か。あ……お疲れ様、紅羽。」

二人の戦いを真剣な目つきで観察していた山茶花が、自分にそろっと歩み寄ってくる紅羽に声をかける。

「紅羽……大丈夫？ケガしてない？」

「うん、心配してくれてありがとー、つきちゃん！」

心配げな表情の椿に対し、紅羽はぴょんとジャンプしながら笑顔で答えた。

「疲れちゃったけどー、もう回復したよ！それに……もしケガしても、ハートブレイカーは治りが早いから大丈夫だよー！」

「若い子はすぐ元気になりやすねい……。あっしなんか、さっきの戦いで腰痛めやして……。あいたた。」

腰をさすりながら、茶夢が話に割って入った。

瞑られた右目から、演技ではなく本当に痛がっていることが窺える。

「腰が痛いって……若い子はうらやましいって……。茶夢、一体いくつ？」

「まあ、山茶花の姐えさん。野暮な話は止めといて、兄いさん方の戦いっぷりを見てやしようよ。」

君から始めたのに……のとはやきつつも、椿と紅羽と茶夢と共に山茶花も視線を戻す。

「風は斬れない……昔言っただこの言葉を覚えているかい、蒼影？」

クルタナを高く掲げながら、黄涙が問う。

「愚問だ、黄涙。」

蒼影は短く返すと、今度は二本の矢を同時に放つ。

矢は右と左に分かれ、黄涙の両肩を突き刺そうと飛んで来る。

「ふふっ……覚えているなら、問題無いね。」

黄涙は床を激しく右足で蹴り、数メートル跳躍。

そのため、矢は彼の両足の下を通り、白薙を覆う緑の壁に刺さった。

「うおっ！？何しやがんだよ、蒼影！！危ねえだろうが！！」

前のめり姿勢で喚く白薙に、蒼影はすまないと言詫びた。

「すまないで済むか……うわっ！？」

白薙は再び声を上げた。

彼を覆う緑の壁を黄涙が後ろ足に蹴り、蒼影に向かう助走にしたからである。

壁にペリッ……と亀裂が入った。

「黄涙まで何しやがるんだよ！？俺様をケガさせる気か！？」

「あれっ？あの子達、まさか……！？」

桃華は二人の不可解な行動に気付き、壁を修復しようと手を叩いたが時既に遅し。

蒼影が次に放った一本の矢が、壁の亀裂部分に突き刺さっていたのだ。

亀裂は一気に広がり、パリンとガラスが割れるような音を立てて碎け散り消えた。

「ふふっ……ナイスだよ、蒼影。」

「黄涙……おまえ……」

「さあ、思い切り暴れなよ、白薙。」

黄涙は白薙の目の前に移動すると、クルタナを縦に振り縄を斬る。

白薙を縛っていた縄はパラッと地面に落ち、彼は自由の身になった。

「やりやすね、蒼影の兄いさんと黄涙の兄いさん方！」

「作戦勝ちー！」

茶夢と紅羽がピューと口笛を鳴らす。

「な……なにになに？どついつこと？」

「こついつこと。」

状況を理解できずパニック状態の椿に、山茶花は見たままと言わんばかりに白薙を指差す。

白薙は目で負えないほどの速度で桃華に詰め寄り、打ち出の小槌の先端を彼女に向けているところだった。

桃華はダンボール箱によたれかかり、呆然と白薙を見上げている。

なぜか、反抗や抵抗は全くしようとしなかった。

「し、白ウルフちゃん……。」「

「俺様を監禁していたことを謝って、ここから全員出しやがれ。さもねえと……」

「こんなの……ずるいわ！お姉ちゃんが、白ウルフちゃんと戦いたくないことわかってて戦わせるなんて……。」

桃華は観念したように両手を上げてうなだれる。

「わかったわよ……お姉ちゃんの負け。みんなを出してあげるし、ちゃんと謝るわ。だから、小槌をどけて、白ウルフちゃん。」

「ちっ……戦う前から降参されたら戦えねえだろうが。」

白薙は悪態をつきながらも、高く積まれたダンボールからひよいと飛び降りる。

続いて、桃華が体制と服装を整え直し、ゆっくり降りてきた。

下では、全員が桃華を囲むように円を作っていた。

「桃華の姐えさん……白状しなせい。白薙の兄いさんを誘拐した目的、そしてこのゲームの目的を。」

まず、茶夢が悪さをした子供を問い詰めるような口調で訊く。

「白ウルフ……白薙ちゃんを誘拐した目的もゲームの目的もどちらも同じよ。白薙ちゃんのためなの。」

「白薙のため？」

山茶花の質問に、桃華は頷く。

「俺様のためだと？」

「あなたを危険な目に合わさず、かつ自由の身にさせる方法はこれしか思いつかなかったの。ゲームに勝って、白薙ちゃんをトランプ四重奏から解放してあげたかった。でも……それはお姉ちゃんの余計なお節介だったみたいね。トランプ四重奏は……白薙ちゃんにとって、唯一落ち着ける場所みたいだから。」

「勝手な憶測で話を進めんなつつの。ま、確かにトランプ四重奏

は俺様が居ねえと始まらねえけどな。」

鼻の下を人差し指で擦りながら、白薙は得意げに言葉を返した。

「桃お姉さんにとって、白薙は大事な人なんだねー。」

紅羽がにこにこ顔で言う。

「ええ、そうよ。白薙ちゃんは、お姉ちゃんのかわいい弟なんだから。」

「えっ……二人って、姉弟きょうだいだったんでやさか!？」

「血は繋がってねえけどな。」

茶夢の質問に、白薙がしれっとした顔で答えた。

「白薙は最初からそのことをわかってて、大人しく捕まってたってこと?」

「違えよ。気付いたのは、ついさっきのことだぜ。それまでは、トランプ狙いの奴かと思ってたけどな。」

白薙の答えに、山茶花はふうんとそっけなく返した。

「さすがに、姉弟とまではわからなかったな。白薙が傷つかないようになっていることはわかったけれど。」

「あたしは、何が何だか全くわからなかったんだけど。」

見透かしたような言いつぶりの黄涙と、ほえーと気の抜けるような声を上げる椿。

「たくつ……弟を心配する暇があったら、さっさと再婚しろつつの。」

「しないわよ、白薙ちゃん！お姉ちゃんは、白薙ちゃんにゾッコンなんだから！」

「弟にゾッコンって……俗に言うブラコンってやつですかい。」

茶夢がやや呆れたような表情で言って、桃華と白薙以外の六人も頷きで同意していた。

「それで……桃華嬢。これから、あなたはどうするつもりですか？」

黄涙が急に真顔になって訊く。

「そうね……白薙ちゃんと一緒に居たいのは山々なんだけど、そういうわけにもいかなそうね。ジャンハンで適当に暮らそうかしら。」

「そついう話はここから出てにしません？」

山茶花が控えめにかつはつきりと、最もな提案を述べた。

「桃華さん……一つ訊きたいことがあるんですけど。」

倉庫から少し離れた場所にある公園で、山茶花はブランコに座る桃華に話しかけた。

茶夢は仕事があるからとジャンハンに帰り、椿も電話で親から買い物頼まれスーパーへ。

トランプ四重奏は、黄涙だけ残り、他の三人は早々とジャンハンに帰っていた。

残っている黄涙も何か考え事をしているようで、ジャングルジムの上にぼうつと座っている。

「なあに、ZOKKAちゃん？」

「……できれば山茶花と呼んでほしいんですけど。」

「あら、ごめんなさいね。それで……私に何を訊きたいの、山茶花

ちゃん？」

桃華は桃色のウェーブ髪を優雅に揺らしながら聞き返す。

「誘拐した時、白薙はジャンパンに居たんですか？」

「いいえ。山茶花ちゃん……あなたの家の前に立っていたわよ。」

「家の前に、ですか。」

「それがどうかしたの？」

何でもないですと返事を返すと、山茶花は黄涙に向き直る。

「黄涙……気になっていたんだけど、そもそも白薙が居なくなった原因って何？」

「んっ？ああ、原因ね……。俺が白薙とケンカしてしまっただけだよ。」

黄涙は、いつもと変わらない笑顔で答えた。

「笑って答えることじゃないと思うけど。」

「ごめん、女性に笑顔を向けるのは俺のクセでね。いつものことだから、気にしなくてもいいって紅羽や蒼影は気にするなって言うだけだよ……責任感じて落ち込んでるところだよ。」

「別に黄涙のせいじゃないと思うけど。」

山茶花の意見に、その通りよと桃華が同意する。

「気休めでも嬉しいよ、山茶花嬢、桃華嬢。」

「気休めなんかじゃないわ！黄涙ちゃんは倉庫から出ることよりもお姉ちゃんを倒すことよりも、白ウルフちゃんを助けることを優先したじゃないの！白ウルフちゃんも感謝してるはずよ！」

「ふふっ、そう思うことにしようかな。落ち込むなんて、俺らしくないね。」

桃華と山茶花の言葉に元気付けられたようで、黄涙は二人に礼を言う
と、空間を斬りジャンハンに帰って行った。

その後のことはわからないが、次の日に四人で彼女の家に現れた
ところから、仲直りできたんだなとなく悟った山茶花であった。
…。

- T o b e c o n t i n u e d . -

- 確執 -

「ねえ、蒼影。」

「……なんだ、黄涙？」

ジャンハンビルの屋上。

深い暗闇の中、赤い月だけが光源となっているその場所には、二人の男性が立っていた。

「この前の桃華嬢のゲームで君と対峙した時……俺はすごく懐かしい感じを覚えたんだ。君はどうだった？」

黄涙と呼ばれた黄色髪の男性が訊いて、

「……^{それがし}某も、同じだ。初めてトランプ四重奏が出会ったあの日を思い出したな。」

蒼影というらしい黒髪の青年が答える。

辺りは静かで、呟くようなボリウムしかない二人の話し声もよく通っていた。

「あの時は、お互いのことをよく知らなかったから確執が生まれていた。だが、今は……どうだ？ お互いを知り尽くしている仲ならば、確執は生まれないはずだ。」

「理論的には」だろ？」

「必然的にも」だ。白薙と仲直りすべきだ、黄涙。」

反論する暇を与えないほどの早口で言うと、蒼影は低く身をかがめる。

その次の瞬間、バツと勢いよく跳躍しジャンハンの闇へ消えた。

「今の状況が三年前とは違うことぐらい、俺だってわかってるさ……蒼影。」

黄涙は一人呟くと、三年前のことを思い出すのだった……。

三年前、ジャンハンビルの屋上。

「なんだよ、おまえらは。俺様の根城を荒らしに来やがったのか？」

ウルフカットのオレンジ髪を持つ青年は、睨むように目を細めて三人を見上げた。

桃色の瞳に、三人の姿が鮮やかに映る。

「君だけの住処じゃないよー！僕だって、ここを使ってるんだからー！」

ムウと口を膨らませて言ったのは、三人の中で一番背の低い少年。

赤いサラサラの髪と琥珀色の瞳が印象的である。

歳もその場に居る四人の中では、最も幼く見えた。

「へっ！俺様と勝負して勝ったら立ち退いてやってもいいけどな。おまえみたいなチビっこい奴が勝てるわけねえだろうけど。」

「ちょっと待った。二人だけで話を進めないでほしいな。俺とこの壁に寄りかかっている彼も、ここを住処にしているんだよ？話に入る権利はあると思うけどな。」

器用にバランスを取って、屋上の手すりに座っている青年が言った。黄色い髪と赤い瞳を持つ彼は、頭のやや右寄り部分に黒いドクロ帽子を被っている。

歳は四人の中では一番上のようにだ。

「……………」

無言で成り行きに任せているのは、三人とは少し離れた場所に座っている青年。

艶やかな漆黒の髪は顔の右半分を覆い、瞳は鮮やかな青色だった。

「三対一かよ……フェアじゃねえな。ま、いいぜ。束になってかかって来ても、俺様にはかないっこねえだろうからな。」

オレンジ髪青年は、不敵にニヤツと笑う。

それに対し、黄色髪青年は

「それはどうかな？誰も退かないってことは、ここに居る四人全員が勝つ自信があるってことだと思うけど。」

挑発的な言葉を返す。

「それに、四人居るんだから二対二でいいんじゃないかな。勝った者同士が戦って、一番強い奴がこの所有権と“最強”の称号を得られるってことでどう？」

「うん、いいと思うよー。」

「……それで構わない。」

紅髪の少年と黒髪の青年が同意する。

「へっ！面白えじゃねえか。その提案……呑んでやるよ。俺様はそこのチビっ子を指名すっぜ。」

「チビっ子じゃなくて、紅羽って名前があるのー！！そんな呼び方するなら、君のことを“オオカミ君”って呼んじゃうからー！」

紅髪の少年……紅羽はやや怒り調子で言い返すと、右手にポーラ（先端に石がついた縄）を構える。

「誰が“オオカミ君”だよ！俺様には、白薙って名前があるんだっつもの！しっかり覚えとけ！！」

オレンジ髪の青年……白薙も負けじと大声で返し、打ち出の小槌を左手に携えて紅羽を見返す。

「俺の相手は君ってことになるかな？」

「……蒼影だ。」

黒髪の青年……蒼影はゆっくりと腰を上げると、背中から弓矢の雷上動を取り出し射的の構えをとる。

黄色髪の青年は、蒼影ねと確認するように繰り返す。

「俺は黄涙だよ、よろしく。」

黄色髪の青年……黄涙は和やかに微笑みつつ、空間からクルタナ（刃先がない片手剣）を引っ張り出した。

四人の間にピリツと緊迫した空気が流れる。

赤い月が更に赤く光り、雲が全て晴れた。

「始めるぜ？」

「……ああ。」

白薙と蒼影の会話を合図にするかのように、四人は一斉に動いた……。

「ふうん……それで、結局誰が一番だったの？」

真昼の太陽が差し込む山茶花の部屋。

その部屋の主である山茶花が、二人の男性に向けて尋ねた。

「そりゃ、言うまでもないだろうが。この白薙様の一人勝ち……」

「もうー！また、そんな嘘つくー！嘘つきは閻魔様から舌を抜かれちゃうんだからねー！！」

白薙と呼ばれたオレンジ髪の青年の言葉を、紅髪の少年が怒りながらささず遮る。

「閻魔なんて、怖くねえつつの。もう一日やってりゃ、絶対俺様が勝ってたしな！」

「そんなのは、やってみなきゃわからないでしょー！山花ちゃん、本当はね、みーんな引き分けだったんだよー。」

前半は白薙に、後半は山茶花に対して言葉を返す紅髪の少年。

山茶花は、へえと興味があるのかないかよくわからない返答をした。

「互角……ってわけか。誰かが勝ってたら、君達四人は一緒に居ないだろうって予想はついてたけど。」

「紅羽と俺様が互角なんて……信じたくねえけどな。まあ、あん時は俺様が体調不良だったつつうことだ。」

紅羽と呼ばれた紅髪の少年は、噓つき白薙と非難の声を上げた。

「それで………続きは無いの？」

「おっ！冷めまくってる茶花が珍しく食いついてきやがったか！」

「……冷めまくってて悪かったね。白薙は放っておいて………紅羽。良かったら、続きを聞かせてくれる？」

「いいよーと快く返し、紅羽は続きを語り始める。」

白薙が無視するなとか何とか喚いていたが、山茶花にはBGM程度にしか聞こえなくなっていた……。

クルタナの刃と雷上動の弓が擦れ合い、ガチリと鈍い音を立てた。

しかし、それを携えている黄涙も蒼影も、もはや体力は限界に近かった。

「はあ……はあ……近距離は苦手かと……っ……思ったのに……はあ……やるね……っ……蒼影……。」

黄涙は息絶え絶えに言うと、フラッと前のめりに倒れた。

クルタナが地面に落ち、カンツと高い音を発する。

「当然……っ……だ……。」

蒼影もそれだけ返すと、トサツと右方向に倒れ込む。

雷上動は左手に携えられたままだったが、その先端には小さな亀裂がいくつも入っていた。

「くっそ……はあ……お前みたいなの……っ……チビっ子に勝てねえなんて……一生の恥だぜ……。」

「チビっ子は……っ……止めてっば……。」

白薙と紅羽は言葉を交わし終えたと同時に、後ろ向きに倒れた。

ドツと地面に背中を打ちつける激しい音がしたが、他の箇所痛みと疲労で背中への痛みはそれほど感じなかった。

夜が明け、紫色の太陽光が屋上を照らしている。

「白薙……だっけ？」

黄涙に話しかけられ、白薙が何だよと顔だけ向ける。

「三時間も戦って勝負がつかなかったんだ。このままずっと戦っても、決着はつかないと思う。そこで一つ提案なんだけどさ……。」

「提案って、なーに？」

白薙ではなく、紅羽が上半身を起こしながら訊く。

「誰が最強か……また後日に決着をつけるとして、この場所は四人で使うことにしよう。」

「……良い考えだな。」

すぐに蒼影が同意する。

体はコンクリートの床にべったりとつけたままだ。

「四人で使うのはいいけどよ、誰が最強かは白黒つけてえな。」

と、白薙。

「僕は黄涙の意見にさーんせい！」

紅羽は、右手を上げて人なつっこい笑みを浮かべた。

「だったら、こうしようか、白薙。高速移動で敵を攪乱できる君は、スピードにおいて四人の中で最強のハートブレイカー。弓を射れば百発百中の蒼影は、命中率が最強。飛び抜けてすごい能力はないけど弱点も無い紅羽は、能力バランスにおいて最強。」

「剣一本で何でも弾き返せちゃう黄涙は、パワーの最強ってことになるねー！」

黄涙の言葉を紅羽が引き継ぐ。

「スピード最強のハートブレイカー、白薙様ねえ……それなら、納得してやってもいいぜ。」

「……決まりだな。今日より、この屋上は我ら四人の根城だ。」

蒼影がフツと僅かに笑いながら言って、おうと残りの三人が握り拳を作った利き手を高く掲げたのだった……。

(……少しきつく言い過ぎたかもしれぬな。)

ジャンハンの繁華街を散歩しながら、蒼影はそう思っていた。

繁華街には、多数の店があり夜は昼間よりも賑わっている。

というのも、昼間は出かけているハートブレイカーが多く、夜の方が客足が多いからだ。

「安いよ、安いよー。極上物の真珠のアクセサリーが全品二割引！
買わなきゃ損だよ、お姉様方ー！！」

「流行の最先端を行きたいそのあなた！ブティック光蘭には、あなた好みのファッションが盛りだくさんですよ！是非、一度は足をお運び下さいませ！！」

そんな宣伝文句を聞きながら、蒼影はトランプ四重奏がチームとし

て結成された日のことを思い返した……。

「トランプ^{カルテット}四重奏？」

大きな琥珀色の瞳をパチパチさせながら、紅羽が聞き返す。

夕方のジャンバンビル屋上。

沈みゆく太陽の紫色の光と昇り始める青色の光とが交錯し合い、見る者を感嘆させてしまうような彩色が間近で見られる唯一の場所である。

「そう。俺達四人は、巷でそう呼ばれているらしいんだ。」

答えるのは黄涙。

夕日を背にし、吹きすさぶ風に飛ばされないようにと、トクロ帽子を左手で抑えている。

「トランプ”……ジャンハンでは、異端者のことだったよな。それが四人で“^{カルテット}四重奏”……いくら何でもそのまますぎんだろ！」

俺様だったらもう少しかっこいい名前を付けるのによと、白薙がぼやく。

「僕はいいい名前だと思うけどな。一人一人名乗るのは大変だけど、チーム名があれば名乗りやすいからね。」

紅羽はパンと手を打ち鳴らして、感想を述べた。

「しかし……異端者、か。端から見れば、我らはそのような存在なのだな。」

「まあ、自分から志願してハートブレイカーになりたがる人間はそれほど居ないからね。“異端者”と言われても、反論のしようがないさ。」

眉を潜めてぼつりと漏らす蒼影に、黄涙はいつもの軽い調子で言う。

「まあ、いいんじゃないの？そういう奴らには、勝手に言わしときや。ちよつかい出してきやがったら、力で黙らしてやりゃいいしな。」

「黙らす……は、ちよつと乱暴すぎるかな。けれど、力を魅せつけるぐらいなら黙認するよ。」

「……って、なんで上から目線なんだよ!!」

白薙はファインディング・ポーズをして喚いたが、黄涙は笑顔で受け流している。

「異端者、かあ。なんとか教みたいで、少し嫌かもー。カードゲームのトランプってことにしようよー!!」

「確かにそれでも矛盾はせぬな。トランプにもマークが四つある故、“四重奏”でもおかしくはない。」

「つつつか、話ズレてきてねえか？」

盛り上がる紅羽と蒼影の間に、呆れ顔の白薙が横入りする。

「とにかく……名前も決まったことだし、俺達は今日からトランプ四重奏というチームとして活動しよう。」

「活動って……どんなことするの?」

きょとんとした表情で、誰もが思う質問を投げかける紅羽。

「今まで、一人一人分かれてやっていた狩りを四人一緒にする。同じ時間にこのビル屋上に集まる。誰かがピンチの時は協力し合う。とまあ、こんな内容でどうかな?」

黄涙の提案に、

「いいと思うよー!」

明るい声で即答したのは紅羽。

「四人一緒に行動すんなって面倒くせえな。ま、暇してたところだし、俺様をリーダー役ってことにしてくれりゃ、それでもいいぜ。」

条件付でと高飛車に答えたのは白籬。

「悪くはないな。」

短く返したのは、蒼影。

そんなこんなで、トランプ四重奏という最強ハートブレイカーのチームが結成されたのだった……。

「話は変わるけど……」ついでに？

紅羽の話が一段落してから、思い立ったように山茶花が言った。

「何だよ、茶花？」

「なーに、山花ちゃん？」

視線を山茶花に向け、白薙と紅羽がほぼ同時に聞き返した。

「白薙と黄涙……まだ仲直りしてないの？」

「……不躰に何訊いてんだよ、茶花。」

山茶花の質問に、見るからに不機嫌顔になる白薙。

「少し気になっただけ。この前は四人で来てたけど、今日は二人だから。またケンカしたのか、仲直りしてないのかのどちらかと思つて。」

「えっと……。」

紅羽は言っているのかなと聞くように上目使いで白薙を見た。

「別にケンカしてるわけじゃねえよ。ただ、何つつうか……」

白薙はフイと視線を背けて口ごもる。

「何？」

「妙に距離を置いてやがんだよ、黄涙の奴。俺様が話しかけたら用事思い出したとかでその場から姿消して、なるべく俺様の近くに居ないようにしてるみてえだしな……。」

「黄涙の方が距離を？」

意外だというように首を傾げる山茶花。

そうなんだよねえと紅羽が頷く。

「黄涙……最近、ちょっと様子がおかしいんだよー。いつも通りにここに笑っていたかと思えば、急にため息ついたりー。どうしたのって訊いても、何でもないさって誤魔化しちゃうもん。」

「ふうん。」

そっけなく返す山茶花だったが、視線は何か考えているかのように右斜め前に向けられていた。

「全く、わけわかんねえよな。俺様はもう気にしてないつつのによ……。」

「だったら、黄涙にそう伝えればいいんじゃないの？」

「ばっ……言えるかつつの！俺様も暇じゃねえんだ。話はそんだけなら、帰るからな！」

白薙は照れたようにほんのり頬を赤くして言うと、小槌で空間に切れ目をつくりさっさと帰っていつてしまった。

「白薙、話はまだ終わってないんだけど……って、聞こえてないか。」

「ごめんね、山花ちゃん。白薙と黄涙のこと、心配かけさせちゃったみたいで。」

ぺこりと頭を下げながら、紅羽が申し訳無さそうに謝る。

「別に紅羽が謝ることないと思うけど。」

「うっん、僕にも原因があるのー。日常茶飯事だと思って、ケンカを止めなかったから……。」

「謝る代わりに、そのケンカのこと……聞かせてくれる？」

山茶花の頼みに、いいよーと快く答え、紅羽は話し始めた。

「今日から遡ること、十日前。山花ちゃんに、“テスト期間三日前からテストが終わるまでは立ち入り禁止令”を出された僕達は、いつものようにジャンハンで一番高いビルの屋上に居たのー。そこで雑談してたんだけど……白薙がどうしても山花ちゃんのとこに行きたいって駄々こねちゃって。」

「なんで？」

「よくわかんないけど……『茶花を守るって宣言したのにこれじゃ見守ってるだけでいざという時に助けられなえだろうが』って。それに対して、黄涙が『女性が嫌がっているのに近くに寄るのは紳士のやることじゃない』って言ったら、『守るって宣言した女の一人も守れねえのが紳士なら、俺様は紳士になんてなる気すら起きねえよ』って反発しちゃって。」

「何となく、想像つく状況だね。」

山茶花の頭に、黄涙に詰め寄る白薙の姿が浮かんだ。

「そしたら、黄涙がね……『駄々こねるなんて、君の歳に似つかわしくない。もっと大人になった方がいいよ』って忠告したの。その言い方が良くなかったみたいで、白薙は『上から見下したような言い方してんじゃねえよ！子供で悪かったな！元から気に入らねえが、更にお前のこと嫌いになったっつうの！！』って早口で立てしまくって、どっか消えちゃって……。後は山花ちゃんも知ってる通りだよー。」

「白薙誘拐事件に結びついたってわけだね。」

山茶花は全てを理解したように、軽く二度頷いた。

「嫌い、か……面と向かって言われると、きつい言葉だね。黄涙が落ち込むのも仕方ないことか。」

「どうしよう、山花ちゃん？このまま、二人が仲直りできなかったら……」

「黄涙が白薙のどちらかがトランプ四重奏をやめることは必至。最悪の場合、トランプ四重奏解散かもしれないね。」

淡々と考えを述べる山茶花と、そんなの嫌だよと半泣きで訴える紅羽。

「何とかならないの……？僕は黄涙も白薙も大好きだから、居なくなっちゃったら嫌だよ！」

「私に訊かれても……。」

「うつ……お願い、山花ちゃん……解散なんて……わああん!!」

「えっ……わ、わかったから泣かないでよ、紅羽。」

両手で両目をこすりながら大泣きする紅羽を、山茶花は彼の髪を撫でながらあやした。

「……何とかしてみるから。だから、泣き止んで、紅羽。」

「ぐすっ……本当に……?」

「うん……私にも責任はあるようから。黄涙を説得してみるよ。」

上手くいくかはわからないけど、と付け加えると山茶花は紅羽に耳打ちしたのだった……。

軽快なリズムの着信音が響く。

話題の青春ドラマのエンディングテーマ曲だ。

黄涙は、ケータイ電話を取り出し通話開始ボタンを押す。

「もしもし？」

『あつ、やっと繋がった！もしもし、黄涙？紅羽だよ！』

電話からは、声変わりする前の少年の声が聞こえてきた。

『山花ちゃんの家に来て！今すぐにー！』

「……………ごめん。それどころじゃないんだ。切るよ。」

『ええっ？黄涙、話を……………』

ピツと通話終了ボタンを押し、黄涙は電話を切る。

「終わったか？」

ケータイ電話をズボンのポケットにしまい込む彼の背後から、ドスの利いた声が響く。

「うん、待たせて悪かったね。」

にこやかに微笑みながら、黄涙は体ごと振り返る。

その瞳に映ったのは、十人ほどのいかつい男達の姿。

十人共、空中浮遊しているハートブレイカーだ。

その手には、ハンマーや鎖鎌にナイフなど物騒な武器ばかりが握られている。

「仲間を呼んだのか？」

リーダーらしい、もつとも体格のいいスキンヘッド頭の男性が尋ねる。

違つよと首を振る黄涙。

「ただの間違い電話さ。適当にあしらって切ったよ。」

「けっ！下手な言い訳しやがるな、黄涙。その余裕がいつまで続かなか見物だぜ！」

いかにも下っ端というような、リーダーの後ろに居た背の低い男が言う。

「余裕？この人数相手にそれは無いよ。それでも、緊張してるんだけど。」

黄涙の顔から笑みが消えた。

左手には、いつの間に取り出したのか、クルタナが携えられている。

「野郎共、あのスカした奴をやっちまいな！！」

「おう!!」

リーダーの言葉を合図に、男達は黄涙に向かって一直線に駆け出す。
真夜中のジャンハンビルの屋上に、月よりも鮮やかな赤を持つ鮮血
がパツと散ったのだった……。

（戻るか……言い過ぎたことを謝るべきだろう。）

過去から現実へ意識を戻し、蒼影はフツと宙に飛び上がる。

繁華街の人通りは絶えず、明かりも消えることはない。

しかし、時間帯が遅いためか多少は賑やかさが落ち着いていた。

やがて、ビルの屋上まで数十メートル地点に着いた蒼影は、異変に気付いた。

（むっ……なんだ？騒がしいようだが……。あの場所には黄涙だけしか残っていないはず……。まさか……？）

嫌な予感が胸をよぎる。

蒼影は飛ぶ速度を、最高速まで上げビルの屋上へ急いだ……。

「切れちゃった……。」

「……切れたね。」

紅羽の言葉を山茶花が繰り返す。

「それどころじゃない、か……。何かあったのかな？」

「わかんないけど……黄涙の様子がいつもと違う。山花ちゃん、僕……ジャンハンに戻ってみるよ！」

「うん、わかった。何かあったら、また教えて。」

了解つと元気に返し、紅羽はブリューナクで空間を切りあたふたとジャンハンへ戻っていく。

（何も無いといいけど……。）

山茶花はそう願いながら、窓の外に視線を移す。

空は灰色に曇り、太陽は曇の中に姿を消している。

一雨来そうな天気だ。

山の方から、ゴロゴロと雷鳴も轟き始めていた……。

ジャンハンビルの屋上。

「なんだよ、これ……。」

降り立った白薙は、地面を見下ろして絶句した。

錆びた鉄のような独特の臭いが辺りに充満している。

コンクリートで固められ地面には、十一人の男性ハートブレイカーの姿。

そのいずれもが体のどこかに傷を負い、地面に赤黒い血を流して倒れていた。

その中には、黄涙の姿もあった。

「白薙！」

「蒼影……何がどうなってんだよ？」

「嫌な予感がよぎって来てみれば……この様か。今は黄涙の無事を確認するのが先だ！」

呆然と立ち尽くす白薙を促し、蒼影は黄涙に駆け寄る。

「黄涙！しっかりしろ！何があった！？」

「黄涙！何、寝てやがんだよ！この状況を説明しやがれ！」

二人が体を揺らすと、黄涙はわずかに目を開けた。

左脇腹と右肩に傷を負い、そこから出血があるが、意識はまだ失われていないようだ。

「白薙……？蒼影……？」

「傷はそれほど深くはない。気を確かに持て！」

「ふふっ……大丈夫だよ……。少し……疲れただけだから……。」

黄涙は荒い呼吸をつきながらも、微笑んでみせた。

「この人数相手に一人で戦ったのかよ……。何、バカなことしてやがんだ！」

「バカなこと……かもしれない。けれど、俺は……この場所を……ギャングなんかに渡したくなかった……。俺達四人の……“家”だから……。」

「ここを守るため……？あっ……起きあがんじゃねえよ！」

強い口調でたしなめる白薙に大丈夫だよと返し、黄涙はゆっくりと上半身を起こす。

「渡したい物が……あるんだ……。」

「そんなもんは後でいいつつの！じつとしてろ……あつ……。」

黄涙は力を振り絞って白薙のポケットに“ある物”を入れると、安心したかのようにそのままの体勢で目を閉じた。

全身から力が抜け、両腕がだらりと垂れ下がる。

「おい、黄涙！」

「気を失っているだけのようだ。あまり揺らさない方がいい。」

「……わかった。」

蒼影のアドバイスに従い、白薙は黄涙の体をそつと地面に横たわせる。

それから、ポケットに突っ込まれた“ある物”を取り出した。

「……ちゃっかりしてやがるぜ。」

白薙は、ははつと空笑いしながら“ある物”を握りしめた。

それは五枚のトランプカード。

スピードマークが二枚と、他のマークが一枚ずつ。

ポケットに入れられていたため、血液は一切付着していないが、よれよれに歪んでいた。

「こんな状況においても、タダでは起きないか。……黄涙らしいな。」

蒼影は黄涙の顔を見下ろして呟く。

地面に横たわった黄涙は、すうすうと小さな寝息を立てていた。

「バカだよな、黄涙は……。ほんつとに仕方ねえくらいバカだ……。」

「白薙、おまえ……。」

「泣いてねえつつつの！埃が目に入っちゃって痒いんだよ……。」

右腕で目をぐしぐし擦りながら、白薙は蒼影に言葉を返す。

声が僅かにだが震えて、鼻声に近い声になっていた。

「……まだ、何も言っていないんだが。」

「だったら、尚更何も言うんじゃねえよ！黄涙には、このことは絶対言っなよ！言ったら、絶交だかな！！」

「心得た。」

蒼影はこくりと頷く。

「紅羽もだ！！」

「わわっ！？バレちゃってたの………？」

屋上の給水塔の裏から、紅羽が顔を見せた。

「おまえのちょこまかした気配は、わかりやすいんだよ!」

「うー、見つからないように頑張ったのに……。」

なんで見つかったんだろうと小首を傾げる紅羽に、白薙は目を細めた睨むような視線を送る。

「話、聞いてただろ?」

「えと……僕、今来ただけだから……その……」

「“はい”か“いいえ”で答えやがれ!」

「はっ、はい!」

詰問された紅羽は、ビクツと体を震わせて敬礼姿勢で答えた。

紫色の朝日が、トランプ四重奏とギャング達に温かい日差しを浴びせかけていた……。

「うつ……ここは……」

「気が付いたみたいだね、黄涙。」

何時間眠っていたのか。

意識を取り戻しうつすらと開かれた黄涙の目に映ったのは、山茶花の姿だった。

「山茶花嬢……？ということは……ここは……」

「私の家だよ。」

黄涙はスローモーションのようにゆっくりと上半身を起こすと、辺

りを見回す。

整理されたシンプルな机、白を基調とした質素なベッド、順番と高さ通りに本が並べられた本棚、黄緑色の絨毯……。

「確かに……見慣れた山茶花嬢の部屋だ……。だけど、どうしてこんなところに俺は……。」

「他の三人が運んできたんだよ。君が腕と肩に包帯を分厚く巻かれてきた時は何事かと驚いた。まあ、命に関わるようなケガじゃないようだから良かったけど。」

トントンと机でプリントの端を揃え、山茶花は黄涙に向き直る。

右は緑で左は黒というオッドアイの瞳が、優しげに彼を見つめていた。

「白薙達は……。」

「ジャンハンに戻って、ビルの屋上を掃除してくるって言ってたよ。今日は月に一回の掃除日だとか何とか。」

「掃除……そういえば、そうだったかな。」

ふふつと苦笑して、黄涙は言葉を続ける。

「あの三人には、ずいぶん迷惑をかけてしまったなあ。謝つとかな
いと。山茶花嬢にも……ごめんね。」

「……黄涙はいつも謝ってるよね。たまには“ごめん”じゃなく
て“ありがとう”って言ったらどうかかな。」

「あつ……それもそうかな。ありがとう、山茶花嬢。」

どういたしましてと返すと、山茶花はやり終えていないプリントに
視線を戻し、解き始めた。

「言い忘れたけど……」

「んっ？何かな？」

「白薙達三人……十分ぐらいしたら帰って来るって言ってたから、

もうすぐ帰って……」

「たっだいまい、山茶花ちゃん、黄涙ー！」

噂をすれば影。

外側から窓を開けて入って来たのは、紅羽と白薙と蒼影の三人だ。

三人は部屋に降り立つと、黄涙の正面に横一列に並んで座る。

黄涙は、真ん中に座った白薙と目が合った。

「白薙……」

「……なんだよ、黄涙。」

「もう具合は良いのか、黄涙？」

気まずい空気を察して、蒼影が割って入る。

「起き上がれるくらいには回復してるよ、蒼影。」

「それなら良かったー。今度からは一人で無茶しちゃダメだよー？」

人差し指を前に出し、めつと口を膨らませる紅羽。

気を付けるよと黄涙が頷く。

「あ……えつと……白薙？」

「んっ。」

話しかけられた白薙は、ツンとした表情で黄涙の左手に何か冷たい物を押し付けた。

それは、炭酸入りの缶ジュースで何か英語で名前が書かれている。

「これは……？」

「察しろよな、そんなくらい。やるって意味だっつつのー！」

短く返すと、白薙はフイとそっぽを向く。

頬をほんのり赤く染めて、照れと恥ずかしさの入り混じったような表情だった。

「ありがとう。飲んでもいいのかい、白薙？」

「飲めてえなら飲みやいいだろ。」

「それじゃ、お言葉に甘えて……。」

黄涙は缶のプルタブに右手の人差し指をかける。

ほんの一瞬だが、白薙がにやっと不敵な笑みを見せたのを彼は見逃さなかった。

カチツと缶が開く音がして……

「ふふっ……俺がこ簡単に騙されると思ったのかい？」

「なっ……うわっ!？」

次の瞬間、素早く向きを変えられた缶から白薙に向けて茶色い液体が吹き出す。

「わっ!？」

「……っ!？」

とっさに左右に避けた紅羽と蒼影はその惨事を避けられたが、予想もつかなかった事態に白薙だけは間に合わなかった。

髪の毛と顔全体と首もとが、茶色い液体にびっしりと濡れ、絨毯にばたばたと滴が落ちている。

「この野郎……よくもやりやがったな!」

「先に仕掛けたのは、白薙の方だろ。あれだけ冷えててシェイクされたら……こうなることはわかりきってるからね。わざと冷たい、それも缶ジュースをくれたんだろ?」

半分ほど残った缶ジュースをグビグビと飲み干し、にっこり笑顔を
見せる黄涙。

「あの……忘れてるかもしれないけど、ここは私の部屋なんだけど。」

心底呆れ返ったような瞳で、ワーワー騒ぐ四人を見つめる山茶花だった……。

「経過を報告せよ、闇正。」

ジャンハンにひっそりとそびえ立つログハウスの中。

中年から老年頃に見える男は、闇正というらしい片膝立ちしている
忍び装束の男に言った。

「現在、三十枚ほど集まっているようです。覚醒は起きていません。」

「ご苦労。光幻……紫月の考えは？」

光幻と呼ばれたのは、闇正の傍らに立つ女性。

こちらはスーツ姿で、年は闇正より少し上に見える。

「我が主……紫月様は、再び彼らに挑むとおっしゃっています。トランプという餌を持って。」

「ふむ……引き続き、観察を続けよ。」

闇正と光幻は、拝礼をするどこかへ去っていったのだった……。

-
T
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d
...
-

真夜中のジャンハン繁華街に、一人の赤ん坊の泣き声が響いていた。

一歳にも満たないその赤ん坊は、青いゴミ箱の上でひたすら泣き続けていた。

恐らく、繁華街中にその声は聞こえているだろうに、誰一人として赤ん坊に近付くことはない。

皆、安易に手を差し伸べて、一生その子のお守りをするようになるのを恐れているのだった。

「おっ！人間の赤ん坊じゃねえか。こりゃ、いい獲物だぜ！」

「兄貴……純粹な赤ん坊のハートはきつと価値が高えですぜ。壊しちゃまいやしよう！」

そんな中、二人の男性ハートブレイカーが赤ん坊に近付いてきた。

ジャンハンで一般的に“ギャング”と呼ばれる者達だ。

耳や鼻に派手なピアスをはめ、金色のモヒカン頭やスキンヘッドのてっぺんに盛りかつらをするなど奇抜な髪型を好んでいる。

「よしよし、俺達がいい夢見せてやるからな……ニヒヒヒ。」

「怖くない、怖くない。一瞬で終わるからねえ……クハハハ。」

二人が、赤ん坊に手を触れられるほどの位置まで近づいた時。

「……その赤ん坊には、手を出すな。」

どこからか、諫めるような低い声が聞こえてきた。

「だ、誰だ……うあつ!？」

“兄貴”と呼ばれた男の方が、鈍い悲鳴を上げて地面に仰向けに倒れる。

胸の真中に矢が突き刺さっていた。

「あ、兄貴! 大丈夫……ぐあつ!？」

続いて、子分らしきもう一人の男も倒れる。

こちらは、左肩に矢が突き刺さっていた。

「……………」

ギャング二人が倒れて動かなくなったのを確認し、一人の青年が姿を見せる。

顔の右半分を覆い隠す黒髪と青い瞳が印象的だった。

背中には、弓矢……雷上動。

彼はギャング達には見向きもせず、赤ん坊に向かって一直線に歩いて来た。

赤ん坊は相変わらず、えーんと泣き続けている。

「さて……どうしたものか。」

青年は赤ん坊を優しく胸に抱くと、赤い月を見上げて呟いたのだった……。

「かつわいい！何、その子？誰の子！？」

山茶花の部屋に入って来ての椿の第一声はその言葉だった。

部屋には、主の山茶花とトランプ四重奏の四人と桃華が円を作るようにして座っている。

“その子”と呼ばれたのはその中の誰でもなく、蒼影という青年に抱かれた赤ん坊だ。

「蒼影の子らしいぜ。」

あまり赤ん坊が好きでないのか、苦々しげに口を歪めて白薙が答える。

「えっ！？蒼影って、子供居たの？」

「違うよー、つきちゃん。蒼影がジャンハンで見つけたってだけのー。」

誤解させないようにと、紅羽がすかさず説明する。

「そ、そうだよね……本気でびっくりした！ねえ、蒼影？私にも抱かせて！」

「構わないが……」

蒼影は両手を伸ばす椿に、赤ん坊を渡す。

「かわいい！お母さんですよー、なんてね。」

数秒間はきょとんとして大人しく抱かれていた赤ん坊だったが、徐々に表情が強張っていく。

「やっぱり……無理だったか。」

「えっ、何が？」

黄涙の言葉に椿が聞き返した瞬間。

「あっ……うっ……うえええーん！！」

「きゃっ！？また泣き出しちゃったわね……。」

桃華が思わず耳を塞いでしまうような大音量で、赤ん坊が泣き出したのだ。

「な、なんで！？な、泣かないでよ。」

「蒼影以外の人に抱かれると、泣いてしまっらしいんだ。」

「うん、椿だけじゃなくて私が抱いても泣かれた。」

困惑しながら蒼影に赤ん坊を返す椿に、黄涙と山茶花がフローするように言った。

赤ん坊は蒼影の腕の中に収まると、何事も無かったかのようにキヤツキヤツと笑っていた。

「蒼影君のことを父親だと思っているみたいなのよ。」

と、桃華。

鮮やかな赤い瞳が蒼影のことを羨ましそうに見つめている。

「蒼影も育てようと思ってるみてえだしな。俺様の言葉……間違ってるねえだろ。」

「本当の親子みたいだねー。蒼影って、“お父さん”って感じがするしー。」

白薙は相変わらず口元を歪めたまま、紅羽は赤ん坊に笑顔で手を振りながら言った。

「育てるとは言っても、それはあくまでこの赤ん坊の両親が見つかるまでの話だ。」

「正論だね。赤ん坊にとってもその方がいい。」

赤ん坊の茶色い髪の毛を撫でながら淡々と話す蒼影に、黄涙が頷く。

「うーん……。」

「んっ……？どうかした、椿？」

「両親のところに返すまで、蒼影が父親なんですよ？でも、母親は誰になるの？」

椿の唐突で予想外の質問に、山茶花はえっと少々呆れたような顔をした。

「いきなり、何を言い出すかと思えば……。」

「父親だけだったら、赤ちゃんが可哀想でしょ！ねっ、蒼影？」

「う、うむ……それがし某には何とも言えぬが……。」

蒼影は左手人差し指で額をかきながら、助けを求めるように黄涙に視線を向ける。

「悪くはない考えかもしれないけど……シングルファザーも最近は少くないから、こだわる必要はないんじゃないかな。」

やんわりと意見を却下する黄涙に、必要はあるよと椿が食い下がる。

「絶対、母親も要るって！そう思うよね、紅羽？」

「ぼ、僕？えっと……んと……し、白薙はどう思うー？」

紅羽は右手人差し指で頬をかきながら、白薙に質問を流す。

「俺様に聞かれても知るかよ。キハルの気が済むようにすりゃいいだろうが！」

やや苛立ち混じりに、白薙が意見を返す。

「よっし、決つまり！じゃ、選んで蒼影！」

「……選ぶ？何をだ？」

「もう！話の流れから察してよ。あたしと山茶花と桃華さんの三人で、母親役は誰がいい？」

「なっ……。」

蒼影は面食らったような顔で、しばし言葉を失ってしまった。

山茶花と桃華も、えっと目を丸くしている。

「あのさ……椿？少し悪ノリしすぎなんじゃ……」

「あたしは真面目に言ってるよ！事情知ってるのは、あたし達だけじゃん。赤の他人に頼むわけにもいかないしさ、これが一番自然な流れでしょ？」

「お、お姉ちゃんは選んじゃダメよ！お姉ちゃんには白ウルフちゃんが居るんだから……。」

両手人差し指を突き合わせてもじもじし始める桃華に、変なこと言うんじゃねえよと白薙が怒鳴る。

「俺様と桃華姉は姉弟きょうだいだろうが！別に桃華姉が誰とどうしようが興味ねえつつつの！」

「まあ、ひどい！白ウルフちゃんは、お姉ちゃんが悪い人に引つかかって不幸の道を歩めばいいって言うのね……。ひどいわ、うつつ。」

「そ、そんなことは言ってねえだろうが！泣くんじゃねえよ、桃華姉……。俺様が泣かしたみたいで罰悪いだろ……。」

さめざめと泣き出す桃華を、必死で宥めようとする白薙。

「……何、この空気？」

「うーん……。桃華さんは予約済みか。あたしと山茶花ならどっち選ぶ、蒼影？」

呆れるを通り越してどうでも良くなってきた山茶花と、笑顔で問いかける椿。

「う、うむ……。」

「椿嬢。君も山茶花嬢も学校に行くだろ？俺達四人も桃華嬢もやるべきことがある……。ここは誰かに任せっきりじゃなくて、全員で

育てていくってことでどうかな？」

熟考する蒼影を横目に、黄涙は和やかな笑みを向けて椿に提案。

赤ん坊が何を悩んでるのと言わんばかりに、たあと無邪気に首を傾げた。

「そうしようよ、椿。」

「うーん……確かに一理あるかも……。わかった……そうしようか！」

意外にもあつさりと納得した椿の様子に、山茶花以下六名は啞然としてしまった。

「んっ？どうかした？」

「どうかしたって……あんなに頑固に言ってたのに、本当に納得できたの、椿ちゃん？」

一同を代表して、桃華が目をパチパチさせながら訊く。

もちろんですと、椿は即答した。

理由について、彼女は

「よく考えてみたら、この中の誰かが世話するとしても、結局はみんなで見ることになりそうだし。母親役……あたしにも山茶花にもちよつと重荷すぎるかなって。」

右頬をかきながら苦笑いして、しれつと言つてのける。

「つきちゃんが納得したなら、問題無くなつたねー。よし、頑張つて赤ちゃんを育てようー!」

一段落したのを悟つた紅羽が右手を前に出して

「うん、頑張ろう。」

「乗り気じゃねえけど……。」

「了解だ。」

トランプ四重奏の残り三人が、それぞれ利き手を重ねる。

なぜか、赤ん坊までたいつと手を出した。

「オカルトマニアの香川　　椿の名にかけて、やってやりましょうか！」

「……オカルト、関係ある？」

「お姉ちゃんが子育てかあ……。なんか、ドキドキするわ。」

椿、山茶花、桃華も手を重ねる。

かくして、赤ん坊育成アンド両親探しプロジェクトが開始された。

「……むっ？」

エイエイオーという掛け声の直後、蒼影が後ろを振り返る。

彼の後ろには、縦八十センチ、横百五十センチほどの開け放れた窓がある。

（気のせいか……？何か気配を感じたのだが……。）

電線と民家と灰色の雲に覆われた空に視線を向けながら、蒼影は青い瞳を細めたのだった……。

窓の外。

白い壁に全身を紺色服で覆った男二人が貼り付いていた。

「……………気付かれたか？」

向かって右側の男が押し殺した低い声で、隣の男に尋ねる。

「ギリギリ見つかってないと思いますがね。何とも言えません。」

隣の男はどちらともつかない返事をした。

こちらの男の方がきつちりした服装と容貌で、右の男より年下に見える。

「煮え切らん奴だ、おまえは。」

「煮え切らないって言えば……おでんが思い浮かんできました。早く赤ん坊を手に入れて、帰りましようよ。」

ふわああと大あくびをする左の男を見て、

「人選ミスだな、こりゃ……。」

右の男はため息混じりに呟いたのだった……。

「ねえ、これなんかどうかしら、白ウルフちゃん？」

「俺様に聞くなつつうの。赤ん坊背負ってる本人に聞きゃいいだろが。」

デパートのおもちゃ売り場。

桃華はもうこれで十一個目になるおもちゃを買い物カゴに放り込んでいた。

斜め後ろには、うんざり顔の白薙と、背中に追った赤ん坊をあやす蒼影の姿。

「相変わらず冷たいんだから、白ウルフちゃんは！いいわよ……もう聞かないから。」

「……………」

「蒼影ちゃんはどう思う？まだ足りないかな？」

「十分すぎると思うが……うっ。」

とあつと赤ん坊に肩を叩かれ、蒼影は顔を歪める。

「大体、なんで俺様が二人に着いて来なきゃならねえんだよ！子供じゃねえんだから、買い物ぐらいできるだろうが、桃華姉！」

「まあ！蒼影ちゃんと二人きりで何かあったらどうするのよ！白ウルフちゃんは心配じゃないの！？」

「何かって何だよ！？蒼影が桃華姉に変なことをするわけねえだろうが！」

「そんなのわからないわよ？蒼影ちゃんだって男の子だもん。」

白薙の激しい剣幕に負けることなく、桃華も同じくらい激しく言い返す。

（これでは、一人で来た方がマシだ……。）

背中の赤ん坊をあやししながら、蒼影は深いため息をついた。

周りに居た親子や夫婦が、白薙と桃華の口ゲンカに好奇の視線を向けている。

「大体、白ウルフちゃんはねえ……」

「それは桃華姉だろうが!!」

「むっ……?」

どうするかと考えていた蒼影だったが、不意に視線を感じて振り向く。

「あつっ……。」「

赤ん坊はうるさいなあと言いたげに、両手で両耳を塞いでいる。

「蒼影はどっちの味方だよ……って、何を見てんだ？」

「どうかしたの、蒼影ちゃん？」

蒼影の様子に気づき、白薙と桃華は一時ケンカを中断し、視線の先を追う。

ぬいぐるみコーナーの後ろ。

何か紺色の物体が動いていたが、三人の視線を感じたようでピタリと動き止めた。

「何かしら、あれ？」

「……頼んだ。」

「頼んだって……えっ？ちょっと、蒼影ちゃん！」

蒼影に赤ん坊を手渡され、桃華は戸惑いの表情を浮かべて赤ん坊を抱く。

「おい、蒼影！」

白薙の呼び止める声は聞こえていたが、蒼影は振り返ることなく紺色の物体に向かって歩み寄る。

と、次の瞬間。

紺色の物体が凄まじい速度で走り出したのだ。

「わっ！？なんだ!？」

驚いた買い物客達が空けた道を、その物体は縫うように逃げていく。

「待て……!!」

蒼影も全速力で紺色の物体を追う。

「あ……う……えーん!!」

「蒼影……」

「どうす……」

白薙と桃華の声、そして赤ん坊の泣き声が遠ざかっていく。

ベビー服コーナーを通り過ぎ、ゲームコーナーの角を曲がった先にある布団コーナー。

紺色の物体は布団の後ろにサッと身を隠した。

「そこか！」

蒼影は闊歩しながら近付くと、布団に手をかける。

だが、布団をめくり紺色の物体の正体突き止めることはできなかった。

「動くな。」

ドスの利いた低い声が耳元で聞こえ、蒼影は一瞬にして動けなくな
った。

「……っ。」

低い声の人物に後ろから羽交い締めになれ、首に刃渡りサバイバル
ナイフを突きつけられたのだ。

「叫んでも無駄ですよ、黒髪あにの兄さん。今、自分達が居る空間は、
人間には見えませんからね。」

布団の後ろから紺色の物体が正体を見せた。

全身紺色の服で身を包んだ二十代前半ほどの若い男性だ。

白いマスクで口を覆っているため、顔はよくわからない。

「……目的は何だ？」

「へへ、話がわかりますねえ、兄さん。心配しないで下さいよ。自分達が欲しいのは、兄さんの命じゃありません。赤ん坊の身柄ですから。」

「赤ん坊……。」

「兄さんが背負ってたあの赤ん坊ですよ。ただの赤ん坊じゃありません。幼いハートブレイカーとして未知の力を秘めた赤ん坊なんです。」

ベラベラしゃべんなど、蒼影を拘束する男が彼を叱りつけた。

「たくっ……だから、おまえと組むのは嫌だったんだ。おい、黒髪の坊主……赤ん坊はどうした？」

前半はパートナーである若い男性に、後半は蒼影に対しての質問。

サバイバルナイフの刃先が蒼影の首に当たり、少量の鮮血が首を沿うように流れ落ちる。

「……人に預けている。」

蒼影は全く動じる風もなく、毅然とした態度で答える。

「今、そいつはどこに居る?」

「……………」

「だんまりか、まあいい。一時間後に赤ん坊を連れて山女海岸まで来い。断つてもいいが、その場合赤ん坊を連れてる奴の身の保障はできねえ。関わった奴ら全員の口封じをしてやる。…………いいな?二度は言わねえからな。」

蒼影の返事を待たずに、紺色服の男二人は素早く走り去る。

自由になった蒼影が追おうとした時には、紺色服の男達の姿は見えなくなっていた。

(某としたことが…………軽率すぎたか。)

首から流れる血を右手の平で拭いながら、蒼影はやや後悔の色を顔

に出す。

空間が元に戻り、首を押さえる蒼影を数人の買い物客達が不思議そうに見ていた。

早足でおもちゃコーナーに戻った蒼影を、遅えぞと白薙が睨む。

泣き喚き、足をバタバタ動かす赤ん坊を桃華が必死にあやしていた。

「すまない……。」

蒼影は一言詫びを述べると、桃華から赤ん坊を抱き上げる。

「うええーん……たあ？」

その途端、何も無かったかのように赤ん坊は泣き止んだ。

「はあ……蒼影ちゃんが戻って来てくれて良かったわ。全然泣き止

んでくれないから、途方に暮れてたのよ……。」

桃華は脱力したように、近くの柱によたれかかる。

額からは一粒の汗が流れ、立っているのがやっとのようだ。

「俺様と桃華姉がどれだけ苦労したと思ってんだよ？親になるっつうんだったら、責任持って抱いとけよな！」

「以後、気を付ける……。」

短く返すと、蒼影は自分の腕の中で笑い声を上げる赤ん坊を見つめたのだ……。

「お帰り。……蒼影は？」

主の好みで質素な内装になっている部屋。

山茶花は、桃華と白薙と熟睡中の赤ん坊とを見比べながら尋ねた。

隣には、ミステリー小説に没頭している黄涙の姿がある。

「何か用があるとかで、どこか行っちまいがったぜ。」

と白薙。

「用事って？」

「そこまではお姉ちゃんも白ウルフちゃんもわからないわ。一緒に行きましょって言ったんだけど、一人で行かなきゃいけないからって断られちゃって。何だか……思いつめたような表情だったわ。」

大丈夫かしらねと桃華が首を傾げながら言った。

「……放っておいていいのかな、白薙？」

「なんで、俺様に訊くんだよ？黄涙に聞きゃいいだろ。」

白薙は不快な色を顔に出し、黄涙の方を見やった。

「…………黄涙はどう思う？本読んでないで何とか言つて。」

「んっ？ああ…………蒼影はさ、自分一人で解決できることは相談しないんだよ。関わってほしくないって感じなのさ。」

黄涙は、読み終えた小説を山茶花の本棚にしまいながらいつもの笑顔で答える。

「だけど…………あつ。」

山茶花の言葉を遮るかのように、彼女のケータイから音楽が鳴り響いた。

ドビュッシー作の『亜麻色の髪の乙女』。

（メール…………？）

登録されていないアドレスだ。

誰からだろうと小首を傾げながら、山茶花はメールを開く。

白薙と桃華はまだ何かお互いの欠点を言い合う口ゲン力中で、黄涙は涼しい顔で二冊目の小説に目を落としている。

『突然のメール、ごめんね。見慣れないアドレスで警戒しているかもしれないけど、どうしても伝えたいことがあってさ。少し前に、蒼影からメールがあつて、彼が山女海岸に居ることと何か重大な事態に巻き込まれていることがわかつたんだ。このメールを見終わったら、誰にも気付かれないように外に出て。』

送り主の名前は書かれていないが、山茶花には誰なのか何となくわかつた。

彼女は、静かに立ち上がると足音を立てないように部屋を出た。

ドアを閉める時に黄涙と目が合ったが、彼はすぐに小説に視線を戻し、不審に思う素振りは見せなかったのだった。

山女海岸は、あまり人が訪れない寂れた場所である。

潮風は涼しいが、海は濁っているため、海水浴には適していない。

海という以外は何の見所も無いその場所に、全身を紺色の服で包んだ二人の男が立っていた。

「来ますかね、黒髪の兄さん。」

男の内の若い方がぼつりと呟いて、

「必ず来る。赤ん坊は連れて来ないだろうが。最近の若者は、天の邪鬼な奴が多いからな。」

年上の男の方が肩をすくめて答える。

「それじゃ、ここで兄さんを待っている意味はあるんですか？」

「意味は……おつ、主役のお出ましのようだ。」

若い男は、年上の男の視線の先を見つめる。

黒い髪と青い瞳を持つ青年……蒼影が、こちらに歩いて来るのが見えた。

彼は早足で男達の二メートル前まで来ると、ピタリと足を止めクールな表情で二人を見返す。

「時間ジャスト。なかなか几帳面な性格なんですね、兄さん。」

「……………」

「けど……おかしいっすね。肝心の赤ん坊は連れて来ていない。兄さん……何のために来たんですかい？」

蒼影はそれには答えず、無言のまま背中にくくりつけた雷上動を取り構えの姿勢をとる。

「ははあ……そういうことですか、黒髪の兄さん。後悔しますぜ。」

「……仕方ねえか。なるべく、穏便に済ませたかったが。」

やむを得ないと、二人の男達は各々の武器を構える。

年上の方が棍（細い木の棒）で、若い方がランス（槍の一種）だ。

「恨まないで下さいよ？俺達も仕事なんですから。」

「行くぜ？……はっ！」

その男の言葉を合図に、二人の男と蒼影は同時に動く。

波がサーツと貝殻を散らかして、また新たな貝殻を打ち上げる。

「間合いに入られちゃ、その弓は役に立ちませんよね？」

「……っ！」

横薙ぎに振られたランスの攻撃を、蒼影は反射的に後ろに飛び退いて避ける。

「やるじゃねえか、坊主。」

賞賛しながら、年上の男は棍棒を振り上げる。

「くっ……！」

蒼影は、弓の弦とは反対側の木の部分で受け止める。

ガキッと鈍い音が響き、鉛のような重圧が彼の腕にのし掛かる。

「ほう……受け止めたか。だが……」

「敵は一人じゃないんつすよ、兄さん。」

年上の男が素早く身を屈めると同時に、蒼影の後ろからランスを構

えた若い男が向かって来る。

ランスの先端は日に照らし出されて、銀色にきらついていた。

速度からいって、左右に避けることは不可能。

そう即座に判断した蒼影は、

「ならば……！」

地面を強く蹴り、高く跳躍する。

白い砂と桃色がかつた貝殻が舞い散った。

ヒューと年上の男が口笛を吹く。

「おわつと!？」

勢いあまつた若い男は、砂に足をとられ顔面から倒れ込む。

「いったた……。」

「ぼやつとすんな！上だ！」

「へっ……。上……。わわっ！？」

若い男は転がり込むように、年上の男の方へ駆けて行く。

その背中に狙いをつけて、蒼影が矢を二本続けて射る。

「どあっ！？」

その内の一本が、男の背中をかすめ紺色の服を二センチほど裂き、健康的な小麦色の肌が露わになる。

「……………」

蒼影はスタッと地面に降り立つと、再び射る構えをとる。

矢の矛先は、年上の男に向けられていた。

「た、退散しようよ、所長！」

若い男は、身震いしながら所長と呼ぶ年上の男の背後に隠れる。

「できるわけねえだろうが、そんなこと！！もついい！おまえはその辺で逃げ回つとけ！！」

年上の男は怒鳴りつけると、蒼影に向き直る。

「おい、坊主。おまえさん……何者なんだ？そこまでして、赤ん坊を守ろうとする理由はなんだ？」

「……トランプ四重奏の蒼影だ。親が赤ん坊を守ることに理由などない。」

蒼影は簡潔に答えると、二本の矢を放つ。

「ほう……その歳で父親気取りか。トランプ四重奏を名乗るだけのことはある。」

棍で器用に矢を叩き払いながら、感嘆したように声を漏らす年上の男。

「見所ありそうな坊主だが……こつちにも譲れんわけがある。決着をつけようか！」

「望むところだ……！」

年上の男は一気に距離を詰め、蒼影は黄色い光を帯びた矢を二本放つ。

両者の武器が触れ合いそうになった時、

「待った！」

何者かが二人の間に割って入った。

「おう!?!」

「なっ……!?!」

目を見開き驚いたような二人の視線が注がれる中、乱入者は年上の男の棍に飛び乗り矢を払い落とした。

「し、所長!今、援護に……うわっ!?!」

若い男は年上の男に駆け寄ろうとしたが、何が何だかわからない内に身動きがとれなくなる。

縄のような物で、体をぐるぐる巻きにされてしまったのだ。

「ケンカ両成敗だよ!」

彼の頭上から間延びした少年の声が聞こえてきた。

「黄涙……紅羽……。」

蒼影は、乱入者と少年を交互に見ながら呟いた。

「やつほー、蒼影ー。来るなって言われると、余計来たくなっちゃったー。」

縄を操っている紅髪の少年……紅羽がおどけるように言っ

「紅羽から連絡を受けて、仲裁に来たんだ。双方、誤解しちゃっているようだからね。」

和やかに微笑みながら、黄色髪の青年……黄涙が説明口調で言った。

「はあ……二人共、速すぎるんだってば。少しは、私のペースにも合わせてほしいんだけど……。」

二人より少し遅れてその場に駆けて来たのは、茶色いポニーテール髪とオッドアイの瞳を持つ少女。

「山茶花……いや、ZOKKAまで来たのか……。」

「……なんで、合っているのに言い直すわけ？」

名前を呼ばれた山茶花は不服そうに言葉を返す。

「何者だ、おまえら？男の真剣勝負に手え出しといて、タダで済む
と思つて……。」

「誤解ですよ、ジャンハン北区総合相談所の五鷹^{いったか}所長。」

「なつ……。」

名前を言い当てられた年上の男は、面食らつたように数歩後ずさつた。

「相談所の所長……？」

「そうさ、蒼影。五鷹所長と部下の雁田^{かりた}さん。さしずめ……あの赤
ん坊の親から搜索依頼を受けて、保護しようとしていたつてところ

かな。」

全くもってその通りですと、雁田が賞賛の意を示すように手を打ち鳴らす。

「依頼を受けて赤ん坊を探していたところ、君達が赤ん坊を抱いているとこれを見かけたんです。事情を話して返してもらおうと思っただんですが、万が一君達が赤ん坊を狙う良からぬ組織だったらと思うと……念には念を入れて、反応を窺っていたんです。けれど、君はなぜ俺と所長を知っているんですか？名乗った覚えもないのに……。」

「待て、雁田。よく見てみりゃ、見覚えある顔だ……。もしかすると、黄涙とかいうおまえさん、ジャンハン警備局の鴨池局長の息子さんじゃねえかい？」

五鷹の質問に、義理のですけど黄涙が修正して答えた。

「とにかく、五鷹所長も蒼影も武器を収めて。積もる話は、話題の中心の赤ん坊が居る山茶花嬢の部屋でしましょう。……いいかな、山茶花嬢？」

「えっ……まあ、断る理由はないけど。なるべく手短によるしく。」

山茶花の許可を得て、六人は彼女の家へと移動を開始したのだった……。

「たくっ……俺様はベビーシッターじゃねえつつつんだよ！」

山茶花の部屋で、桃華と共に留守番していた白薙は、大層ご立腹だった。

隣に座る桃華に抱かれた赤ん坊が、彼の頬をペチペチと触っている。

「髪引つ張られるわ、ほっぺた叩かれるわ、エンエン泣くわ……もう、懲り懲りだぜー！」

「すまない……白薙、桃華殿。」

「謝らなくていいわよ、蒼影ちゃん。こう言ってるけど、白ウルフちゃんもまんざらじゃないんだから。」

イタズラっ子のように目配せする桃華に、勝手なこと言っなよと白薙の抗議が飛ぶ。

「たあたんたいい。」

「むっ……？どうかしたか？」

「蒼影がいつて、言っているんじゃないかな。“たあたん”は“父さん”って聞こえることだしね。」

自分に向かって小さな腕を目一杯伸ばす赤ん坊を、黄涙の解釈を聞いた蒼影は優しく抱き取る。

「あはは……すっかり懐かれたみたいですね、黒髪の兄さん。」

「……って、おまえは何和んでやかんだ、雁田！さっさと済まそう

と言ったのは、他でもねえおまえだろうが！」

「いてっ！そ、そうでした、すいやせん……。」

叩かれた頭の右側を撫でながら、雁田は姿勢を正し、おほんと一つ咳払い。

「黒髪の兄さんには、ちよいと酷な話ですが……赤ん坊を俺と所長に引き渡してもらえませんか？責任持つて、依頼者の元へ返しますんで。」

「依頼者……？言い回しが気にかかるけど、親じゃないってこと？」

山茶花が心に浮かんだ疑問をぶつける。

「それがその……赤ん坊の両親は既に帰らぬ人になって……母親のお姉さんが引き取るそうなんです。」

「帰らぬ人……か。何があったか気になるけど、赤ん坊の前で暗い話は止めたほうがいいよね。」

彼女は自分に言い聞かせるように言っと、それ以上の質問はしなかった。

「……心得た。もとより、この赤ん坊は育てる人間が見つかるまで預かると考えていた故、その人間が見つかったならば、某が育てる義理も由縁も無い。」

「いいのか、坊主？」

蒼影は深く頷くと、赤ん坊を任せるといように雁田の腕に預けた。

赤ん坊は泣きこそしなかったが、放心しているようにピタリと動きを止めた。

「我々には、やり遂げなければならないことがある。赤ん坊は、標的にされやすく邪魔になるからな。これで……良かったのだ。」

「蒼影……。」

「じゃ、確かに赤ん坊の身柄を預かりましたよ。」

雁田は赤ん坊を左腕でしっかりと抱き、三鷹は世話になったなと彼なりの礼を述べながら棍で空間に裂け目を作る。

空間の中に消えて行く二人の背中を見送る蒼影は、複雑そうに顔をしかめて微かに手を振っていた。

「またえ、たあたん。」

「……達者でな。」

蒼影と最後の挨拶を交わすと、赤ん坊の体は二人共々空間の中へ消えて見えなくなった。

「けっ！邪魔になるなんて、心にも無えこと言いやがって……。寂しいならそう言やいいのによ。」

「意地悪言っちゃダメよ、白ウルフちゃん！蒼影ちゃんは必死にこらえてるんだから！」

桃華に注意され、白薙はフンツとそっぽを向く。

「寂しいんだ、蒼影？」

「……多少な。その反面、安心もしている。これであの赤ん坊が危険にさらされることは無くなったのだからな。」

「それもそうだね。君達と居ると、あの子までトラブルに遭いそうだし。」

「……………」

痛いところを突かれたとばかりに、口を噤む蒼影。

そんな彼を見ながら、でもさ……と山茶花は続ける。

「退屈しなくていいかも。それに、なかなか父親してたよ、蒼影。」

「僕もそう思うよー。」

「うん、俺もそう思う。」

黄涙と紅羽も山茶花の意見に同意するように頷いた。

「お姉ちゃんもそう思うわ。白ウルフちゃんもそう思うでしょ？」

「だーから！俺様に訊くなっつうの！」

「白ウルフちゃんもそう思うって。良かったね、蒼影ちゃん。」

違っつうのと抗議する白薙を受け流しながら、桃華はふふつと優しい笑みを蒼影に向けるのだった……。

- T o b e c o n t i n u e d . . -

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7916g/>

トランプ四重奏（カルテット）

2010年10月9日05時11分発行